

平成 3 0 年 度

研究紀要

第 1 4 号

秋田県立横手清陵学院
中学校・高等学校

白熱した会議に見えたもの

信田正之

先日行われた分掌反省会議は、会議室全体が熱気に満ちあふれていた。

中高の全職員が会議室に集い、分科会形式でディスカッションしたのだが、普段は控えめな職員も、このときは身を乗り出しながら堂々と意見を述べている。気心知れた同じ分掌の仲間同士だったからなのか、それとも「定員割れの現状を打開し、いかに学校の活性化を図るか」という切実なテーマだったせいなのか。いずれにせよ会議は大いに白熱し、与えられた時間はあっという間に過ぎてしまった。最後の全体会を始めようにも、なかなか議論が収まらない。そのため、全体発表は2つの分科会からのみになってしまったのだが、進行役の教頭が機転を利かせ「せっかくの機会だから、どうしても発表したい人はいますか」と訪ねると、一人の若手教員が即座に手を挙げた。その積極性に心の中で拍手を送るとともに、「これこそがアクティブ・ラーニングではなからうか」と思わずほくそ笑む自分がいた。

この会議は、中高教頭によるTT授業とも言えた。そしてこの中には、練り込まれたいくつかの仕掛けが準備されていた。例えば、職員に主体感をもたせるため、あらかじめ分掌から提出された課題から共通テーマを選んだことや、少人数のグループにして全員が発言できるようにしたことなど。加えて、意欲のある職員に最後に発言させる機会を与えたことや、多様な答えが導き出せるよう視点の異なる分掌ごとにグループ編成をしたことなども見逃せない。

「多様な答え」について考えたとき、私はかつて本校で教諭として勤務していたころのある日の拙い授業を思い出す。その日、私はいつものように生徒全員に1つの問いを投げかけ、誰かが挙手するのを待っていた。大概の場合、発言するのは元気のある生徒に限られている。ところがその日、普段は目立たないある女子生徒が小さく挙手したのに気づいた。引っ込み思案で人前に立つのを苦手とする生徒である。手を挙げるのも気後れしたことだろう。その勇気に敬意を表し、私はその生徒を指名して発言させたところ、驚くべき答えが返ってきた。「教科書には〇〇と書かれています、それとは違う△△のような考えもあります」と。私は未だかつて、こんな回答をした生徒に出会ったことはない。返す言葉が見つからず、私は思わず「聞いたか？すごい答えだねえ」という言葉を漏らした。その瞬間、女子生徒が浮かべたはにかんだ笑顔を、私は今も忘れることができない。

平成12年12月に示された中教審答申では、「予測困難なこれからの社会を生きる上で、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見い出す力が求められる」という主旨のことが述べられている。「答えがない」という言葉は「答えが無数にある」と言い換えて差し支えないだろう。いずれ、これからの教育は1つの答えを教え込むのではなく、複数の答えを導く力や、その中で最も適切な答えを選択する力を養う教育への転換が強く求められている。教師主導の講義形式の授業は、もはや時代遅れなのだ。教科書に書かれた内容だって疑ってかかるべきかもしれない。そういった意味で、先日の分掌反省会議は、これからの授業の在り方を教師自ら体験する貴重な機会になったと言えるのではなからうか。

あの引っ込み思案な女子生徒は、卒業後に東北大学に進学したが、今はどうしているのか気になる。性格は変わらないだろうが、きっとその素晴らしい才能を発揮できる職場で、揚々たる人生を歩き始めているに違いない。

巻頭言

校長 信田 正之

— 目次 —

1 研究授業および校内研修の記録

(1) 中学校指導主事訪問 (社会、道徳、数学、英語、技術・家庭)

指導主事計画訪問一覧	1
佐藤 貴之	2
伊勢谷昭則	6
長沢留美子	10
佐藤 大輝	
加賀 直子	13
亀沢 貴子	
内藤 英典	17
マリー・エマニュエル	
栗津 奈々	19
土門 操	

(2) 高校指導主事訪問 (英語、国語、保健体育、数学)

指導主事訪問要項	22
佐藤 梨奈	24
三浦 俊喜	27
神谷 忠昭	30
奥 健悦	33

2 探究活動について

瀬々 将吏	36
-------	----

3 校外研修の記録

(1) 平成30年度秋田県高等学校教育研究会 地理歴史・公民部会研究大会 地理分科会

栗林 幸悦	40
-------	----

(2) 全国高等学校国語教育研究連合会 第51回 研究大会 秋田大会

宮原 公	48
------	----

(3) 平成30年度秋田県高等学校教育研究会 進路指導部会 秋季研究発表大会

進学分科会

細谷 進	62
------	----

(4) 平成30年度学校組織マネジメント研修講座

鎌田 正樹	64
-------	----

(5) 平成30年度教員派遣スキルアップ研修

小松 直鎮	68
-------	----

4 外務省高校講座の記録

佐々木 信吾・・・・・・・・・・ 69

5 年次研修の記録

(1) 高等学校初任者研修

土門 操・・・・・・・・・・ 79

草薙 祐子・・・・・・・・・・ 81

(2) 高等学校授業力向上研修

渡部 真・・・・・・・・・・ 83

(3) 高等学校中堅教諭資質向上研修

佐藤 梨奈・・・・・・・・・・ 84

瀬々 将吏・・・・・・・・・・ 89

萩原勢津子・・・・・・・・・・ 94

1 研究授業および校内研修の記録

(1) 中学校指導主事訪問

社会、道徳、数学、英語、技術・家庭

(2) 高校指導主事訪問研究授業

英語、国語、保健体育、数学

平成30年度 指導主事計画訪問一覧

研究主題

問題を発見し,豊かな関わりの中で
主体的・対話的に問題を解決しようとする生徒の育成

1 期 日 平成30年9月5日(水)

教 科 社会科

指導者 秋田県教育庁義務教育課 指導主事 高橋 浩 先生(社会科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
3	2年 A組	2年A組 教室	社会科	世界から見た 日本の資源・エネルギーと産業	佐藤 貴之

2 期 日 平成30年9月21日(金)

教 科 道徳の時間

指導者 南教育事務所雄勝出張所 指導主事 小坂 浩一 先生(道徳)

校時	学級	場 所	教 科 等	題 材 名	授業者
5	3年 A組	3年A組 教室	道 徳	よりよく生きる喜び 内容項目【D (22)】	伊勢谷昭則

3 期 日 平成30年10月23日(火)

教 科 数学科

指導者 南教育事務所 指導主事 赤川 渉 先生(数学科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
5	1年 A組	1年A組 教室	数学科	比例と反比例	長沢留美子 佐藤 大輝

4 期 日 平成30年11月2日(金)

教 科 外国語科(英語)

指導者 南教育事務所 指導主事 伊藤 文子 先生(外国語科)

校時	学級	場 所	教 科 等	単 元 名	授業者
2	1年 B組	1年B組 教室	外国語科 (英語)	Unit 8 イギリスの本 東京書籍 NEW HORIZON English Course1	加賀 直子 亀沢 貴子
3	3年 B組	3年B組 教室	外国語科 (英語)	Unit 5 "Living with Robots - For or Against" 東京書籍 NEW HORIZON English Course 3	内藤 英典 マリー エマニュエル

5 期 日 平成30年12月20日(木)

教 科 技術・家庭科(家庭)

指導者 南教育事務所雄勝出張所 指導主事 北林 悟 先生(技術・家庭科)

校時	学級	場 所	教 科 等	題 材 名	授業者
3	2年 A組	家庭科 総合室	技術・家庭科 (家庭)	豊かな食生活を自分の手で	粟津 奈々 土門 操

第2学年A組 社会科学習指導案

指導者 佐藤 貴之

1. 単元名 世界から見た日本の資源・エネルギーと産業

2. 目標

(1) 世界的視野や日本全体の視野から見た、日本の資源・エネルギーと産業に関する特色やそれらが抱える課題に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

(2) 世界と比べた日本の資源・エネルギーと産業に関する特色と課題について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。 【社会的な思考・判断・表現】

(3) 世界と比べた日本の資源・エネルギーと産業に関する特色と課題を分布図やグラフなど様々な資料から読み取ったり、図表などにまとめたりすることができる。 【資料活用の技能】

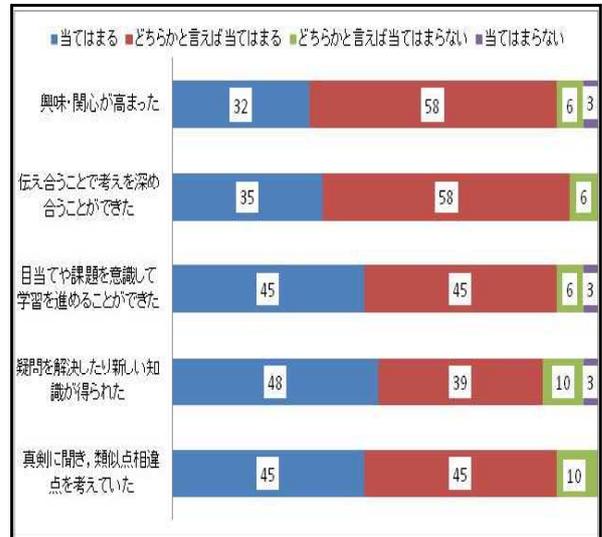
(4) 世界と比べた日本の資源・エネルギーと産業に関する特色と課題について、世界的視野や日本全体の視野から理解し、その知識を身につけることができる。

【社会的事象についての知識・理解】

3. 生徒と単元

(1) 生徒について (男子16名 女子17名 合計33名)

社会科に対する関心は比較的高く、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。1学期の授業の振り返りによると、授業の中で疑問を解決したり新しい知識を得たりすることに学習の価値を見出している生徒が多く見られる。一方で、自ら問いを設定して疑問を解決していく学習活動や、他の考えと比較しながら類似点や相違点を考える活動にマイナスの評価をしている生徒も見られる。この状況は社会科だけに見られる傾向ではなく、他教科の振り返りにも見られる本校の課題である。個人で考え解決したことを、他に広げて共通点や差異に気づきながら学びを深めることを苦手になっているのではないかと考えられる。



(2) 単元について

本単元は、中学校学習指導要領地理的分野内容(2)の中項目イ(ウ)「資源・エネルギーと産業」を基に構成されている。世界的視野から日本の資源・エネルギーの消費の現状を理解させるとともに、国内の産業の動向、環境やエネルギーに関する課題を取り上げ、日本の資源・エネルギーと産業に関する地域的特色を理解させることを主なねらいとしている。

日本は世界有数の工業国であり、多くのエネルギーを消費する国でもある。しかしながら、資源に乏しく、その大半を輸入に頼っている状態である。また、東日本大震災以降、エネル

ギー政策の転換を余儀なくされ、火力発電に大幅に依存している現状も見られる。地球温暖化対策や持続可能な社会形成のためにも、再生可能エネルギーなどの新エネルギーの必要性が高まっている。

都道府県単位で見ると秋田県や大分県など自然条件に恵まれている地域では、再生可能エネルギーを利用した発電方法の導入が進み、エネルギー自給率が高まってきている。秋田県では、内陸部の火山地帯で見られる地熱発電や、沿岸部の安定した風況を生かした風力発電、秋田杉の間伐材や稲わらを利用したバイオマス発電、ダムを利用した大規模水力発電や農業用水路を生かした小水力発電など再生可能エネルギー利用の先進地域である。秋田の自然環境や産業と再生可能エネルギーとの結びつきに着目することによって、将来の日本のエネルギー利用のあり方を考えることができる単元であると捉えている。

(3) 指導にあたって

今回の授業では、秋田県の事例を参考にして、自然的条件や社会的条件などの地域的特色を生かした再生可能エネルギーの利用の現状について理解するとともに、今後の日本のエネルギー利用のあり方について多面的・多角的に考察する機会を設けていきたい。

① 自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

「日本は資源に乏しく、その大半を輸入に頼っている」という現状をつかんだ後に、都道府県別のエネルギー自給率の資料を提示する。そこから、日本全体のエネルギー自給率が6%前後しかないのに比べ、大分県や秋田県は5倍以上エネルギー自給率が高いことや、秋田県内において鹿角市や湯沢市、にかほ市が自給率100%を超えている現状に気付かせたい。そして「なぜこの地域のエネルギー自給率が高いのだろうか。」という一つ目の問いにつなげたい。この課題を受けて、この地域の自然環境の特色などにふれ、再生可能エネルギーの利用が進められていることにつなげていく。身近な地域のエネルギー事情を確認することを通して、「なぜ秋田県では再生可能エネルギーの利用が進んでいるのだろうか。」という問いの設定に導きたい。

また、この問いを解決するために、秋田県内で再生可能エネルギーの利用が進められている理由をグループ毎に調査し、各種資料を参考にしながら結果をまとめさせる。秋田県の自然的条件や農林水産業などの社会的条件などに関連させて、秋田県で再生可能エネルギーを利用する利点や課題を追究させていきたい。

② 豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

「伝え合うことで考えを深める」ことを意図的に設定するために、ジグソー法を用いて調査内容の共有化を図る。風力や地熱発電、バイオマス発電などが秋田県で導入されている理由を個人が責任をもって説明し、それぞれの発電方法が秋田県で取り入れられている理由を共通点や相違点から探り、グループとしての結論をまとめさせたいと考えている。

さらに、今後の日本のエネルギー利用のあり方を考えるために、グループで将来の日本の発電割合グラフの作成を進めさせたいと考えている。全体で確認した火力発電や原子力発電の利点と問題点や、グループ内で共有した再生可能エネルギーの利点や問題点を参考にして、今後の日本ではどの発電の利用をさらに推し進め、シェアを拡大していけばいいかを根拠をもって考えさせたい。この活動を通して、持続可能な社会の形成を目指した日本のエネルギー利用のあり方を考えていくきっかけとしていきたい。

4 全体計画（総時間数 8 時間 本時 5 / 10）

時	ねらい	主な学習活動	評価規準	努力を要する生徒への手立て
1	○世界の主な資源分布やエネルギー消費量の分布に地域的偏りがあることに気付くとともに、世界では地球温暖化対策や持続可能な社会を実現するための具体的な取組が行われていることについて理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 世界の資源やエネルギー消費量などに関する各種分布図や統計資料を読み取り、地域的な偏りがあることをつかむ。 地球温暖化対策や持続可能な社会の実現に向けて世界がどのような取組をしているか、資源・エネルギーに関わる取組について調査し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種分布図や統計資料から、世界の主な資源分布やエネルギー消費量の分布に地域的偏りがあることを読み取っている。【資料活用の技能】 地球温暖化の原因や対策、持続可能な社会の実現に向けた取組について関心を高めている。【関心・意欲・態度】 	<ul style="list-style-type: none"> 資源の多い地域やエネルギー消費の多い地域を浮かび上がらせることができるよう、分布図に直接囲み線を書くよう助言する。
2	○日本の資源・エネルギーの自給率が低い現状や、発電量の内訳とその課題に気付き、将来的なエネルギー問題について関心をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 日本の資源・エネルギー自給率に関わる統計資料を読み取り、資源などを海外に依存している現状をつかむ。 日本の発電量の内訳を統計資料から読み取り、火力・水力・原子力各エネルギーの利点や問題点を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 資源を海外からの輸入に依存したり、発電方法が火力発電に偏ったりしている日本の現状について理解している。【知識・理解】 火力や原子力など各エネルギーの利点や問題点を資料や文献を活用して調査し、分類表にまとめることができる。【資料活用の技能】 	<ul style="list-style-type: none"> 各発電方法について、発電量の多さや環境に与える影響などに着目して調査するよう助言する。 プラスの内容、マイナスの内容を分類しやすいよう、学習シートを工夫する。
3	○秋田県のエネルギー自給率が日本でも上位であることに気づかせ、秋田で再生可能エネルギーの利用が進んでいる理由について多面的・多角的な視点から探ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 都道府県別のエネルギー自給率の統計資料から、日本国内のエネルギー自給率の地域的分布の特色を読み取る。 秋田県内で再生可能エネルギーの利用が進められている理由をエキスパートグループ毎に調査する。 ジグソー法を用いて、それぞれのエネルギー利用が秋田県で進められている理由をジグソーグループで説明し合い、その内容を共有化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本国内においてエネルギー自給率の地域的な偏りがあり、地域の自然的条件や社会的条件などに関連していることを資料から読み取っている。【資料活用の技能】 秋田県の自然的条件や社会的条件を生かして再生可能エネルギーの利用が進んでいることを、ジグソーグループ内で説明し合い、その内容を理解している。【知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 風力発電や地熱発電、バイオマス発電などの各発電方法毎にグループを作り、協力しながら作業が進めることができるよう配慮する。 個人の説明の時に滞らないようにするために、秋田でのエネルギー利用の利点や問題点を色付箋紙に書くよう指示する。
4				
5	○秋田県で再生可能エネルギーの利用が進められている理由を、地域の自然及び社会的条件と関連づけて考えるとともに、持続可能な社会の形成に向けて将来の日本のエネルギー利用のあり方について表現することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 前時に共有化した内容をもとに、秋田県で再生可能エネルギーの利用が進んでいる理由をジグソーグループ毎に話し合い、ホワイトボードにまとめて発表する。 ジグソーグループで「将来の日本の発電割合グラフ」を作成し、その作成根拠を考える。 今後の日本のエネルギー利用のあり方を自分の言葉でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 共有化した内容から、秋田県の地域的特色を生かして再生可能エネルギーの利用が進められている理由について考察している。【思考・判断・表現】 火力や原子力、再生可能エネルギーなど各エネルギーの利点や問題点をふまえ、持続可能な社会形成のための日本のエネルギー利用のあり方を自分の言葉で表現している。【思考・判断・表現】 	<ul style="list-style-type: none"> エネルギー利用のあり方についてまとめることが滞っている生徒に対して、環境問題や秋田県のエネルギー利用の様子などに着目してまとめるよう助言する。
6	○日本は、国土を高度に利用し、生産性が高い農業を各地の特色にあわせて行っていること、農産物の自給率の低下などの問題をかかえていることを理解し、今後の日本の農林水産業のあり方を自分の言葉で表現できる。	<ul style="list-style-type: none"> 生産規模や農業の方法など、世界と比べた日本の農業の違いを資料から見つける。 各種分布図や統計資料から、日本の自然条件に合わせた農業が営まれていることをつかむ。 日本の農林水産業の課題とこれからのあるべき姿について自分の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種農産物の生産分布や統計資料などから、日本の自然条件に合った特色ある農業が営まれていることを読み取っている。【資料活用の技能】 農産物の貿易自由化が日本の農業経営に与える影響や、食料自給率低下がもたらす問題について関心をもち、これからの日本の農業のあり方を具体的に考えている。【思考・判断・表現】 	<ul style="list-style-type: none"> 関心のある農産物を取り上げ、どの地域で栽培されているか、分布図に直接書き込んでみるよう助言する。 身近な食事の産地がどこかなどをイメージさせながら考えを深めることができるよう配慮する。
7				
8	○日本の工業地域の分布図や工業地域別生産額のグラフから、工業地域の分布の特色を読み取るとともに、国際競争の中で日本の工業が果たす世界的な役割について考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 工業地帯・地域の生産額、生産割合のグラフから、工業地帯・地域の特色を読み取る。 臨海型の工業地域と内陸型の工業地域では、どのような立地条件を生かしているか考える。 日本の工業の課題と対策について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 臨海型の工業地域や内陸型の新しい工業地域が形成されるようになったことを、交通網や貿易、立地条件など多面的・多角的な視点から理解している。【知識・理解】 国際競争力や国際分業、国内産業の空洞化など、日本の工業を取り巻く様々な課題や対策を調べ、今後の日本の工業が果たす役割について考察している。【思考・判断・表現】 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な工業地域が形成されていることを、小学校の既習内容を確認したり、各種分布図を電子黒板などを用いたりしながらつかませるようにする。
9				
10	○第三次産業の就業者数やその県別割合、生産額の変化を表した資料などを読み取って、国内の産業構造の特色やその変化を理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、日本の産業構造の特色と変化について調べる。 スーパー、コンビニなど様々な商業形態の特徴について表にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> コンビニなどの都市生活を支える商業やIT関連の産業や医療・福祉関係のサービス業など、社会の変化に合わせた第三次産業が成長していることを理解している。【知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 身近なコンビニやインターネットの利用について話題を引き出し、関心をもつことができるようにする。

5 本時の指導計画 (5/10)

(1) ねらい

秋田県で再生可能エネルギーの利用が進められている理由を、地域の自然及び社会的条件と関連づけて考えるとともに、持続可能な社会の形成に向けて将来の日本のエネルギー利用のあり方について表現することができる。

(2) 学習過程

学 習 活 動	形態	指 導 と 支 援	○評価規準 [評価方法] 【観点】 ☆努力を要する生徒への手立て
1. 前時の内容をふり返り、学習課題を確認する。	一斉		
学習課題：なぜ秋田県では再生可能エネルギーの利用が進んでいるのだろうか。			
2. <u>ジグソーグループで共有化したことをもとに、学習課題に対する答えをグループでまとめる。</u>	ジグソーグループ	<ul style="list-style-type: none"> 秋田県で再生可能エネルギーの利用が進んでいる理由を、秋田県の自然条件や農林水産業などの社会的条件などと関連させて、表現するよう指示する。 各発表から得られた共通した条件や特殊な条件に着目しながら、様々な視点を関わらせてグループとしての結論をまとめるよう助言する グループでまとめた内容をホワイトボードに記入させ、全体に提示できるよう工夫する。 	<p>○共有化した内容から、秋田県の地域的特色を生かして再生可能エネルギーの利用が進められてる理由について考察している。 [シート・発表] 【思考・判断・表現】</p>
深める問い：将来の日本のエネルギー利用はどのように進めていけばいいのだろうか？			
3. <u>「将来の日本の発電割合グラフ」を作成し、発表する。</u>	ジグソーグループ	<ul style="list-style-type: none"> 2000年と2015年の日本の発電量割合を示したグラフを基準に、将来の日本で推進した方がよいエネルギー構成を考えることができるよう、学習シートを工夫する。 グラフの割合の設定の際に、各発電方法の利点や問題点を根拠として記入するよう指示する。 各グループの意見を出し合った後で、割合の違いなどに着目して問い直しをし、問いに対する考えを深めさせる。 「2030年エネルギーミックス構想」を提示し、国の基本方針と比較できるようにする。 	<p>☆前時の共有化の際に用いた、秋田でのエネルギー利用の利点や問題点を記した色付箋紙に着目して、まとめるよう助言する。</p> <p>○火力や原子力、再生可能エネルギーなど各エネルギー利用の利点や問題点をふまえ、持続可能な社会のために日本のエネルギー利用のあり方を自分の言葉で表現している。 [シート・発表] 【思考・判断・表現】</p>
4. 今後の日本のエネルギー利用のあり方を自分の言葉でまとめる。	個人	<ul style="list-style-type: none"> 世界的な視点から見たエネルギー利用のあり方や、秋田県など地域的特色を生かしたエネルギー利用の推進のあり方など、様々な視点から考えをまとめるよう指示する。 	<p>☆各エネルギー利用のプラス・マイナス面に着目できるようにするために、学習シートや付箋紙、ホワイトボードを比較してまとめるよう助言する。</p>

※下線は(3)指導にあたって②「豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て」に関わる活動

第3学年A組 道徳の時間学習指導案

指導者 伊勢谷 昭則

- 1 主題名 よりよく生きる喜び 内容項目【D（22）】
- 2 資料名 「ひまわり」（中学生の道徳3「自分をのばす」 廣済堂あかつき）

3 主題設定の理由

(1) 道徳的価値について

学習指導要領の内容項目D（22）には、「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと」とある。中学生の時期は、人間が内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せてもつことを理解することができるようになってくる。しかし、なかなか自分に自信がもてずに、劣等感にさいなまれたり、人を妬み、恨み、うらやましく思ったりすることもある。その一方で、崇高な人生を送りたいという人間のもつ気高さを追い求める心も強くなる。

人間には誰にでも弱さや醜さがあることを自覚し、様々な悩みや壁にぶつかっても、ものの見方や考え方を变えることでそれらを克服し、前向きな気持ちで生活を送る生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 生徒について

男子21名、女子12名、計33名の学級である。男女ともに活発な生徒が多く、学級全体の雰囲気も明るい。学習や当番活動、学校行事などにも協力して取り組んでいるが、粘り強く課題に取り組む姿勢についてはさらに向上させる必要がある。また、中学3年生となって高校進学を控え、進路や学習に関する事など、悩みや不安を抱えている生徒も増えてきている。

普段の学習や生活において困難な場面に出会ったとき、簡単にあきらめてしまったり、投げ出したりする場面も見られる。その原因として、自信がなく自己肯定感がもてなかったり、困難を克服するための支えや励ましがなかったりすることが考えられる。

(3) 資料について

本資料は、病によって重い障害を負った主人公の姿が描かれている。それまで元気だった中学2年生の主人公は、突然の病による手術によって障害者となる。それまでとあまりに違う自分自身を受け入れられずに苦しみ自暴自棄となり、死んでしまおうとまで考える。しかし、秋の日に散歩に出かけ、周囲の景色のあまりの美しさに心を奪われる。そして、他の患者の一生懸命に生きようとする姿や子どもの笑い声にも気付き、障害を克服していこうと決意する。

資料の中での主人公の苦しみは想像を絶するが、同年代である主人公の苦しみに共感し、誰にでもある人間の弱さに気付くことができる。さらに、人間が生きることの真理を見いだした主人公の心が変化し、克服していこうとする姿から、人間の気高さや生きる喜びを感じ取ることができる。そして、主人公自筆の作文が読み手の心に強く訴えかけ、人間としてよりよく生きるための前向きな力を与えてくれる資料である。

(4) 指導について

まずは、突然、障害者になって投げやりになり、死にたいとまで思った主人公の心に共感させることで、誰しも内なる弱さがあることに気付かせたい。また、主人公が生きることの真理を見だし、弱さを克服していこうとする場面や主人公の書いた作文から、本来、人間は強さや気高さをもち合わせていることにも気付かせたい。最後に、主人公の生き方について考えさせることで、誇りある生き方や夢や希望など喜びのある生き方に気付かせ、それらを見いだそうとする心情を育み、何事もあきらめずに乗り越えようとする姿勢をもった生徒を育てていきたい。

① 自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

資料を事前に配付して読ませることで、全体を把握して自分の考えをもてるように配慮する。そして、読んだ感想を授業の導入で聞き合うことで、本時のねらいに関わる問いをつくることができるようにする。また、学び合いの中での生徒の発言を捉え、補助発問をすることで、新たな問いをつくることができるようにする。

② 豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

事前に資料を読ませることで、自分の考えをもたせる。さらに、グループでの対話を通じて、自分の考えをより明確にしたり、他者の多面的・多角的な考えから自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりできるようにする。そのために、自分と異なる考えに対して否定せず、なぜそう考えるのかを聞き合えるようにして、自分の考えを深めることができるようにする。

4 本時の学習計画

(1) ねらい

内なる弱さや醜さと戦い、克服していこうとする主人公を通して、誇りある生き方や夢や希望など喜びのある生き方を見いだそうとする道徳的心情を育む。

(2) 事前指導

事前に資料を読み、感想を書く。

(3) 学習過程

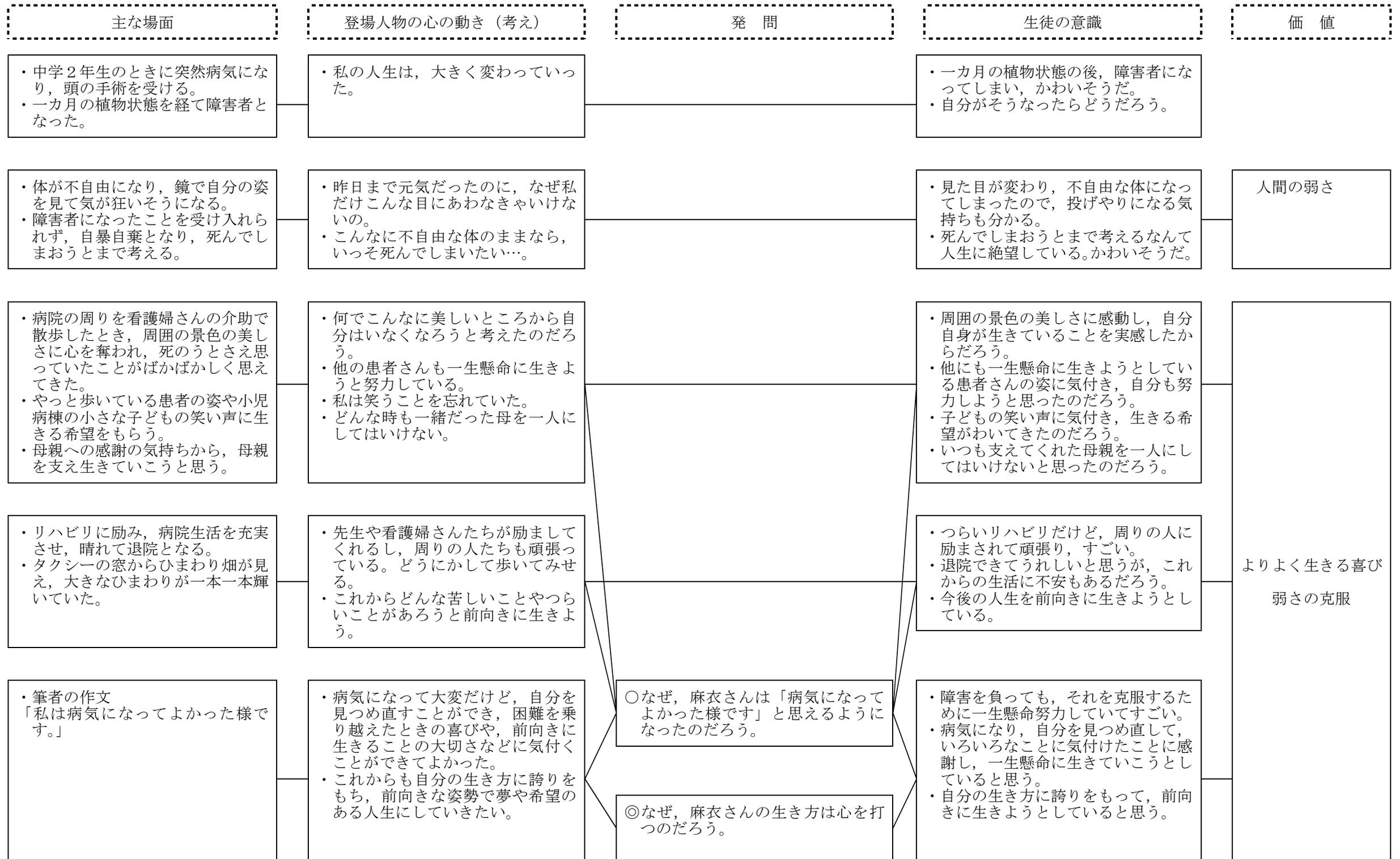
学習活動と主な発問	予想される生徒の意識	教師の支援・評価の観点
<p>1 事前に資料を読んだ感想を発表し合う。</p> <p>2 資料について話し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">○なぜ、麻衣さんは「病気になってよかった様です」と思えるようになったのだろう。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">◎なぜ、麻衣さんの生き方は心を打つのだろう。</div> <p>3 授業の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・突然、障害者になった麻衣さんがとてもかわいそうだ。 ・生きることの大切さに気付いたのはすごいと思う。 ・苦しみながらも前向きにリハビリに取り組む姿に感動した。 ・障害を負ったのに、「今の人生は面白い人生です」と考えられるのがすごいと思う。 ・「自分の生き方に誇りをもって楽しんで生きて行く」という考え方に感動した。 ・病気になったことで、自分を見つめ直すことができ、人の痛みなどが分かるようになったから。 ・病気になったことで、一生懸命生きることの大切さに気付くことができたから。 ・自分を支えてくれる人たちの力に気付くことができたから。 ・障害を負っても、それを克服するために一生懸命努力しているから。 ・病気になり、いろいろなことに気付けたことに感謝し、一生懸命に生きていこうとしているから。 ・自分の生き方に誇りをもって、前向きに生きようとしているから。 ・どんなにつらいことがあってもそれを克服し、頑張っていこうと思う。 ・生きていることに喜びを感じ、多くの人に感謝しながら生きていきたい。 ・苦しいことがあってもあきらめず、前向きに生きていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・突然障害を負うことになった麻衣さんの絶望感に共感させる。 ・感想にある「生きることの大切さへの気付き」や「誇りある生き方」について問題意識を引き出す。 ・資料（後半の手紙の部分）を範読する。 ・キーワード等を板書し、生徒の思考を助ける。 ・個人の考えをシートにまとめた後、グループで意見交換をさせ、多面的・多角的に捉えられるようにする。 ・グループでの話し合い後、全体で発表し、考えを共有する。 ・意図的指名で数名に振り返りを発表させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">誇りある生き方や夢や希望など喜びのある生き方を見いだそうとしているか。</div>

(4) 事後指導

学習シートに記入された感想を通信で紹介したり、学習シートを教室に掲示したりして互いの考えを共有する。

(資料分析)

- 1 主題名 よりよく生きる喜び
- 2 ねらい 内なる弱さや醜さと戦い、克服していこうとする主人公を通して、誇りある生き方や夢や希望など喜びのある生き方を見いだそうとする道徳的心情を育む。
- 3 資料名 「ひまわり」(中学生の道徳3「自分をのばす」 廣済堂あかつき)



第1学年A組 数学科学習指導案

指導者：長沢 留美子 (TN)
佐藤 大輝 (TS)

1 単元名 比例と反比例

2 単元の目標

- (1) 様々な事象を比例、反比例などで捉えたり、表、式、グラフなどで表したりするなど、数学的に考え、表現することに関心を持ち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。
(数学への関心・意欲・態度)
- (2) 比例、反比例などについての基礎的・基本的な知識および技能を活用しながら、事象を見通しをもって論理的に考察し表現したり、その過程を振りかえって考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。
(数学的な見方や考え方)
- (3) 比例、反比例などの関数関係を、表、式、グラフなどを用いて的確に表現したり、数学的に処理したりするなど、技能を身に付けている。
(数学的な技能)
- (4) 関数関係の意味、比例や反比例の意味、比例や反比例の関係を表す表、式、グラフの特徴などを理解し、知識を身に付けている。
(数量や図形などについての知識・理解)

3 単元と生徒

(1) 単元について

本単元は、学習指導要領第1学年 [C関数] 「具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、比例、反比例の関係についての理解を深めるとともに、関数関係を見だし表現し考察する能力を培う」にあたるものである。

小学校第4学年から6学年にかけて、変化の様子を表や式、折れ線グラフを用いて表したり、変化の特徴を読み取ったり、比例の関係を理解しこれを用いて問題解決したり、反比例の関係について理解したりしてきている。

中学校第1学年では、これらの学習の上に立って、具体的な事象の中から伴って変わる二つの数量について、表、式、グラフなどを用いて調べ、それらの変化や対応の特徴を見だし、具体的な事象を捉え考察し表現する力を養う。

(2) 生徒について (男子11名、女子11名、計22名)

明るく素直な生徒が多く、授業に真剣な態度で臨んでいる。9月のアンケートでは、数学の授業は好きかという質問に対し、「当てはまる」32%、「どちらかといえば当てはまる」59%、「どちらかという当てはまらない」9%、「当てはまらない」0%という結果であった。その理由として、「問題が解けたときにうれしい」「将来役に立つ」「みんなのいろいろな意見が出る」「考えるのが好き」という好意的な意見が見られる。

7月に行った授業アンケートでは、「伝え合うことで考えを深め合うことができた」について「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒が100%、「真剣に聞き、類似点相違点を考えていた」については90%という結果であった。しかし、「相手の表情を見てわかりやすく話した」については68%となっており、他者との関わりを意識して分かりやすく伝えるという点で課題が残った。

プレテストの結果は、比例の関係について表から x と y の関係を見いだしたり、式で表す問題の正答率は95%以上であった。反比例の関係については、 x と y の関係を見いだす問題で正答率が73%、式で表す問題の正答率が86%と比例に比べて正答率が低いことが分かった。小学校で学習した比例、反比例の学び直しの機会も設けていきたい。

(3) 指導について

①自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

学習問題から生徒が今日の授業の課題を設定でき、見通しをもって課題解決できるような問題解決的な学習過程のサイクルを構築できるようにしている。そのために、次のことに意識して取り組んでいる。

まず、導入では、興味・関心を高め、生徒の課題意識を高めていけるような問題や提示の仕方の工夫をしていく。例えば、プールや水を入れる場面を想定できるような問題を提示したり、緯度、経度の関係から座標につなげたりと、身近な事象を取り入れて指導していく。また、比例と反比例については小学校での学習内容を取り上げ、中学校の学習内容との類似点や相違点を考えさせることができるようにしていく。

展開では、比較・検討の場面をもうけ、生徒がお互いの考えを伝え合う時間を確保できるようにしている。

振り返りについては、「学んだこと、できるようになったこと、疑問に思ったこと、どんな方法で学んだのか、友だちの考えでなるほどと思った考え、これからの学習に生かしたいこと」という視点で書かせている。生徒の振り返りを毎回確認してコメントをしたり声かけをしたり、全体で紹介したりすることで適切な価値付けができるように取り組んでいるところである。

本単元の比例と反比例の利用の時間では、日常生活の場面で対象を理想化したり単純化したりすることで比例や反比例とみなすことができる問題を設定し、「生活に役立つよさ」「数学的な表現や処理のよさ」などの数学のよさに気付くことができるようにし、学習意欲、数学への興味・関心の高まりにつなげていきたい。

②豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

4月からTTで授業を行っている。数学に対する苦手意識をもつ生徒が多く、常に支援を必要とする生徒もいるため、個別指導に力を入れてきた。また、小グループやペアでの活動を取り入れ、情報交換をしたり、考えを深めたりすることができるようにしてきた。さらに、全体では、なぜそうなるのかということ了他者の考えを説明させたり、同じ考えでも自分なりの言葉で説明させたりする場面を設けてきた。話合いや伝え合う活動の中では、学習課題や何を説明するのかなどを明確にしたり、何をどのように用いるのかなどの説明の仕方の視点を与えたり、ノートのとまとめなどを確認してどんな既習事項を使ったのか、適切な用語、図、表などを用いて説明させたりしていきたい。

5 本時の計画 (14 / 18)

(1) ねらい

具体的な事象から取り出した2つの数量の関係を理想化したり単純化したりして比例とみなすことで、求め方を説明することができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動	形態	指導の手立てと評価 * 個別の支援	
			T N	T S
つかむ 5	1 問題を提示する。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・エコキャップが入った袋を見せ、エコキャップがリサイクルされることで環境問題やボランティアにつながることにふれる。 	
	<p>問題 大量のペットボトルキャップが集まった。集まったペットボトルキャップの個数はどのくらいだろうか。</p>			
	2 本時の課題を設定する。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・課題意識をもたせるためにキャップの個数を予想させる。 	
	<p>学習課題 エコキャップの数を一つひとつ数えないでおよその個数を知るにはどのようにすればよいだろうか。</p>			
追究する 30	3 見通しを立てる。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・重さは個数に比例するという考えを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つまづいている生徒に、個数の代わりに何かを調べ、個数を予測できないかアドバイスする。 ・つまづいている生徒には関係を表で表すことで比例となっていることが理解できるようにする。 ・既習事項を活用するよう個別にアドバイスする。 ・説明に不安が残る生徒に説明の補助をする。
	4 全体の個数の求め方を考え発表する。	個	<ul style="list-style-type: none"> ・式や表で説明している生徒の考えを取り上げる。 ・どのような方法で求めたかを既習事項と関連づけて発表するよう確認する。 	
	5 求め方をペアで説明し合う。	ペア	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で確認したことをもとに説明し合うことを伝える。 	
まとめ 15	6 本時のまとめをする。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の考えを生かし、生徒の言葉を用いて学習のまとめをする。 	
	7 評価問題に取り組み、本時の振り返りをする。	個 一斉	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>具体的な事象から取り出した2つの数量の関係を比例とみなすことで、求め方を説明することができる。 [数学的な見方考え方] [観察・評価問題]</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを紹介する。 	

第1学年B組 外国語科学習指導案

指導 TN 加賀直子
TT 亀沢貴子

1 単元名 Unit 8 イギリスの本(東京書籍 NEW HORIZON English Course 1)

2 単元の目標

- (1) Where~?や Whose~?を用いて、ものがある場所や持ち主が誰かについて問答することができる。
また、自分と相手以外の人についてまとまった英文で話を続けることができる。
【外国語表現の能力】
- (2) 疑問詞を用いて積極的に質問したり、話題に上っている人について、積極的に対話を続けたりしようとしている。
【関心・意欲・態度】
- (3) ものがある場所や持ち主が誰か、また、話題に上っている人についての情報を正確に聞き取りたり読み取ったりすることができる。
【外国語理解の能力】
- (4) Where~?や Whose~?の文と答え方、人称代名詞の目的格の形・意味・用法に関する知識を身に付けている。
【言語や文化についての知識・理解】

3 生徒と単元

(1) 生徒について

男子 11 名、女子 11 名計 22 名の学級である。横手清陵の新しい環境で自分を高めてみたい、という志で入学してから半年が経過した。仲間とはすっかり打ち解け、共に学び合おうという気持ちが多く多くの生徒から感じられる。一方で、難易度の高いことにはあきらめたり他の人に頼ったりする姿も若干見られる。英語の授業では、英検 4 級レベルに達している生徒が数人いるが、いまだに簡単な単語を読むことに苦勞している生徒もおり、よりチャレンジングな活動の設定と手厚い支援が必要である。

授業に関するアンケートでは、「授業を通して英語に対する興味・関心が高まったか」という問いに対し、約 95%の生徒が「当てはまる」あるいは「どちらかという当てはまる」と答えている通り、ほぼ全員が日々の授業に意欲的に取り組んでいる。生徒間の英語のレベルの差は大きいものの、苦手意識を感じている生徒でも、ユニークな内容の英文を考えたり、ペアやグループワークで活躍したりする場面が見られる。2 学期に入り、第三者についての紹介や問答、疑問詞から始まる疑問文を学習することで、より幅広い話題で、興味をもって友達との問答を楽しんでいる様子が見られる。また、多くの生徒は常駐の ALT に親しみを感じており、授業で積極的に話しかけたり、質問したりしている。これまで 2 回 ALT との Speaking Test を実施しているが、生徒は気負わずに楽しんでいる様子が見られた。

(2) 単元について

次期中学校学習指導要領外国語編では、「話すこと」〔やり取り〕の目標として、「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。」という項目がある。また、「話すこと」〔発表〕の目標として、「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。」という項目がある。目標達成に向けて、自分が書いたり練習したりした英語を準備してからアウトプットするのではなく、話す内容をその場で考え、相手とやり取りする。また、日本語で話す内容を考えてから英語に変換するのではなく、キーワードのメモや絵をヒントにして表現するなどの活動を位置付けることが求められている。十分に準備してから発表する Presentation や Show and Tell ではなく、即興性のある活動を通して、生徒は「外国

人とコミュニケーションをとる」という実際の場面により近い形を体感することになる。本単元に出てくるインターネット電話での会話はまさに即興の会話であり、小学校の外国語活動を通して、外国語に「親しむ」活動を行ってきた生徒が、難しさやハードルの高さを感じながらも、英語学習の「楽しさ」や「必要性」を感じることができると考える。また、本校の Can-do リストには、高校3年生の「話すこと」の中に、「一定時間会話を続ける・馴染みのあるトピックや事柄について語ることができる。」という目標があるが、その最終目標に向かう姿勢と力の基礎を育む単元と考える。

2学期に入り、疑問詞や第3者の紹介文、一般動詞や副詞（句）、時や場所を表す単語や連語を学習し、1つのトピックについて、より詳しい内容で英文を話したり書いたりすることを意識させてきた。具体的には、「Q&A で答える際には、さらに1文付け加えること」、「英文を書くときは、内容のつながりを意識してまとまった文を書くこと」、「英文を読んだり聞いたりして、そのことに関して質問することができること」である。本単元の主な言語活動としては、「Where~?や Whose~? から始まる疑問文と応答を学び、場所や持ち主について問答すること」、「人称代名詞の目的格を学び、身近な人や有名な人について詳しく話をする事」の2点が挙げられる。これらの言語活動の中でも、内容のつながりを意識したアウトプット活動を更に充実させることが可能な単元である。

(3) 指導について

本校には、常駐の ALT がおり、生徒個人の実態を把握し、授業や Writing の添削などではきめ細かい指導をしている。単元の最終目標として、ALT を対象にアウトプットする活動を取り入れることができることも強みである。また、中学校の授業には、各学年に高校の英語教員が T2 として加わり、表現活動における生徒の手助けや、音声指導などに携わっている。時には高校の英語教育の視点から、英検やより高いレベルの学習に向けた指導もしている。中学校からのつまづきを極力減らし、希望をもって高校にステップアップさせたいという共通の思いを大切に、TT の在り方を今後も考えていきたい。本単元でも、ALT による Speaking Test や、T2 による支援を通し、個々の4技能を伸ばしていきたい。

① 自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

本単元における、「内容のつながりを考えて即興で話す」主な言語活動は次の2つである。1つは、即興で学級の友達を紹介することである。顔写真付きのカードをめくり、その人の紹介をする。カードをめくった瞬間に考えて話さなければならないので、準備する時間はく、その場で考えて発話しなければならない。2つ目は、単元最終の Speaking Test で、ALT からの質問にその場で考えて答えることである。Speaking Test に向けて、帯活動で Q&A を練習するが、テスト本番で ALT は内容を少し変えて質問する。これらの活動は、生徒にとってはハードルが高く感じられるかもしれない。しかし、即興で話す経験を積むことで、既習事項を生かしてコミュニケーションできる喜びを感じながら、より主体的に学習に向かうようになるのでは、と考える。また、どうすれば内容につながりをもたせられるか試行錯誤して取り組むようになるであろう。

② 豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

本単元では、ペアやトリオでの活動を積極的に取り入れ、友達と学び合う機会を多く設定したい。帯活動であるペアとの Q&A では、毎回ペアを変えていくことにより、前のペアの英文を参考にして問答させるように励ます。また、机間指導において教師が自らの立場で答えたり、より突っ込んだ内容の質問をしたりし、バリエーションを加える。トリオの活動においては、「Speaker, Helper, Judge」という役割を与え、自他の表現力を高めるために積極的に関わらせる。話し手が発表している間に、聞き手は、発表者が言葉に詰まっているときに共に考えたり、内容のつながりや英文の正確性を判定したりする。即興で話すだけでなく、友達を手助けし、考えを深める過程を通して、自己の表現力を向上させることができるのでは、と考える。

4 単元の指導・評価計画 (総時数 7時間 本時5/7)

題材・話題	時数	ねらい	主な学習活動	評価規準	努力を要する生徒への手立て
Part 1	1	Where ~?の文とその答え方の形・意味・用法について理解する。	パターンプラクティスや教科書の英文を通して、文法知識を習得する。	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の本文を読み、光太の探し物がどこにあるか理解することができる。【理解】(ワーク) 口頭練習を通して、Where~?から始まる疑問文とその答え方に慣れる。【知識・理解】(観察・ワークシート) 	<ul style="list-style-type: none"> 近くで一緒に音読や発音をして、理解を促す。 板書とワークシートを見てパターンを覚え、徐々に自力でできるようにステップアップさせる。
	2	ものがある場所について積極的に問答する。	絵を見て、物がどこにあるかをたずねたり、答えたりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> Where~?や場所を表す前置詞を用いて、ペアと物がどこにあるのかを積極的にたずねたり答えたりしようとしている。【関心・意欲・態度】(観察・振り返り) 	<ul style="list-style-type: none"> 前時のワークシートを活用して疑問文の作り方や答え方を思い出させる。
Part 2	3	Whose ~?の文とその答え方の形・意味・用法について理解する。	パターンプラクティスや教科書の英文を通して、文法知識を習得する。	<ul style="list-style-type: none"> 口頭練習を通して、Whose~?から始まる疑問文とその答え方に慣れる。【知識・理解】(観察・ワークシート) 教科書の本文を読み、本が誰のものなのか理解することができる。【理解】(観察) 	<ul style="list-style-type: none"> Whose~?/It's mine.などよく使う言い回しやパターンを何度も繰り返させ、慣れさせる。 Oral introduction を通して内容理解を促す。
	4	教科書の内容を理解し、スキットを作成してペアで表現することができる。	インターネット電話でのやりとりという設定で原稿を作成し、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> スキットを作成し、何度も音読練習をして感情を込めて読むことができる。【表現】(観察・ワークシート) 	<ul style="list-style-type: none"> 机間指導を行いヒントを与え、支援する。 工夫されているペアの例を紹介し、参考にさせる。
Part 3	5 本時	代名詞の目的格を用いて、即興で内容のつながりのある6文以上のミニスピーチをすることができる。	代名詞の目的格について意味・用法を覚え、スピーチの中で実際に使う。つながりのある6文以上の英文でスピーチする。	<ul style="list-style-type: none"> 内容のつながりを考えて即興で6文以上のミニスピーチを発表することができる。【表現】(観察) 	<ul style="list-style-type: none"> スピーチの型や内容のつながりに注目できるような板書をする。 机間指導をして一緒に英文を考えたりシートに綴ったりする。
	6	前時のミニスピーチに関する原稿について振り返る。また、教科書の対話の内容を理解する。	ミニスピーチでの間違いや改善点を踏まえてノートに Re-write する。また、教科書の重要表現を学び音読する。	<ul style="list-style-type: none"> 友達に関して6文以上のまとまった内容で英語で書くことができる。【表現】(ワークシート) 教科書の対話を読み、テレビ電話のやり取りの内容を理解する。【理解】(ワーク) 	<ul style="list-style-type: none"> 6文に満たない生徒や単語を綴ることができない生徒に支援する。教師がシートにつぶやきながら書き、それを真似させる。
Unit7 のまとめ	7	Speaking Testで質問に2文以上で答えることができる。また、大切な文法や語句を使って文を書くことができる。	ALTに疑問詞を用いて質問したり、身のまわりのことについての質問に、2文以上で答えたりする。また、単元で学習した文型や語句を用いて英文を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ALTからの質問に、文のつながりを考えて2文以上で答えることができる。【表現】(Speaking Test) 単元で学習した文型や語句を用いて、ワークシートに英文を書くことができる。【表現】(ワークシート) 	<ul style="list-style-type: none"> 2文目が出てこない生徒には、つながりを持たせた質問をもう一つ投げかけて発話を促す。 ヒントを与えたり教科書を参考にさせたりして丁寧に指導する。

5 本時の学習（本時 2 / 6）

(1) ねらい

- ・ 代名詞の目的格を用いて、即興で内容のつながりのある6文以上のミニスピーチをすることができる。【表現の能力】

(2) 学習過程

学習活動	時間	教師の支援・評価		資料等
		JTE	T2	
1 Sing “Remember Me”	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大きな声で歌うよう励ます。 		Lyric
2 Practice basic drill sheet 単元で使う言語材料を用いた Q&A	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間指導をして、全員が interaction できるよう支援する。 ・ ALT とのスピーキングテストでどんなことが大切か再確認し、意欲的に活動に取り組むよう励ます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 良い例や誤りの多い箇所に注目し、必要があれば取り上げて紹介する。 	Basic drill sheet
3 Explain the usage of him/her 代名詞の目的格の学習	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 例文を提示し、代名詞の目的格の意味や使い方について説明する。 ・ 次の活動の内容につながる表現を紹介する。 		Worksheet
3 Check today’s goals and procedures 今日のめあての確認	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今日のめあてで“Let’s introduce our wonderful classmates!”を提示し、流れや目的をわかりやすく説明する。 ・ 「まとまりのある英文で表現すること」、「最終的には即興でスピーチできるようになること」など、今回の表現活動で大切なポイントを確認する。 ・ スピーチの型を提示し、話の展開の仕方を確認する。 		
4 Introduce their classmates Step1 Write and speak Step2 Practice and speak Step3 Speak ad lib Help and advise each other 友達について、いいところを見つけながら紹介する。	22	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれのステップと目指す姿を説明し、意欲をかき立てる。 ・ 書くことにつまずいている生徒には、教師がシートにつぶやきながら書くなどして支援する。 ・ 内容のつながりや、スピーチの型に注目させながら発話を促す。 ・ グループ内で互いに手助けしたりアドバイスしたりする雰囲気を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個の発表態度や話を聞く態度を良く見て、励ます。 	Worksheet Classmates’ picture
5 Write the speech Step 3 で発話した内容を思い出して英文を書く。	10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単語の綴りや文を書くことにつまずいている生徒に手助けする。 ・ できた生徒には、実際に発表した内容を膨らませて書くようアドバイスする。 		Worksheet
6 Self evaluation 振り返りをする。	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートに本時の振り返りを記入する。 		Worksheet

第3学年B組 外国語科学習指導案

指導者 内藤 英典

マリー エマニュエル

1 単元名 Unit 5 “Living with Robots -For or Against”

2 目標

- (1)与えられたテーマに関して、キーワードをもとに意見を伝える。
- (2)ペアやグループの活動において、間違うことを恐れず話す。
- (3)分詞の後置修飾を用いて、ものや人を説明する。
- (4)教科書の登場人物たちが、将来訪れるであろうロボットと生活することについて意見を述べている英文を読み、内容を理解する。
- (5)分詞の後置修飾を用いた文や間接疑問文の構造や用法を理解する。

3 指導計画（総時数10時間）

- (1)分詞の後置修飾の用法を理解し、絵の中の人物について説明を行う。 (1時間)
- (2)間接疑問文の用法を理解し、将来の職業等について会話をする。 (1時間)
- (3)教科書本文を読んで、現在のロボット事情について理解する。 (1時間)
- (4)教科書本文を読んで、それぞれの人物の意見を理解する。 (2時間)
- (5)教科書本文のそれぞれの人物の意見の概要をキーワードをもとに相手に伝える。 (2時間)
- (6)まとめ①…紙の辞書と電子辞書のどちらが良いのか意見を伝え合う。 (2時間)
- (7)まとめ②…与えられたテーマに関して、キーワードをもとに意見を伝え合う。 (1時間・本時10 / 10)

4 研修テーマとの関連

①自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

スマートフォンなど生徒が関心を抱きやすいテーマを設定し、進んで課題に取り組めるようにする。また、自分の意見のキーワードを選択し、提示させることで、意見のポイントを意識させ、主体的に活動に取り組ませる。さらに、他者の意見を聞いた後で、その意見に対する質問を考えさせる。

②豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

グループになって意見を伝え合う場を設定することで、多様な意見や表現に触れ、自己の表現力を高められるようにする。意見を伝える際には他の人の意見と自分の意見の関係性を意識し、“I agree with you.”や“I see what you mean, but …”等の表現を使わせる。また、他の人の意見に対して質問を考えたり、質問に応答したりすることで、自分の意見をさらに深められるようにする。

5 本時の計画

(1) ねらい

・ 日常的な話題について、キーワードをもとに自分の意見を整理して伝えることができる。

(2) 学習過程

学 習 活 動	形 態	教 師 の 支 援 と 評 価
1 Greeting & Warm-up ・ 英語の曲を歌う。 ・ ペアで表現の復習に取り組む。	一斉 (ペア)	・ さわやかで落ち着いた雰囲気であいさつをさせる。 ・ 疑問詞や中心的な語句に注意させる。
2 Check Today's Goal <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> キーワードをもとに、自分の意見を伝えることができる。 </div>	一斉	・ 本時の到達目標を提示し、活動に見通しをもたせる。
3 Presentation and Q&A ・ 4人1組のグループとなり、順番にキーワードを提示しながら意見を伝え合う。その際、自分の意見と前の人との関係性を考えて話し始める。 ・ グループ全員が意見を伝え終えたら、お互いの意見に対して質問をする。質問された生徒は適切に応答する。	グループ	・ 教師間でデモンストレーションを行い、活動の見通しをもたせる。 ・ 生徒が多様な意見に触れ、学び合いが深まるようにグループメンバーを適宜入れ替える。 ・ 活動の途中で、よい例を全体で紹介することで活動の質の向上を図る。 ・ 教室内のグループを分担して担当し、指導と観察を行う。
4 Reconfirmation ・ 本時のまとめとして、自分の意見をシートに書き記す。	個人	・ 自分で考え、発言した内容を書かせることで、本時の活動内容の定着を図る。
5 Self-evaluation	個人	・ 本時の取り組みやToday's Goalの達成度を自己評価させ、次時の活動に対する意欲を高める。
6 Greeting	一斉	

キーワードをもとに、自分の意見を整理して伝えることができる。
【外国語表現の能力(観察・シート)】

第2学年A組 技術・家庭（家庭）学習指導案

指導者 TA 粟津 奈々
TD 土門 操

1 題材名 豊かな食生活を自分の手で

2 題材の目標

- (1) 日常食の献立と食品の選び方について関心をもって学習活動に取り組み、食生活をよりよくしようとしている。 【関心・意欲・態度】
- (2) 日常の献立と食品の選び方について課題を見付け、その解決を目指して工夫している。 【工夫・創造】
- (3) 食品の選び方に関する基礎的・基本的な技術を身に付けている。 【技能】
- (4) 日常食の献立と食品の選び方について理解し、基礎的・基本的な知識を身に付けている。 【知識・理解】

3 生徒と題材

(1) 生徒について (男子16名 女子17名 合計33名)

家庭科に対する関心は高く、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。特に体験的な学習活動での意欲が高く、前題材であった乳児との交流学习では、乳児の抱っこや授乳、おむつ替えに積極的に挑戦し、意欲を持って乳幼児を理解しようとする姿が見られた。また、家庭科では、入学当初から授業の始めに朝食の食事内容と就寝時刻、健康のチェックを行い、日々の生活を振り返る時間を設けている。その記録から、朝食の摂食状況は、家族の協力もあり、良好な生徒が多い。しかし、一部ではあるが、朝食を菓子類や飲み物だけで済ませている生徒がいる他、すでに欠食習慣が身につけてしまっている生徒も見られる。また、事前に行った食事調査のアンケートにおいて、生徒たちは、基本的に家族が用意してくれる食事が中心の食生活であるが、自分自身で食事を用意しなければならない場面ではコンビニエンスストアやファストフードを利用すると答えた生徒が多く、自分で食べものを選択する時には、「食べたい」という嗜好を重視する傾向がある。

(2) 題材について

本題材は、中学校学習指導要領技術・家庭、家庭分野内容B(2)「日常食の献立と食品の選び方」にあたるものである。食生活の分野では、課題をもって、健康・安全で豊かな食生活に向けて考え、工夫する活動を通して、中学生に必要な栄養の特徴や健康によい食習慣、栄養素や食品の栄養的特質、食品の種類と概要、献立作成、食品の選択と調理などに関する知識や技能を身に付け、食生活の課題を解決する力を養い、食生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を育成することをねらいとしている。

これらの能力の育成には、中学生に必要な栄養の特徴を把握した上で、家族や自分自身の状況に応じて、食事として具体化・具現化させる必要がある。そのために、B(1)「中学生の食生活と栄養」と(3)「日常食の調理と地域の食文化」の項目も相互に関連付け、総合的・複合的に展開する。また、現在、給食により栄養バランスの整った昼食を摂っているが、高校では自分で用意することになる。嗜好重視による栄養の偏りに留意し、将来を通して健康的な食生活を実現させるために、食生活の課題を主体的に解決する力の育成につながる題材であると考えている。

(3) 指導について

中学校では、1食分の献立作成を行った小学校での学習を発展させて、中学生に必要な栄養量を満たす1日分の献立を作成する力の育成が求められる。そのためには、まず1食の食事から摂取できる食品の種類や概量を、実感を伴う形で把握させる必要がある。また、「食べたいもの」という選択から、「食べるべきもの」を選択する視点も必要になる。そこで、今回の授業では、生徒が利用する機会の多い調理済み食品(コンビニ弁当)を事例として取り上げ、中食の利用について考える場面を設けた。今後、利用する機会が増えていくことが予想される中食を、自分自身や家族の生活状況に応じて、上手に活用できる力を育てたい。前時の授業で、調理済み食品(6種類のコンビニ弁当)の食品分類と計量を行い、6つの基礎食品群の摂取目安と比較させている。食品群の過不足をどのように改善すればよいかを、食べる人の視点の他に、価格、調理の効率、食の安心感などの視点も与え、多角的、多面的に考察させ、日々の生活で活用できる献立作成の力を身に付けさせたい。

① 自ら問いをつくり、主体的に解決するための手立て

コンビニ弁当等の中食を利用する際、各自の嗜好が重視されがちであることに着目し、食品群別摂取量の目安との比較から、栄養面での課題を明らかにさせたい。そこで、食品群の偏りがとらえやすいようにレーダーチャートを用意して可視化する。バランスがとれた献立として、給食献立を例にあげ、給食の献立表や写真から、献立作成時に重要となる料理構成（主食・主菜・副菜・汁物）について着目させ、その料理構成の改善から、栄養面での課題設定と解決につなげたい。今回の授業では、1日分の献立を考える前段階として、コンビニ弁当1食分の献立を改善する学習を行うが、次の【献立バイキング】の授業では、1日分の献立を考え、実際に生徒が考えた献立を給食の献立に取り入れてもらい、学習成果を活かせる場面を設定したい。

② 豊かに関わりながら、学び合いの中で自分の考えを深める手立て

前時の【手作り v s 市販のハンバーグ】と【コンビニ弁当徹底分析】の授業では、ジグソー法を取り入れ、他者との会話を通して考えを明確にしたり、他者との意見を共有してお互いの考えを深めたりする場面を意図的に設定して、自分の考えを広げ深めさせたい。献立を考えるにあたっては、栄養を満たすことが重要な観点であるが、同時に自分自身や家族がおかれている状況によって優先すべき項目が変わってくることから、様々な観点から思考を深める場面を設定したい。そこで、ジグソー活動では、グループ一人一人に役割を与え、「①調理の効率（調理の手間と時間）」、「②食の安心感（食品添加物・遺伝子組み換え食品）」、「③地産地消（旬・原産地）」、「④価格」「⑤調理法・彩り」「⑥栄養（エネルギー・塩分）」の視点をもって話し合わせ、考えを深めさせる場面を作りたい。また、本時においては、コンビニ弁当の栄養面での偏りに集目させ、その解決に向けて、グループで解決策を検討し、その気づきを全体で共有しながら栄養バランスを整える手立てを見つけ出し、献立作成の具体的な手法を獲得させたい。

4 題材の指導計画と評価規準（総時数12時間：本時6/12）

時間	ねらい	主な学習内容	評価規準
1	・生活の中で食事が果たす役割について理解し、健康に良い食習慣について考え、実践しようとしている。	【中学生に必要な栄養の特徴】 ・自分の食生活や健康チェックを振り返り、食事が果たす役割を知り、改善すべき点を考える。	中学生の食生活と栄養に関心をもって学習に取り組み、食生活をよりよくしようとしている。 【関心・意欲・態度】
2～3	・日常生活と関連付け、用途に応じた食品の選択について考えることができる。	【手作り VS 市販：ハンバーグ】 ・生鮮食品と加工食品の栄養、価格、調理の効率、安心感、地産地消などの視点で比較し、購入の仕方を考える。	用途に応じた食品の選択について、収集・整理した情報を活用して考え、工夫している。 【工夫・創造】
4～6 本時	・栄養素の種類と働きが分かり、食品の栄養的特質について理解する。 ・中学生に必要な栄養を満たすための献立を考えることができる。	【コンビニ弁当徹底分析】 ・コンビニ弁当に使われる食品を食品群に分類し、計量する活動から、中学生に必要な食品の種類と概量を知る。 【こだわりの昼食を自分の手で】 ・献立作成の方法について理解し、中学生の1食分にふさわしい献立に修正する。	食品を食品群に分類・計量する活動を通して、中学生の1日に必要な食品の種類と概量について理解している。 【知識・理解】 中学生に必要な栄養の特徴をふまえて、バランスのよい献立を考えることができる。【工夫・創造】
7～10	・地域の食文化を理解し、基礎的な日常食を調理することができる。	【昼食献立の調理】 ・地域に根付いた日常の一食分（横手やきそば・牛乳寒天）を調理する。	安全と衛生に留意し、調理の目的や食材に合った基本的な調理操作ができる。 【技能】
11～12	・中学生の1日分の献立について考えることができる。	【献立バイキング】 ・中学生に必要な栄養の特徴をふまえて、1日分の献立を考える。	中学生に必要な栄養量を満たす1日分の献立を考えることができる。 【工夫・創造】

5 本時の計画（6／12）

(1) ねらい

中学生に必要な栄養の特徴をふまえて、バランスのよい献立を考えることができる。 【工夫・創造】

(2) 食育の視点

中学生時期の栄養の特徴をふまえ、望ましい栄養や食事のとり方を考え、1食分の献立を考えることができる。 【心身の健康】

(3) 学習過程

段階	学習活動	形態	指導の手立てと評価	
			TA	TD
導入 5	1. 前時の内容をふり返し、学習課題を確認する。	一斉		
学習課題：コンビニ弁当を栄養バランスのよい昼食にしよう。				
展開 40	2. 前時に分析した6種類のコンビニ弁当の結果から、調理済みの食品の栄養面での特徴を考える。	一斉	・6つの基礎食品群の摂取目安と、コンビニ弁当（6種類）に使用されている食品の概量を比較して、共通した栄養の偏りに気がつくよう、レーダーチャートを用意する。	
深める問い：給食の献立から、栄養バランスのよい献立にする方法を見つけよう。				
	3. 給食の献立は、どのような方法や工夫で、栄養バランスのよい献立にしているのかを考え、発表する。	一斉	・献立作成の具体的な方法を見つけるために、給食の1ヶ月分の献立表と写真を用意する。生徒が気づかなかった視点については、栄養教諭から助言する。	
	4. コンビニ弁当を栄養バランスのよい献立に改善する具体的な方法を考え、発表する。	グループ	・コンビニ弁当に使われている料理を料理の構成（主食・主菜・副菜・汁物）として整理した上で、料理の種類や量を加減して、一食分の献立を完成させるように指示をする。 ・栄養の偏りを改善するために、加えるべき料理のアイデアは、料理カードを用意して、選択できるようにする。	
○ 中学生に必要な栄養の特徴をふまえて、バランスのよい献立を考えることができる。（ワークシート・発表）【工夫・創造】				
まとめ 5	5. バランスのよい献立を考える方法をまとめる。	個人	・本時の学習を振り返り、自分の言葉でまとめるように指示する。	

平成30年度 教育委員会指導主事学校訪問 実施要項

横手清陵学院高等学校 教務部

1 訪問日 平成30年10月29日(月)

2 訪問者 高校教育課 指導主事 柏谷 浩樹 (国 語)
 高校教育課 指導主事 関屋 亜生以 (英 語)
 保健体育課 指導主事 遠藤 幸樹 (保健体育)
 秋田南高等学校中等部 教育専門監 庫山 徹 (数 学)
 秋田明德館高等学校 教育専門監 加藤 智子 (学校保健)

3 日程案

内 容	時 間	備 考
	8 : 4 5 ~ 9 : 3 0	(1校時) 通常授業
	9 : 4 0 ~ 1 0 : 2 5	(2校時) 通常授業
校長面談	1 0 : 3 5 ~ 1 1 : 2 0	(3校時) 於校長室
諸表簿閲覧	1 1 : 3 0 ~ 1 2 : 1 5	(4校時) 於会議室
	1 2 : 1 5 ~ 1 3 : 0 5	昼 休 み
授業参観	1 3 : 1 0 ~ 1 3 : 5 5	(5校時)・全校授業参観
	1 3 : 5 5 ~ 1 4 : 2 0	全クラス 帰りのSHR
研究授業 ※別表参照	1 4 : 2 0 ~ 1 5 : 1 0	(6校時) 1 1 組, 1 2 組, 1 3 組, 3 4・3 5 組
	1 5 : 1 0 ~ 1 5 : 3 0	研究授業後、放課
授業研究会	1 5 : 3 0 ~ 1 6 : 1 0	(放課後) ・グループディスカッションによる分科会形式で実施(付箋法)
全体会	1 6 : 1 5 ~ 1 6 : 4 5	於 会 議 室 ①校長あいさつ ②授業研究会の概況説明と報告 ③指導主事の先生の指導助言 ④校長あいさつ

○授業研究会
進め方

- ・あいさつ(指導主事の紹介含) 15:30~15:32
- ・全体司会主旨説明 15:32~15:35
- ・各班での研究討議 15:35~16:00
- ・各班からまとめの発表 16:00~16:05
- ・指導主事からの指導助言 16:05~16:10

※授業研究会(授業者を含んだ参観教員による分科会)

※全体会(教科ごとの授業研究会終了後、会議室で1ヶ月前課題、研究授業等に対する指導主事の指導・助言をいただく)

※別表(高等学校6校時 研究授業 教科・授業者・授業研究会会場)

クラス	教科・科目	授業者	使用教室	授業研究会 会場
1 1	コミュ英 I	佐藤梨奈	1 1	教科研修室 1
1 3	国語総合	三浦俊喜	1 3	教科研修室 2
3 4・3 5	保健体育	神谷忠昭	柔道場	教科研修室 3
1 2	数学 I	奥 健悦	1 2	会 議 室

4 県教委重点指導事項

- (1) 組織で取り組む授業づくりの推進
 - ・到達目標を意識した授業構成
 - ・生徒の思考を促す授業展開
 - ・評価と検証に基づいた授業改善
- (2) 「こころ 姿 振る舞い さわやか高校生運動」の推進による生徒指導の充実
 - ・さわやかな整容
 - ・さわやかな生活態度
 - ・さわやかな学習環境

5 本校における本年度の重点目標

- 「主体性 探究力 人間力の育成による 高い志の実現」
- (1) 「学べ」・・・自ら「問い」を發し、課題を解決する「探究力」をはぐくむ実践を通して、主体的に学ぶ意欲を高めるとともに、わかる授業、魅力ある授業の実現により、学力向上を図る。
 - (2) 「競え」・・・さわやか整容、さわやか挨拶を励行し、あらゆる教育活動を通して自他の尊重と思いやりの心をはぐくむとともに、「品性」と「人間力」を育成する。
 - (3) 「望め」・・・工業系学科をもつ中高一貫教育校としての特色を最大限に生かし、教育効果を高める「中高連携」を一層推進して、生徒に「高い志」を抱かせ、実現につなげる。

6 本校1か月前課題

「生徒が主体的に考え、学びを深めることができる授業の展開」

- (1) 目標を明確にして、生徒に学びの成果を実感させ、次に繋がるまとめや振り返りができるようにする。
- (2) 理由や根拠を問いながら、生徒の考えを深めさせ、発表を引き出すようにする。

7 組織としての「授業改善」への取り組み（研究授業、授業参観の視点）

- (1) 生徒の主体的な学びになっているか
- (2) 生徒が考える時間を設定し、「なぜ」「どうして」を大切にしているか
- (3) 生徒の言語活動を組み込んでいるか
- (4) グループ、ペア学習が形だけになっていないか

英語科「コミュニケーション英語Ⅰ」学習指導案

実施日時：平成30年10月29日（月）6校時

場 所：1年1組教室

対 象：1年1組37名（留学1名含む）

授 業 者：教諭 佐藤 梨奈

ALT マリー・エマニュエル

教 科 書：Revised ELEMENT

English Communication I（啓林館）

1 単元名 Lesson 3 Predictions of the Future

Science and imagination 未来の予言 ～科学と想像力～

2 単元の目標

- (1) 既習表現・文法を理解し、与えられたイラストを描写することができる。
- (2) 指示語や代名詞の内容を正しく捉えることができる。
- (3) 本文の内容から疑問点を見つけ、英語で尋ねることができる。

3 単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

絵や物などの補助があれば、基本的な情報を伝え、それについて簡単な意見交換をすることができる。

【高1 Spoken Interaction A2.1】

4 単元観

世界の科学者達が行った予言に関する話を読み、自らもこれからの未来がどのようなようになるか予測できる内容となっている。単元を通して、今後の未来はどのような世界になっていくだろうかについて意見交換をし、そのためにはどのように生きるべきかを考えるきっかけにしたい。

5 生徒観

男子18名、女子19名のクラスである。通常の授業では2クラスを4展開し、20名程度のクラスサイズで授業展開している。授業への取り組みや反応は良いが、教師からの指示や情報を理解し、処理する能力に乏しい。本時の授業では指示を全てALTが行うことで、情報を処理する能力も育成したい。また、未来の世界を予想する、という日常からは少し離れたテーマに沿って意見の共有をすることで、今後の未来をよりよいものにするため、自分はどのように生きるべきかについて考えるきっかけとしたい。

6 単元計画（総時間5時間）

- 1時間目・・・内容理解(Comprehension)と情景描写：1学期に実施
- 2時間目・・・指示語や代名詞の内容の捉え方・答え方：2学期に実施
- 3時間目・・・文法事項（疑問詞節・if節、関係代名詞）：2学期に実施
- 4時間目・・・Communication Activity（本時）**
- 5時間目・・・Presentation Activity：3学期に実施

*本校英語科では、まとまった文量の英文を一度に読み、読解力を育成するため、1年間で教科書の内容を3巡する学習スタイルを採用しています。

7 単元の評価規準

A コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知 識・理解
科学者達が行った予言につ いての話を読み、今後の未来 はどのようなかを考えよ うとしている。未来の世界は どのようなものかについて自分 の意見を持っている。	自分が現在持っている言語 知識を用いて、あるいは新た に学習した言語材料を用い て、本文をリテリングできる。 また、自分の意見を英語で表 現できる。	教科書の英文を読んで過去 の科学者達が行った予言を理 解し、要点を捉えることがで きる。	疑問詞節・if 節の語順につ いて理解する。関係代名詞の 用法を理解している。 正しい倫理観に基づいた科 学の使用法について考えを深 めようとしている。

8 本時の学習

(1) 目標

To share your predictions of the future with your friends.

(2) 指導計画

過 程	学習活動	指導上の留意点	評 価
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ALT が紹介する数枚の picture card を見て、本時の授業のテーマを予想する。 本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> authentic な話題を提供する。 JTE は必要に応じて日本語の説明も入れる。 	
展開 35分	<p>①「50年後には〇〇が発明されている」 「私たちは〇〇ができるようになっている」 の2文を各自で考え、ワークシートにまとめる。 (10分)</p> <p>②隣同士でペアになり、机を向かい合わせる。 ・ペアで意見交換し、ワークシートにメモをする。 (1ペア1分)</p> <p>・席をスライドし、5ペアの会話をを行う。(10分)</p> <p>③元の座席に戻り、指名されたペアが前に出て全体 に発表をする。(10分)</p> <p>④ALT から生徒がコメントを聞く。(5分)</p>	<p>①活動前に ALT がモデルを示す。 ・JTE は必要な単語や表現を板書する。</p> <p>②教師は机間指導をし、口頭でのやりとりができてい かどうかを確認する。 ・JTE は時間を計測し、知らせる。 ・ALT はつまずいている生徒を補助する。 ・だんだんメモを見なくても言えるようにする。</p> <p>③教師は机間指導をし、生徒の支援・補助する。 ・教師は良くできているペア1組ずつを指名しておく。</p> <p>④活動へのコメントに加え、「今後はどのような世界に なるだろうか」という問題提起をし、次の活動につな げる。</p>	B
まとめ 15分	<p>①意見の共有を受け、 「50年後の世界(生活)はどのようなか」 「なぜそう思うのか」について、各自で40語程度 で作文する。(10分)</p> <p>②2人の生徒は前に出て、自分の意見を紹介する。 (5分)</p>	<p>①ALT が始めにモデルを示す。 ・書ける生徒には、linking words を使って50語程度 で表現させる。 ・文法の「正確さ」よりも「文量」に重点をおく。</p> <p>②教師は事前に発表者を1名ずつ指名しておく。</p>	

【評価】・自分の意見を口頭発表できている。(観察)

授業研究会 記録用紙（各教科のまとめ） （英語科）

平成30年10月29日（月）

記録者 氏名 高橋雅生

出席者（ 関屋亜生以・加賀直子・内藤英典・萩原勢津子・佐々木信吾）
（ 亀沢貴子 ・高橋雅生・佐藤梨奈・Yel ）

●授業者による感想・反省

（佐藤梨奈先生）

- ・ 去年のパワーアップ研修を活かし、本校1ヶ月前課題に即して、言語活動を多く取り組み、生徒が主体的に動き、深い学びが得られるように試みた。
- ・ 生徒に意見を共有させ、自分の意見を書かせたかった。
- ・ ゴールを意見の sharing にするのか作文にするかで活動が違ってくるが、今回は最後の challenging question を設けて作文まで設定するとどうなるか模索した。
- ・ 生徒のレベルの差が大きい、ペアワーク等いつもの調子よりがんばった。

（Yel先生）

- ・ スマートフォンなど周囲の科学技術の発達が著しい時代、今日のトピックはとても高校生に適している。
- ・ 一方、生徒達は自分のアイデアはあり意見をシェアしたがっているが、英語にすることが困難であった。
- ・ 少しずつ段階を経て活動に取り組み、生徒達は頑張っていた。

●授業のまとめ

- ・ 最初に50年後の生活はどうなるか、生徒達は66歳になっていることを生徒に伝え、また折りたたみできるスマートフォン、空飛ぶ車、高度に進化した人間の生活に関する写真や動画をみせることによって、生徒の興味・関心を高めた非常に魅力のある素晴らしい導入であった。
- ・ ペアワークでは入れ替わりがスムーズで、生徒が自然なあいさつや相づちがあり、またお互いよく関わりあっている点が良かった。
- ・ Step1 に関して、1年生の今の時点で全て英語で考えるのは難しいので、日本語で考えてから英語で表現させても良かったかもしれない。
- ・ タイマー・チャイムの活用で活動の切り替えがスムーズであった。
- ・ ペアワークで会話を繰り返すことで書けるようになっていった。
- ・ ペアワーク時に徐々に紙から目を離していく、また前の人アイデアを真似て自分の表現をふくらませることの指示を出したほうが良い（スライドする意味）。
- ・ このレッスンを読んだからこそ出てくるアイデアや表現を引き出すにはどうすればよかったか、という視点を大事にしたい。

●指導助言

- ・ 生徒に50年後をイメージさせる導入が良かったが、その語50年後の予言を考えさせる活動においてはいきなりペアで話しをさせるのではなく、自分で考えさせる時間を与えてから、友人と share させると良かった。
- ・ ペアワークが1回終わったところで1度全体でしたことを確認するなど微調整したほうが良い。今回は書いた英文を相手に読むやり方であるが、紙に書かれていないことを1つ質問させるなどの即興的な活動もありうる。
- ・ 最後の作文が時間が足りず、うまく書けなかった生徒が多いと思われるが、もやもやした部分が残るのが英語の学習でもある。次の時間でクリアにするきっかけをつくってほしい。

国語科（国語総合）学習指導案

日 時 平成 30 年 10 月 29 日（月）6 校時
実施クラス 1 年 3 組
使用教科書 第一学習社
『高等学校 改訂版 国語総合』
授 業 者 三浦 俊喜
場 所 1 年 3 組教室

1. 単元と本時の教材名 「小説の表現について考えよう」（夏目漱石『夢十夜』「第一夜」）

2. 単元の目標

- （1）文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとする。（関心・意欲・態度）
- （2）文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりする。（読むこと エ）
- （3）語句の意味、用法を正しく理解する。（知識・理解 [伝統] イ（イ））

3. 生徒の実態

1 年生 3 2 名のクラスである。これまでの小説の授業では、芥川龍之介『羅生門』を題材に、登場人物の心情を読み取ったり、情景描写の表現効果を考えたりする活動を行った。文学作品における設定や展開を読み取る力、色彩などの表現からイメージを膨らませ、作品の内容と関連付けて考える力は身につけていると思われる。一方で、語彙力や、表現の工夫に自ら気づきその効果を考える力がまだ不十分であるという課題もある。文学作品の読み方として、その主題のみならず表現についても深く理解し、味わい、評価する力を身に付けさせる必要がある。

4. 教材観・指導観

本教材は、夢という抽象的、非現実的な世界を題材としている。科学的な合理性が通用しない世界であるがゆえに、生徒の日常生活に基づく感覚だけでは主題を十分に読み取ることが難しいと思われる。また、語り手自身が夢の内容を解釈し意味づけすることをせず、今まきに見ているままの情景を写し取るような文章で記述されている。それゆえ、個々の事象や作品全体が持つ意味を、文章中の表現を手掛かりに注意深く読み取る必要がある。指導に当たっては、作品の主題を読み取ることに加えて、表現の仕方について、それが内容とどう関わっているか、なぜその表現なのかということに留意させ、自らの言葉で説明できるような力を付けさせたい。

5. 単元の指導計画（全 3 時間）

- ①全文を通読し、疑問点を書き出す。第一段落を読み、概略を理解する。
- ②第二、三段落を読み、概略を理解する。
- ③作品における表現上の工夫やその必然性について考察し、理解を深める。

6. 単元の評価規準

A 関心・意欲・態度	D 読むこと	E 知識・理解
○文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとしている。	○文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしている。	○語句の意味、用法を正しく理解している。

7. 本時の計画（3／3）

(1) 目標 本文中の表現が作品にどのような影響を与えているか考えよう。

(2) 展開

【A】 関心・意欲・態度 【B】 話すこと・聞くこと 【C】 書くこと 【D】 読むこと 【E】 知識・理解

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の仕方によって情報の受け取り方が違うことを知る。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な例文を示す。 ・ワークシートを配付する。 	
展開 (35分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 目標：本文中の表現が作品にどのような影響を与えているか考えよう。 </div>		
	<ul style="list-style-type: none"> ・本文を朗読する。 ・初発の感想で出た疑問点をもとに、自分が最も気になる表現を一つ定める。 ・本文中の表現が果たしている効果を考え、伝わりやすさや必要性を評価する。 ・グループで分析したことを発表しあう。 ・指名により全体に向けて発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する。 ・「色彩」や「天体」など、考察の視点を提示する。 ・生徒の取り上げている表現が、用いられていなかったりほかの表現だったりしたら、作品の展開や雰囲気はどう影響するか考えさせる。 ・発表を聞いて気づいたことや考えたことをメモさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の仕方や効果について考えを深めている。 (D ワークシート・観察) ・話し合いを通じて表現についての考えを深めようとしている。 (A 観察)
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容を振り返り、授業を通して分かったことや考えたことを記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文学作品を表現に注意して読むことの意義を考えさせる。 	

授業研究会 記録用紙（各教科のまとめ） （国語科）

平成30年10月29日（月）

記録者 氏名 茂林 洋子

出席者（柏谷浩樹指導主事、佐々木貴之、芦沢雅子、黒丸昌作人、工藤育子、佐藤寿、泉田健、鎌田正樹、佐藤教頭、齋藤竜二、三浦俊喜、茂林洋子）

●授業者による感想・反省

目標設定の段階で、授業の中で注目すべきポイントが曖昧になってしまったと反省している。本時の目標にある、「表現」という語の意味する範囲が広すぎるため、より明確に定義して授業に入るべきであった。あるいはむしろ「描写」について考える授業としたほうが分かりやすかったかもしれない。

また、生徒の疑問点をそのまま生かそうとの思いから、初発の感想で挙げられた疑問点を一覧にして示すという形を取った。思考を促す効果はあったと思われるが、授業のまとめの部分がうまくまとまり切らなかったようにも感じる。

いずれにせよ、生徒たちはよく指示を聞き、頭を働かせて考えてくれていた。生徒が積極的に参加しようと思う授業は展開できたのではないかと感じている。

●授業のまとめ

規律があり穏やかな雰囲気の中で授業が進み、生徒の取り組みもよかった。

導入に既習事項の「羅生門」を取り上げ、表現の特色について例示し生徒をひきつけた手腕は鮮やかだった。ただ、3時間目にして音読をしたねらいや他の活動についてもねらいを明確に生徒に提示した上でやらせた方がよい。目標が「～考えよう」となっているが、その結果つきたい力＝完成形を謳った方がわかりやすいのではないかという指摘もあった。気になる箇所を見つけさせるのではなく、一覧を裏面につけて、取り組みのハードルを低くしたことで、時間の短縮にもなったが、主題の読み取りに関わる重要な表現に絞り、それを読み解いて表現の重要性を訴えても面白かったと思う。

グループ活動では、もう一工夫することでグループ活動ならではの収穫があるのでは？ 同質のグループを作った目的が意見の共有化に留まらず、比較検討を経ての思考の深まりまでを求めることができるような仕掛けもできそうだ。

大変難しい教材に意欲的な取り組みをしてくれた。三浦先生の幅が広がり、今後いっそうの活躍が期待できると思う。

●指導助言

各班の協議で出尽くした感があるが、3点に絞って話す。

①「言葉」にこだわった授業でよかった。「言葉」＝表現については国語科独自の視点であり、重要である。時間に追われなかなか踏み込めないところに切りこんでいったところがすばらしい。

②ワークシートに書き込み、表現する時間をしっかり確保していた。書くことは自分との対話であり今後も続けてほしい。時間が取れなかったとは思いますが、グループを解体した後に振り返りを取り入れると効果的だと思う。

③導入で既習事項を活用し、生徒を引き込んだ。既習事項の活用は国語科の苦手とするところだが、今回はスムーズな展開に結びついていた。

欲を言うと生徒に主体性を持たせる工夫がもっとあればよい。導入の後、生徒に何をやればよいかを言わせることで主体的な取り組みにつなげると効果的である。

保健体育科学習指導案（柔道）

日 時 平成30年10月29日（月）6校時
 場 所 柔道場
 対 象 3年総合技術科柔道選択者（男子6名・女子3名）
 指導者 教諭 神谷忠昭

1 単元名 柔道 「得意技や連絡技を高めよう」

2 単元の目標

- (1) 相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技を用いて、素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防ができるようにする。 【技能】
- (2) 伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方などを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動や継続するための取り組み方を工夫することができるようにする。 【知識、思考・判断】
- (3) 相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする事、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することに主体的に取り組むことができるようにする。 【関心・意欲・態度】

3 生徒の実態

男子6名、女子3名が柔道選択者である。高校1年生から継続して柔道を選択している生徒もいるが、高校3年生から選択している生徒もおり、技能面に差が見られる。生徒たちは学習に対して意欲的に取り組み、どのように工夫すれば上手に技を掛けて投げられるかということをお互いにアドバイスし合えることができる。また、同じ学習仲間たちと安全や健康面などに留意しながらお互いに学習することができる。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ●柔道の学習に主体的に取り組もうとしている。 ●相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとしている。 ・役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ・互いに助け合い高め合おうとしている。 ●健康・安全を確保している。 	<ul style="list-style-type: none"> ●これまでの学習を踏まえて、自己や仲間の課題を設定している。 ●課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の課題を見直している。 ・練習や試合の場面で、自己や仲間の危険を回避するための活動の仕方を選んでいる。 ●柔道を生涯にわたって楽しむための自己や仲間に適した関わり方を見付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ●素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防を展開するために相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技のいずれかができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・柔道の伝統的な考え方について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ・技の名称や見取り稽古の仕方について、学習した具体例を挙げている。 ●課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ●試合や審判の方法について、学習した具体例を挙げている。

5 指導と評価の計画（全16時間）

【A】関心・意欲・態度 【B】思考・判断 【C】技能 【D】知識・理解

時	授業内容	学習活動における具体的評価規準	評価方法
1	オリエンテーション	・相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとしている。【A】	観察
2～4	既習事項の確認	・これまでの学習を踏まえて、自己や仲間の課題を設定している。【B】 ・健康・安全を確保している。【A】	学習カード 観察
5～10 本時8/16	得意技や連絡技を高める	・課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の課題を見直している。【B】 ・課題解決の方法について、理解したことを	学習カード 学習カード

		<p>言ったり書き出したりしている。【D】</p> <ul style="list-style-type: none"> 素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防を展開するために相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技のいずれかができる。【C】 柔道の学習に主体的に取り組もうとしている。【A】 	<p>観察</p> <p>観察</p>
11～14	攻防を楽しむとともに試合の運営を行う	<ul style="list-style-type: none"> 試合や審判の方法について、学習した具体例を挙げている。【D】 	観察
15～16	生涯にわたって柔道を楽しむための自己や仲間に適した関わり方を見付ける	<ul style="list-style-type: none"> 柔道を生涯にわたって楽しむための自己や仲間に適した関わり方を見付けている。【B】 	学習カード

5 本時の計画（8 / 16時間）

（1）本時のねらい

◎得意技や連絡技を高めるために、自分や仲間の課題を見直すことができるようにする。

【思考・判断】

（2）学習過程

	学習活動	教師の支援	
		指導上の留意事項	観点別評価と具体的支援
導入 10分	1 ウォーミングアップを行い、体を十分に動かす。	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の健康や安全を確認し、心身の準備ができるように呼びかける。 	
展開 30分	2 本時の学習の見通しをもつ。		◎課題解決の過程を踏まえて、自己や仲間の課題を見直している。 【思考・判断】 (学習カード)
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">自分や仲間の得意技や連絡技を高めるための課題を見直してみよう</div> 3 各自の課題を確認し、トリオで自分の得意技や連絡技の練習を行う。 (1) 自分の練習計画に沿って交代しながら練習を行う。 (2) 自由練習を行う。 (3) 自由練習での課題から、練習内容やポイントの確認、見直しをトリオで話し合う。 (4) 本時で見つかった課題やその練習方法について学習カードに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> トリオの役割は「取」「受」「観察」であることを確認する。 自由練習の中でどのようにすれば上手に得意技や連絡技で投げにつながるができるかについて見直すことを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 【投げにつながるポイント】 ①相手を投げやすい体勢に崩しているか。 ②相手の動きに合わせて技を掛けているか。 ③技を掛けるタイミングはどうか。 </div>	
まとめ 10分	4 本時の振り返りをする。 (1) 本時の技の出来映えや次時での課題について発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を通して良かった部分やあらたに課題になった点に気づかせながら共有化を図る。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">自分や仲間にあった見直しができているかを確認させる。</div>

授業研究会 記録用紙（各教科のまとめ） （保健体育科）

平成30年10月29日（月）

記録者 氏名 佐越 俊和、新田 光

出席者：遠藤幸樹（保健体育課指導主事）、神谷忠昭（授業者）、高橋留美子、
酒井久美子、佐越俊和、入江智幸、田口康成、栗津奈々、渡部真、
石崎庸介、三浦紀子、加賀屋勝義、佐藤匠、新田光

●授業者による感想・反省

導入段階では課題を提示し、見通しを持たせるようにした。また、ウォーミングアップで生徒の学習意欲を高めるために音楽をかけるようにした。展開では、「取」「受」「観察」のトリオを組ませて、取の技のかけ方について他の二人がアドバイスできるような場面を設けた。

生徒一人ひとりが自らの課題を把握し、それを改善するための練習計画をしっかりと立てており嬉しかった。しかし、技はすぐに習得できるものではないので、これからも支援を続けていき、「得意技で相手を投げることが出来る生徒」にしていきたい。

●授業のまとめ

工夫されている点、参考にしたい点

見通しをもたせるための課題の提示など、学習過程が確立していて、生徒が自分たちで動くことができていた。／「取」「受」「観察」のトリオ学習が効果的だった。／柔道部員がアドバイスしたり技をかけられたりと素晴らしい役割を果たしていた。／礼法指導が行き届いており、学習規律がしっかりしていた。／ウォーミングアップ中のBGMが効果的だった。／生徒が自分の考えをまとめて話すことができていた。／9名という少人数学習を十分に生かした授業形態であった。

改善点、授業者に聞きたい点

トリオ学習の組ませ方はもう少し工夫できると思う。柔道部員を未熟練者と組ませれば、より効果的な学習や安全の確保につながったと思う。／ウォーミングアップ中の音楽は音量を調節する必要がある。準備運動のかけ声が音楽でかき消されていた。／生徒には笑顔や笑い声があったが、楽しむと真剣のバランスも重視して欲しい。／ウォーミングアップの内容をもう少し充実させて欲しい。運動部員であっても転んだ際に衝撃を緩和する転び方ができない生徒が多い。前回り受け身の練習などもしてもらえれば助かる。／

技のポイントの提示について

意見が分かれたのが、技のポイントをいつ提示するのか、ということであった。今回の授業では、とにかく生徒に自分で考えて欲しいというねらいがあり、授業の終盤まであえてポイントを提示しなかった。

しかし、明確な根拠がないままだと「受」や「観察」が十分なアドバイスが出来ないのではないか、序盤で提示する方法も一つではという意見も出された。

●指導助言

1ヶ月前課題に沿った授業形態であったと思う。生徒がしっかりと柔道に向き合い、楽しんでいた。前時までの活動で練習方法を含む知識がしっかりと身についており、課題を見直すというねらいに向けた授業が出来ていた。

スポーツへのかかわり方には「する」「みる」「支える」に加え、「知る」がある。多様なかかわり方を通して生涯スポーツにつなげていってほしい。

数学 I 学習指導案

実施日 : 平成30年10月29日 (月) 6校時
会場 : 秋田県立横手清陵学院高等学校
クラス : 1年2組(男子18名、女子19名)
学校名 : 秋田県立横手清陵学院高等学校
指導者名 : 奥 健悦

1 単元名 数学 I 第5章「データの分析」 5「データの相関」

2 単元の目標 統計の基本的な考えを理解するとともに、それをを用いてデータを整理、分析して傾向を把握できるようにする。

3 指導に当たって

(1) 単元観 データの分析の内容は、情報化社会を生きてゆく生徒達にとって活用する機会が多いものである。情報化社会の進展により、様々なデータを整理し、規則性、法則性を見いだし、その先を見通し、かつ全体の傾向を正しくとらえ、それに基づいて判断する能力が強く求められている。数学 I のデータの分析では「記述統計学」の基本的な概念と考え方について学習する。なお「推測統計学」については、数学Bにおいてその基本的な考え方を学習することになる。

単元計画 第5章 「データの分析」 10時間 (教科書: 数研出版 新編数学B)

1. データの整理	(0. 5時間)
2. データの代表値	(1時間)
3. データの散らばりと四分位数	(1. 5時間)
4. 分散と標準偏差	(2時間)
5. データの相関	(2時間)
補充問題・章末問題	(2時間)
課題学習	(1時間) (本時)

(2) 生徒観 授業に真面目に取り組む生徒達であるが、普段から物静かな生徒が多く、率先して意見を述べる生徒は少ない。高校入学後に数学の授業でグループ活動をする経験はなく、数学の課題に対してどのように取り組んでよいか分からないことも予想される。「データの分析」の学習内容の定着も気がかりだが、計算が苦手な生徒も多いので読み取りに必要な数値を求められない場合も考えられる。

(3) 指導観 データの分布の様子を1つの値で代表させると、2つ以上の同種のデータ群を比較する上で都合がよい。よく使われるものに平均値、最頻値、中央値がある。しかし、いくつかの代表値が等しい場合でも、2つのデータの傾向が異なる場合がある。2つのデータの傾向の違いをとらえるために、四分位数や箱ひげ図、分散を用いて比較することを考えさせたい。
また、2つの変量に関しては、相関を散布図や相関係数で表し、データから読み取れることを言葉で表し、発表できるように活動させたい。

4 本時の学習活動

(1) 本時の学習目標 (評価規準) **【数学への関心・意欲・態度】**
課題を把握し、与えられたデータを整理し、代表値を求めようとする。
また、箱ひげ図や散布図を描き、分かることを積極的に言葉で表現しようとする。

(2) 本時の指導にあたって 本時は与えられたデータについて自分達で整理し、代表値を求めたり、図で表現したりして、データから読み取れることをグループで見つけてゆく。生徒達はグループでそのような活動をする経験が乏しいと思われるので、生徒の活動の様子を踏まえながら、丁寧な支援を心掛けたい。
また、言語活動を活発化させるために「データから何が分かるかな?」という興味を持たせるような働きかけを心掛けたい。必要に応じて計算機の使用も考えたい。

(3) 指導過程 {評価の観点・・・①関心・意欲・態度 ②見方・考え方 ③技能 ④知識・理解}

	学習内容	学習活動	指導上の留意点																			
導入 (7分)	<p>本時の目標の確認</p> <p>目標 データから読み取れることを考え、発表しよう。</p> <p>課題プリント</p> <p>・個別に問題1を解かせる。</p> <p>問題1 次のデータは、あるクラスの生徒20人の1週間の学習時間の合計を調査したものである。平均値、中央値を求めよ。(単位は時間)</p> <table border="1"> <tr> <td>18</td><td>21</td><td>12</td><td>25</td><td>22</td><td>24</td><td>19</td><td>13</td><td>28</td><td>10</td> </tr> <tr> <td>14</td><td>24</td><td>16</td><td>31</td><td>22</td><td>18</td><td>27</td><td>20</td><td>34</td><td>26</td> </tr> </table> <p>・生徒を指名し、答えを確認する。</p>	18	21	12	25	22	24	19	13	28	10	14	24	16	31	22	18	27	20	34	26	<p>事前にグループごとに机を並び替えておく。</p> <p>・初め教科書を開かずに考えさせる。状況に応じて利用させる。</p> <p>・計算が難儀なようであれば、計算機を使わせる。</p>
18	21	12	25	22	24	19	13	28	10													
14	24	16	31	22	18	27	20	34	26													
展開① (25分)	<p>グループの説明</p> <p>・グループごとに解答する問題の番号を確認する。 ・役割の分担を決める。(発表者、記録者、図表) ・時間配分の確認。</p> <p>課題プリント (グループ学習)</p> <p>・グループごとに取り組む問題を指定し、データから読み取れることを考えさせる。</p> <p>問題2-1 次のデータは、高校1年の1組と2組のスポーツテストの握力の結果を示している。このデータからどのようなことが分かるか。</p> <p>問題2-3 次のデータは、高校1年2組の男子のスポーツテストの握力とハンドボール投げの結果を示している。このデータからどのようなことが分かるか。</p> <p>・出てきた結果を発表用A3用紙に記入する。 ・図表を発表用A3用紙に記入する。</p>	<p>・グループごとに取り組む問題を指定し、データから読み取れることを考えさせる。</p> <p>2-1、2-2は2つの異なる集団の間の比較。</p> <p>2-3、2-4は同じ集団の2つの変量の相関。</p>																				
展開② (15分)	<p>発表</p> <p>・発表のルールを確認する。 ・分かったことを発表し、全体で共有する。</p> <p>データを集めて、調べてみたいことはないか話し合いをさせる。本校の「探究」活動で役立てられないか考えさせる。</p>	<p>2つのデータの比較や傾向について、述べることができるか。 (観点①)</p> <p>データの分析をこれからの活動に活かそうとしているか。 (観点①)</p>																				
整理 (3分)	<p>振りかえり</p> <p>本時の感想を課題プリントに記入する。</p>																					

(4) 本時の評価

評価項目	評価の視点 [判断基準]		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる[A]	おおむね満足できる[B]	
関心・意欲・態度	データを整理し、代表値を求めようとしている。分布を図で表そうとしている。読み取れることを自分の言葉で説明している。	データを整理し、代表値を求めようとしている。データの比較を言葉にしようと努力している。	データを並べ替えたり、平均値を求めたりすることで、何か気付くことはないか促す。

授業研究会の記録（数学科）

平成30年10月29日（月）

記録者 氏名 進 藤 洋 一

（助言者）秋田南高等学校中等部 教育専門監 庫山 徹

（出席者）1班 ◎進藤洋一（高数）、長沢留美子（中数）、小田島宏、細谷進（理）
五十嵐宏秀、黒澤一元（工）

2班 ◎渋谷 知（高数）、佐々木真、佐藤大輝（中数）、
渡部悦美、渡部亮太（理）、鍛治実、小松直鎮（工）

3班 ◎照井晴美（高数）、伊勢谷昭則（中数）、瀬々将吏（理）
斧谷努、加藤司、成田忍（工）

→◎班長

●授業者による感想・反省

- ・授業については、指導案にそった事前の計画と想定通りに行うことができた。
- ・生徒の活動については、予想以上に真剣に活発に活動していたと思う。
- ・計画には「主体的に活動する場面」を入れていたが、授業の進行状況によっては、やらないことも予定していた。実際に、数値の処理に難儀していたのでやめた。
- ・生徒による事後評価では、肯定的な評価が多く、事前事後で良い変容が見られた。

●授業のまとめ

1班

- ・プリントで学習の見通しができてよい。
- ・グループ活動では、生徒で役割分担をして、それぞれ協同できていた。
- ・中学校とのつながり（学習形態・内容）があるとよい。
- ・データを整理してからの分析することが目標なので、問題1は不要だと思う、

2班

- ・指示されたことを真面目に取り組んでいた。
- ・身近なデータで生徒に関心を持たせた。
- ・データの整理に時間がかかって、分析までたどり着けなかった。
- ・目標を板書するとよい。

3班

- ・自分たちのデータであることを伝えていて良かった。授業の最後ではなく、最初であれば取り組み方が違ったと思う。
- ・言語活動について、用語を正しく使って発表していた。
- ・いろいろな視点で考えを深められる投げかけがあっても良かった。

●指導助言

- ・生徒は与えられた役割に対して、自主的に活動していたが、自発的な活動とまではたどり着けなかった。
- ・自発的な活動とは、自ら問いを発信して、考えること。データの一部を除けば、相関関係を見いだせるのではないかと考える生徒もいた。
- ・データから読み取れる結果を予測することが不足していた。「握力とハンドボール投げには相関関係があるか？」など問いかけから始めるともっと興味をもって、活動できると思う。

2 探究活動について

瀬々 将吏

学校名	横手清陵学院	指定期間	平成29・30年度
-----	--------	------	-----------

探究活動等モデル校実践事業
事業実施報告書（抜粋）

① 学校の概要

(1) 現状と課題

本校は平成20年度より、学校目標「21世紀を主体的に生き抜く人材の育成」の達成のために、課題研究を中心とした探究活動を実践してきた。平成22年度から27年度までは文部科学省スーパーサイエンスハイスクールに指定され、主に自然科学分野の課題研究を充実させることにより、「探究力」の育成に努めてきた。この取組は、次期学習指導要領において検討されている「総合的な探究の時間」を先取りしたものとと言える。

本研究の目的は、これまでの実践の成果を基に、課題研究を中心とした教科横断的な探究活動を全校規模で実施することにより、本校が育成を目指す資質・能力を育成することである。

本事業を通して育成を目指す資質・能力
= 高い志、探究力、主体性、人間

(2) 目指す生徒像

【教育目標】21世紀を主体的に生き抜く人材の育成

【校訓】切磋琢磨 学べ 競え 望め

【平成30年度の重点目標】主体性 探究力 人間力の育成による高い志の実現

- 1) 「学べ」…自ら問を発し、課題を解決する「探究力」をはぐくむ実践を通して、主体的に学ぶ意欲を高めるとともに、わかる授業、魅力ある授業の実現により学力向上を図る。
- 2) 「競え」…さわやか整容、さわやか挨拶を励行し、あらゆる教育活動を通して自他の尊重や思いやりの心をはぐくむとともに、「品性」と「人間力」を育成する。
- 3) 「望め」…工業系学科をもつ中高一貫教育校としての特色を最大限に生かし、教育効果を高める「中高連携」を一層推進して、生徒に「高い志」を抱かせ、実現につなげる。

(3) 課題克服に向けた手立て

「総合的な学習の時間」において、高校1年生と高校2年生の全員を対象として課題研究を実施する。研究テーマとして、学問や社会に明確に位置づけられ、新しい価値を産み出すものを、生徒の自主性を尊重して設定させる。普通科、総合技術科ともに、1年次に「探究基礎」、2年次に「探究」を実施する。

ア 普通科

(ア) 探究基礎 （高校1年次、1単位）

「社会と情報」で学んだICTスキル、クリティカルシンキング、統計学的視野等のスキルを課題研究の場面で適切に使えるようになるために、「社会と情報」の授業と連続的な運営体制のもと、初歩的な課題研究を行う。クラス展開で実施する。優秀な研究を選抜し、外部の発表会で発表させる。

(イ) 探究 （高校2年次、2単位）

高校1年次「探究基礎」で課題研究の基本的な流れを体験した上で、より実践的かつ高度な課題研究を行う。ゼミ形式で実施する。優秀な研究を抜粋し、外部の発表会で発表させる。

イ 総合技術科

(ア) 探究基礎 （高校1年次、3単位）

高校2、3年次の探究活動に必要な探究力（情報スキル、数量スキル、言語スキル）を育成する。

情報検索、プレゼンテーション資料作成などのICTスキル、アンケート調査の方法、ディベート、小規模な「ブレ探究」などを実践的に行う。

(イ) 探究 (高校2年次、2単位)

ゼミ形式で実施する。生徒自身がテーマを設定し、探究活動を行う。また、校外の発表会等にも参加する。高校3年次で実施する「課題研究の」準備を行う。

ウ 職員研修

職員の資質向上のための職員研修を実施する。

目的 探究活動の指導法に関する研修を受講し、職員の力量向上を図る。

講師 探究活動、総合的な学習の時間等の指導に精通した専門家
(大学教員、高校教員、民間の実践家など)

対象 本校教職員

日時 11月を予定

② これまでの取組実績等

ア 取組実績一覧

(ア) 授業

実施期間	対象生徒	名称
平成30年1月～平成30年3月	普通科1年	探究基礎
平成29年4月～平成30年3月	総合技術科1年	探究基礎
平成29年4月～平成30年3月	普通科2年	探究
平成29年10月～平成30年3月	総合技術科2年	探究
平成31年1月～平成31年3月	普通科1年	探究基礎
平成30年4月～平成31年3月	総合技術科1年	探究基礎
平成30年4月～平成31年3月	普通科2年	探究
平成30年10月～平成31年3月	総合技術科2年	探究

(イ) 行事 (授業中に行われるものを含む)

実施日	対象者	名称
平成30年2月9日	普通科1年	探究基礎 クラス発表会
平成30年3月16日	1年生 全生徒	探究基礎 学年発表会
平成29年9月12日	普通科2年	探究 中間報告会
平成29年11月14日	普通科2年	探究発表会
平成30年1月26日～27日	普通科2年	東北地区サイエンスコミュニティ研究校発表会
平成30年2月4日	普通科2年	秋田県SSH指定校等合同発表会
平成30年2月6日	普通科2年	サイエンスダイアログ
平成31年2月8日	普通科1年	探究基礎 クラス発表会
平成31年3月15日	1年生 全生徒	探究基礎 学年発表会
平成30年9月11日	普通科2年	探究 中間報告会
平成30年11月13日	普通科2年	探究発表会
平成31年2月3日	普通科2年	サイエンスカンファレンス
平成31年2月6日	普通科2年	サイエンスダイアログ
平成30年12月10日	教職員	職員研修会
平成31年2月	教職員	先進校視察

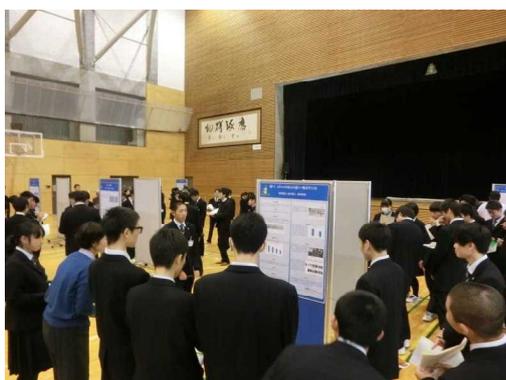
イ 実践の詳細（写真のみ抜粋）



平成29年度「学年発表会」における総合技術科の発表。刃物の研磨に関する内容であった。



平成29年度「学年発表会」における質疑応答の様子。活発な議論が行われた。



平成30年度「探究発表会」の様子



職員研修講師：石森広美 氏



職員研修の様子



先進校視察で訪問した一関第一高等学校高校の授業風景

③ 成果と課題

(1) 実施による成果とその評価

本事業により取り組んだ新たな取組と成果は以下の通りである。

ア 教科書の導入 (②イ (イ) (ウ))

啓林館「課題研究メソッド」「課題研究ノート」を普通科の生徒に購入させ、これを使って授業を展開した。生徒、教師とも、教科書があることにより安心して学習できる。特に、書籍に掲載されているワークシートやチェックリストが極めて有用であり、探究活動の指導経験が乏しい教員でも、このワークシートに取り組ませることにより指導ができるようになった。

イ 「探究基礎」の一斉実施 (②イ (イ))

従来クラス展開としてきた高校一年普通科「探究基礎」を、ホールでの一斉実施が可能なようにカリキュラムを再編成した。主担当探教員が全体指導を行い、他の教員も TT としてそれに参加することにより、指導の様子を把握でき、次の年には自分で指導が行えるようになった。

ウ 「探究基礎」発表会の合同実施 (②イ (イ))

普通科・総合技術科は別カリキュラムで実施しているが、発表会を合同で行うようにした。これにより、両科の「探究基礎」で行われている特色ある研究を全校で共有できるようになった。

エ 職員研修の実施 (②イ (エ))

全校職員を対象とし、探究活動の指導法に関する職員研修を実施した。探究学習指導へのモチベーションが向上した。

オ 先進校視察の実施 (②イ (ウ))

課題研究に力を入れている3校への視察を行った。他校と本校の取組を比較することにより、本校の課題が鮮明になった。

総括として、これまでの活動を無理なく延長し、どの教員にとっても指導しやすい課題研究を実現するという研究目的は十分達成できていると考える。

(2) 実施上の課題と今後の取組

(1)で述べたように、本事業においては、過去に取り組んできた課題研究を充実させる取組が十分成果をあげている。しかしながら、入学してくる生徒の質・量両面における変化や、学校教育全体における制度改革など、本校の探究的な学びを取り囲む状況は大きく変化している。これに対応するには、従来の延長を越えた、探究活動質的な見直しが必要と考えられる。このような共通認識のもと、2年間の本事業における取組を総括する会議が行われた。ここで行われた議論を土台にして今後の課題とその解決策について議論した。

名 称：分掌反省会議 日 時：平成31年2月21日 (木) 参加者：探究推進部員
--

結論として、探究活動の学習課題として、全く自由とするのではなく、**学校としての大テーマ**を設定することにより、継続的な指導や意義のあるテーマ設定が行え、その結果、対話的・主体的な学びが大きく飛躍するのではないかという提言に至った。この議論を受けて、次年度の探究活動を計画する予定である。

3 校外研修の記録

- (1) 平成30年度秋田県高等学校教育研究会
地理歴史・公民部会研究大会地理分科会

栗林 幸悦

- (2) 全国高等学校国語教育研究連合会
第51回研究大会秋田大会

宮原 公

- (3) 平成30年度秋田県高等学校教育研究会
進路指導部会秋季研究発表大会進学分科会

細谷 進

- (4) 平成30年度学校組織マネジメント研修講座

鎌田 正樹

- (5) 平成30年度教員派遣スキルアップ研修

小松 直鎮

地理歴史科（地理B）学習指導案

日 時	平成30年11月8日（木）6校時
場 所	秋田県立秋田西高等学校2年D組教室
対象クラス	2年DE組地理B選択者
使用教科書	新詳地理B（帝国書院） 詳解現代地図（二宮書店）
副 教 材	新詳地理資料COMPLETE（帝国書院）
指 導 者	横手清陵学院高等学校 栗林 幸悦

- 1 単元名 第Ⅱ部2章1節 世界の農林水産業
2 農業の地域区分
(3) 新大陸で発達した企業的農業
- 2 単元の目標 世界の農業地域の区分と農業の基本的分類についてその基礎的知識の定着をはかり、自然・社会条件との関わりを考察する。
- 3 単元（題材） オーストラリアの農業地域区分
- 4 単元計画
- 1 農業の発達と分布
 - 2 農業の地域区分
 - 3 現代世界の農業の現状と課題
 - 4 世界の林業・水産業
 - 5 日本の農林水産業

【単元の評価基準】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
質問や発問に積極的に取り組み、オーストラリアの農業に関心を高め、意欲的に学習しようとしている。	オーストラリアの自然環境に関する資料を読み取り、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	オーストラリアの自然環境に関する資料を活用し、農業地域の広がりをもとめることができる。	オーストラリアの農業地域区分を把握するとともに、その背景にある関連知識を身につけている。

- 5 生徒の実態 理型選択者15名（男子11名、女子4名）のクラスである。全体的に大人しい生徒が多いが、真摯な態度で授業に取り組んでいる。地理に対し、高い関心をもっている生徒が多い。
- 6 本時の計画
- (1) 本時のねらい
- ①オーストラリアを事例として、自然環境と農業地域区分との関連を理解する。
 - ②個々の思考のほか、グループ協議等を通して、クラス全体で意見を共有し、理解を深める重要性を認識する。

(2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	<p>○本時の学習課題を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>本時の目標 『オーストラリアの多様な農業の背景にある様々な要因について理解する』</p> </div> <p>○日本とオーストラリアの食料自給率の資料を提示し、その違いについて考察する。(5分)</p>	<p>○オーストラリアの気候区分を提示する。 ○考える時間を提示する。</p>	<p>○与えられた資料を参考に、意欲的に考えているか。(A C)</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>問1 なぜ、オーストラリアは日本と比べて、食料自給率が高いのか。</p> </div>			
展開1 10分	<p>○自分の意見を隣の人に発表する。(5分) ○2人の意見をまとめ、発表する。(5分)</p>	<p>○食料自給率の違いは単に食料の生産量だけでなく、国土や人口の大小が背景にあることを説明する。</p>	<p>○自分の考えをきちんと表現できるか。(B)</p>
展開2 10分	<p>○オーストラリアを含めたいくつかの国の品目別食料自給率の資料を提示し、それぞれの国のものか考察する。(5分) ○正解を提示する。(5分)</p>	<p>○4人のグループを作る。 ○統計資料などを見ないで、考察する。 ○全体の食料自給率が高いオーストラリアでも、すべての品目が高いわけではないことを説明する。</p>	<p>○グループ内で積極的に協議に参加しているか。(A) ○既習事項である気候環境が理解できているか。(D)</p>
展開3 15分	<p>○オーストラリアの農業地域区分図の作成に取り組む。(5分)</p>	<p>○オーストラリアの気候環境を踏まえ、年降水量500mm未満の地域で行われている農業について発問する。</p>	<p>○既習事項が理解できているか。(D)</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>問2 なぜ、オーストラリアの乾燥地域では農業が盛んに行われているのか。</p> </div>			
	<p>○乾燥地域における農業について考察する。(5分)</p>	<p>○グレートアーテジアン盆地の『掘り抜き井戸』やスノーウーマウンテンズ計画について説明する。 ○他の気候帯で行われている農業について説明する。</p>	<p>○グループ内で積極的に協議に参加しているか。(A)</p>
まとめ 10分	<p>○本時の授業を終えて、疑問に思ったことや感想をまとめる。</p>	<p>○まとめる時間を提示する。 ○本時で学んだことや気づいたことを記入するよう指示する。</p>	<p>○既習事項を踏まえ、本時の内容を深めることができたか。(A B D)</p>

A : 関心・意欲・態度 B : 思考・判断・表現 C : 資料活用の技能 D : 知識・理解

分科会の記録（地理）

授業者：栗林 幸悦（横手清陵学院高等学校教諭）

指導助言者：佐々木英憲（西目高等学校校長）

司会者：靱山 貴文（湯沢高等学校教諭）

記録者：菅沼 善彦（大曲工業高等学校教諭）

司会：最初に授業を担当した栗林先生から感想をお願いしたい。

栗林：オーストラリアの農業だと単体で授業できるということで設定した。最初は世界の食料需給まで授業が進んでいけば、食料事情について生徒に感想等を述べさせながら活発なグループトークができるのではないかと考えた。今日の入り口を食料自給率にしたのもそのような流れからである。勤務校は中高一貫校なので中学にも授業に行っているが、中学の授業は、知識の習得だけでなく考えさせることを中心とした授業が多い。今日の授業も考えさせる場面を多く作りたいと思い、演習問題や資料を読み取ったりする活動も入れてみたが、時間が足りなくなってしまった。また、普段は12人の授業で、2人のペアを6組作ってペア活動をやることもあるが、活発な意見交換ができていた。今日は3人から4人グループとしたが、もう少し時間が取れるとよかった。前半に時間がかかってしまい、本当であれば、南半球の端境期等の農業の優位性まで考えを及ばせたかった。また、漫画「美味しんぼ」にあるのだが、タスマニア島で日本向けのソバを栽培している例などを紹介すれば、更に広がりがあったかもしれない。今、新ソバの季節なので…。中途半端な終わり方になってしまった。これまでヨーロッパやアメリカの農業を勉強してきて、つながられることもあったと思うが、オーストラリア独自の地下水の利用や灌漑計画等の身につけて欲しい用語も取り上げた。導入に時間を掛けすぎたのが反省点である。皆さんから様々な意見を伺いたい。

司会：順番に意見を伺いたい。まずは、いつもこのクラスで授業をしている佐藤先生から生徒の動きについても含めてお願いしたい。

佐藤（秋田西）：今日は2名欠席していたが、いつもは15名である。理型の生徒で、男子が多いが、指名しても聞かれたこと以外は話そうとしない受け身な生徒たちだが、問題演習で解かせた後にペアワークで教え合いをさせたりすると、楽しそうにやることもある。指導主事訪問の一ヶ月前課題を機会に、言語活動の充実ということで、生徒に話させたり発表させたりする場面を多くしているが、まだ浸透せず、今日は緊張もしていたと思うがおとなしい印象であった。しかし、フリップに書かせて発表する活動は、新鮮だったようで笑みも出ていた。また、グループ活動ではお互い助け合いながら活発に意見交換ができていた。昨日、栗林先生が来校しアメリカの農業の授業を参観してもらったが、アメリカの農業で学習したことを今日のオーストラリアの授業の中でフィードバックしてもらい有り難い。明日以降の授業では、今日学んだ地下水や牧畜のことなどに関連させながら進めたい。生徒の新しい一面を見ることができたので、次の時間から活かしていきたい。

高橋（横手）：中学校での授業の経験を活かした授業だったと思う。中学校の授業方法につ

いて後で詳しく聞きたい。フリップ（ホワイトボード）に直感で書かせて、みんなに見せるという方法が新鮮でありよかった。パソコンを使った授業で、自分の思ったこと話し合いもさせずに打ち込ませて、瞬時にディスプレイに映してみんなの意見を見合う方法を見たことがあるが、違和感を感じた。今日みたいに、みんなに見せて話し合うのは色々なものが生まれると思った。また、「なぜ、オーストラリアは日本と比べて、食料自給率が高いのか」の問いに、「農業が可能な面積（農耕地）が広いから」と2グループが答えていたのはすごいと思った。時間的な制約はあったと思うが、そこをつなげて考えさせていけばおもしろかったかもしれない。マーク模試の問題を解かせていたが、私もマーク演習ではなく考えさせるために同じ方法をよくやっている。考えさせた後に相談させると、生徒たちは喜び、意見を言い合っている。昔より話し合いによって正解の方向に行く確率が高い。反面、定着しない。授業で感触があっても定着していない。話し合いは上手だが、考え方が定着しない。不思議である。皆さんはどうなのか教えていただきたい。

司会：今の話はよく言う、活動あって学びなし、みたいなものか。

高橋：学び合っても残らない…。

司会：後半、またその話題にふれたい。

岩谷（能代）：農業の切り口についてだが、本校では二宮書店の教科書を使っているの、国ごとではなく、人口の多い少ないの視点で見ているが、今日の授業のようにアメリカやオーストラリアなどのように国ごとにアプローチすると知識が定着することが分かった。また、ホワイトボードは私も使ったことがあるが、今日使ったボードの大きさが、考えを書かせるのに適正のサイズではないかと感じた。この分野はどれぐらいの時間をかけてやっているのかお聞きしたい。また、3年生で演習をやっていると毛細管現象や塩害についての質問があるが、このオーストラリアで取り上げるのが適正なのか、それともエジプト等で取り上げているのか、そしてどこまで詳しく学習すべきかお聞きしたい。

三浦（秋田中央）：まず、感心したことは、これは「地理の王道」とも言えることだが、色々な事象にふれていたことである。自然環境に関しても様々な地名を出し、しかも地名や事象を自由自在に操りながら、オーストラリアの農業について教えていた。初めて接する生徒も、先生の人柄もあり、違和感なく授業についてきていた。ホワイトボード（フリップ）の使い方も大いに勉強になった。学習課題とは、生徒が自由自在に設定するのが本来の姿である。例えば、今日の授業は、日本とオーストラリアの食料自給率が何%かという問いから始まり、生徒の興味関心を引き、生徒の様々な反応があった。意外にオーストラリアの自給率が高かったり、意外に日本の自給率が低かったり、生徒によっては色々な反応があったと思うが、それぞれにそこで学習課題を考えさせてみる。なぜ、オーストラリアの食料自給率は日本より高のかを考えてみよう、という切り口でも十分にオーストラリアの農業を、生き生きと、ビビッドにとらえることができたのではないか。また、あえて言うと今の生徒はクイズ好きなので、食料自給率について4つから選ばせる方法もある。何%かを記入させるより、4つからの選択だと集中し、関心・意欲につながる可能性もないわけではない。センター試験のように、日本とオーストラリアの食料自給率の正しい組み合わせを選ばせる問題を出すという導入もできたかもしれな

い。

吉川（秋田商）：ホワイトボードの使用が参考になった。2人だけのペアワークだと、他者の意見は相手1人分しか聞き入れられないが、ホワイトボードで全体に示すことによってクラス全員に意見を伝えることができると感じた。また、アメリカとオーストラリアの農業との結びつきを確認することで予習・復習となり効果的だと感じた。盆地などの地名も繰り返し何度も話題に出していたが、音として耳に残るので頭にも残り、後にどこかで耳にしたときに思い出せると思うので生徒のためになると思った。

奈良（本荘）：フリップを使っただけの導入は新鮮であった。生徒の緊張も和らぎ、授業への興味・関心も高める活動ができていたように感じた。オーストラリアの食料自給率の高さを、日本や秋田のものと比較して、生徒の活動を通して疑問も引き出せていることが勉強になった。気候区分図と降水量を対比させて、演習問題に取り組みせ正答に導いていたのも前の活動からのつながりを感じることができて勉強になった。また、生徒の活動の中で、アメリカの農業で学んだ知識を活用すれば答えを導き出せそうなところで時間がかかり、授業の進行が遅れてしまっていたようだ。前回学んだことが出てこなかったもので、知識を定着させることは難しいと感じた。

司会：たくさんいい発言に感謝したい。後半は、大会主題に関して、活動等学びの姿勢はいいが定着しないこと、教える内容ボリューム、何年生をもっているか等の話をしたい。

司会：貿易、輸出を意識させることは、この單元ではしないのか。

栗林：本日の最後にふれたいと思っていたが、そこまで進めなかった。

司会：全部教えるのではなく、あとは引き算。どこを教えて教えないのかという。

栗林：今日の指導案には、貿易面での南半球の優位性については載せていない。授業のプリントを作成中に、プラスアルファで、オーストラリアが小麦の端境期を利用して、南半球では唯一小麦が輸出上位にくることにつながれると考えた。

司会：アメリカでは春小麦・冬小麦の学習をするが、佐藤先生は小麦カレンダーを説明しているのか。

佐藤：問題演習でやったりしている。

高橋：岩谷先生の質問にあったが、みなさんは塩害についてはオーストラリアでふれるか。私はふれている。ブラジルの森林伐採後の土地の荒廃等もからめて取り上げている。環境問題については、このような場所でふれるようにしている。

司会：乾燥帯での灌漑農業では、塩害とセットにやった方がいいでしょうね。

栗林：センターピボットで使用するロッキーの麓の地下水も近年枯れ気味になっているようなので塩害についてふれられるが、毛細管現象については理科っぽいので、地理学としては…。

高橋：理科っぽい話に食いつく生徒と離れる生徒がいる。文系と理系でそこははっきりしている。

岩谷：理数科の生徒はそこに食いついてきたので、ティッシュとコーヒーを使って説明した。初めてあんなことをした。それで質問をしてみた。

栗林：それは生徒たちの関心の高い証拠である。

三浦：なぜ、塩が上にたまるのかというのは理型ならではの素朴な疑問である。塩害をどこでやらなければならないという必然性は全くなく、私は気づいたらどこでもやるようにし

ている。アフリカやサウジアラビアのセンターピボット等でも。

高橋：共通性と異質性を意識させると、ここで起きることは他でも起きると考えさせる。生徒は、塩害は発展途上国で起きると思っている。

三浦：地理というのは典型的な事例はあるにせよ、色々な地域で似たり寄ったりのことが起きている。固定観念で捉えさせると逆にダメだと思う。

高橋：生徒たちがオーストラリアの食料自給率が低いと思っていたことにびっくりした。

栗林：3年生の授業をしていると、中国をどんどん過大評価していく。国としては大きい存在だが、一人の平均は小さいと言うと驚く。先進国だと思っている。ロシアを先進国だと思っている生徒も多い。ロシアも原油で潤っているだけで、重工業は発達しているが、過大評価している。データでは極端なものを選ばなければ中国なので、偏った考えを持ってしまっている。

司会：先ほどの質問にもあったが、栗林先生は同じ事象を説明するのに、高校と中学校と説明の仕方を変えたり、意識していることはあるのか。今回の大会主題にからめて何かあるか。中学生の方が積極性はあると思うが。

栗林：今年の中2に行っている。33人がすぐ4~5人のグループに分かれて活動できるが、5人になると確実に働かない者が出てくる。中学の先生に授業のプリントを作ってもらっているが、大きな箱の部分が多い。何とかをまとめてみよう、何とかを考えてみようというものばかりでプリントにも資料をたくさん載せている。今、歴史を教えているが、考えさせることが多い。2人組でまとめさせたりとか。清陵高校には清陵中でそのような経験をしてきた生徒が半分ぐらいいるが、慣れている。うまく動かしてやると自由気ままに活動できる。

高橋：そのような生徒に昔ながらの授業をすると反応は悪くなるか。

栗林：悪くなる。歴史分野は、私も歴史の面白さを知らないと思われないと思、一生懸命勉強して話すと食いついてくる。地理は専門なので、ぐわーっとやってしまうと波が引いていくかのようにトーンダウンしていくのがわかる。活動させていないと中学生は動かなくなる。高校入試が無い学校なので到達度をはかるのが難しい。これは中高一貫校が抱える課題である。高校はこういうところだと慣れさせておくことも大事だとも言われている。いつまでもワークばかりではないと。

司会：他の学校では主体的・対話的な授業や新しい学習指導要領に向けてどんな工夫をしているか。

三浦：主体的な学びというと必ずしも自分で図書館に行って調べたり、研究レポートをまとめるのだけではない。例えば、我々がグラフを提示したり、この資料とこの資料はどのような関係があるのかとか、これまでの発想を変えるような写真等を提示して、何かしらの気づきが次なる彼らの主体的な学びにつながると思う。授業の中で、4つずつ問いを出して、個人で考えさせたり意見の交換をさせることを毎時間、意図してやっている。

司会：2日前の指導主事訪問で同じことを聞いた。一番いいのは、今日学んだことを家でも自学してみようと思うこと。興味があることを調べてみようというのも主体的な学習。昔ほどアクティブラーニングと言わなくなったが、知識もあって当然、それをベースにした考えだと言っていた。今の三浦先生のお話は示唆に富んでいると思った。能代高校の岩谷先生は何か工夫していることはあるか。

岩谷：地理Aの授業をおもしろくできなくて、Classiのサービスを使っている。スマホに課題を配信し、それについてグループで話し合わせた結果を、分担し入力させる取り組みを2回やってみた。もう少し試してみたい。他のグループの意見を見るという作業を省略無く行え、次の主体的活動につながっていけばいいと思う。他のグループはこんなにやっているんだというのがわかるように、スクリーンに映し出してやるのを継続するか、書かせるのに戻していくかはこれから検討していきたい。

司会：西高には大学受験とか就職とか色々な生徒がいると思うが。

佐藤：今日の授業をやってもらった理型のクラスの生徒も様々な進路希望を持っている。3年生は今演習に入りつつあるが、2年生の系統地理で單元ごとに学んだことが地誌でやっとながって、積極的、意欲的に学び始めている生徒もいれば、そうでない生徒もあり、そういう生徒も引きつけながら演習させていくのは難しいと感じている。全員に問題演習のプリント配り、一問ずつ指名していき、間違ったら正解するまで同じ人に続けてやらせている。指名するルートを変えるなど刺激を与えて、なるべく飽きさせないように授業を進めている。解説の前に隣同士で、解答を見せ合い、教え合い、指摘し合っている。自分の解答が当たっているととても楽しそうで、そんな時に色々覚えたり、地理が楽しいと思うのではないかと思う。同じ人を指名し続けているのは、自分で考えて正解するという感覚を持たせて、そこを褒めながら授業をしようと思っているからである。進路志望が違う生徒が多い学校なので難儀だが、今後も生徒を褒めて楽しませるようにやっていきたいと思う。

司会：本荘の奈良先生は対話的とか深い学びについてどのように工夫しているか。

奈良：グループで活動し、色々な意見が出たときに、生徒の意見を活用する自信がまだなく、グループ活動にチャレンジしていないが、ペアでの活動機会はなるべくとるようにしている。ペアで相談させると発言しやすくなるようだ。アクティブラーニングばかりだと知識の定着を図ることは難しいので、教材や内容に応じて、生徒に活動させたい内容を加味しながら授業を考えている。生徒に気づかせる地理的事象や矛盾などを生徒に発見させたいところもある。グループで活動しても個人に知識が集約されるように、グループを活動だけにさせないで、個人での振り返りの時間を設けることが大事だと思う。学習意欲の違いもあるのだろうが、ペアで話をさせても雑談する生徒もいて、何でもグループやペアで活動させるのは難しいと感じている。

司会：意見は尽きないが、時間となったので、最後に指導・助言をお願いします。

<指導・助言>

まず始めに、本日、研究授業を担当された横手清陵学院高等学校の栗林幸悦先生、大変お疲れ様でした。また、授業研修会で熱心に協議に参加していただいた会員の皆様、ありがとうございました。

ここでは、大会主題にあたる「主体的・対話的で深い学び」に向けて、地理の授業をどう展開させるのか、お時間をいただいて、お話ししたいと思います。

文部科学省では、現行の学習指導要領の課題を踏まえて、地理歴史科の教育目標を、「公民としての資質・能力」を育成することを目指し、その資質・能力の具体的な内容を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示してい

ます。そして、この三つの柱を育成するために次期学習指導要領に明記されたのが「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」で、まさに今回の大会主題ということになります。

「主体的な学び」は、自分の考えをもち、自分の意見を表現するとともに相手の意見を受け入れる学びで、「対話的な学び」は、生徒同士の協働、コミュニケーション活動等を通じて自分の考えを自己相対化して深める学びです。これに対して、「深い学び」は、各教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識と関連づけて深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題の発見と解決を図る学びのことです。

この「見方・考え方」について、中央教育審議会の答申 別添 3-4（平成 28 年 12 月 21 日）では、地理的な見方・考え方は、「社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連づける」とあります。

例えば、このことを本で行われた栗林先生の研究授業の内容に当てはめて考えてみると、指導案の展開 1 に、「主体的な学び」にあたる自分の意見を表現する場面が見られました。また、展開 2 には、グループ協議の場面を設定して、協働的な活動を通して「対話的な学び」が行われていました。さらに、展開 3 には、地理の手法である作図作業を通して問題の発見と解決を図る「深い学び」に結び付けていたように思います。

また、授業は、オーストラリアの自然環境の特性を活かした農牧業が、人文環境にかかわる人間生活の営みと関連づけられて展開されており、中央教育審議会の答申内容にある地理的な見方・考え方に合致した内容でした。授業を行われた栗林先生、本当にありがとうございました。

さて、地理の授業は、地理的なものの見方・考え方から社会的事象を、自然環境と人文環境の視点から考察を進める科目で、従前より、読図や作図、野外観察、あるいは統計資料の読解を通じて、その学習活動は十分な成果を上げています。

今後、私たちに求められる授業は、知識・理解を図る学習内容（コンテンツ）だけでなく、地理的なものの見方や考え方を通じて、ある地域の社会的事象を共通する地理的条件を見いださせ、他の地域にもその考え方を転用できる資質・能力（コンピテンシー）を育成することです。また、その際、考察の仕方として、社会的事象を一般性と特殊性の観点から分析して、「立地論」や「分布論」、あるいは「地域性」に結び付ける能力を育成することです。

このことは、中央審議会が求めている授業で得た知識・理解を用いて、「社会の中で活用できる力」、「何ができるようになったか」を図る授業構成であり、さらには、現代社会の課題解決を目指して、持続可能な社会を創造する人材の育成を図る教育（Education for Sustainable Development：ESD）活動であると考えます。

繰り返しとなりますが、これからの授業では、学習内容（コンテンツ）を地理的な見方・考え方を活用して資質・能力（コンピテンシー）に結び付ける指導計画を立案して、持続可能な社会の担い手を育成する地理教育を目指していただきたいと思います。

結びとなりますが、会員の皆様には、今回の大会主題である「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習指導の工夫と改善」を意識した授業を実践していただくとともに、生徒が学習で得た知識・理解を実社会で活用できる能力を育成する授業であることに留意していただき、今後、益々研鑽を積まれますことをご期待して、私からの指導・助言といたします。

研究発表

全国高等学校国語教育研究連合会 第 51 回 研究大会 秋田大会

教諭 宮 原 公

平成 30 年 11 月 16 日に秋田市を会場に全国高等学校国語教育研究連合会第 51 回研究大会秋田大会が行われた。「育成する『ことばの力』を明確にした授業の実践」を大会主題とし、16 日は秋田市内 6 校で研究授業・研究発表が行われ、17 日には秋田市文化会館で総会・講演会が行われた。今回、秋田中央高校会場において研究発表をする機会をいただき、貴重な経験をすることができた。

本研究は主に「プレゼンテーション発表」に関する研究である。生徒自身が学習を通して知識を「インプット」することに留まるだけでなく、さらに様々な形に変換させ効果的な「アウトプット」をすることに主眼を置いている。その方法として「プレゼンテーション発表」があると位置づけ、発表の形式、内容、タイミングをどう設定するべきかを探った。「プレゼンテーション発表」はあくまでも手段であり、目的ではない。生徒に付けさせたい力を明確に意識させ、教師がどのように関わるべきかという一つの提案を、今回の研究発表において伝えることができたと思う。

発表テーマ 「問題な日本語」ハンティング - 「問題」をプレゼンテーションする -

①研究のねらい

平成 26 年度「国語に関する世論調査」（文化庁）によると、「今の国語は乱れていると思う」と答えた割合は 73.2 %であった。平成 19 年の調査結果の 79.5 %と比較すると、減少傾向にある。しかし、「家庭で言葉遣いについて注意された」と答えた割合は平成 26 年度が 56.1 %、平成 19 年度が 59.7 %と減少傾向にあり、「国語が乱れている」という意識そのものが低下していると推測される。また、言葉遣いに影響を与えていると思われるものとして、インターネットとゲーム機の割合が増加しており、情報発信においては即時的で印象的な表現が求められ、正しい表現への意識が薄れていることが分かる。

本研究では、そのような背景をふまえ、「問題な日本語」（北原保雄 大修館書店）を用いて、何が「問題」なのかをテーマとして授業を行った。それを通して、正しい表現、伝えるための工夫、好ましいコミュニケーションのあり方について考察を行い、プレゼンテーション発表を行った。

②研究の概要

「問題な日本語」（北原保雄 大修館書店）に取り上げられている言葉の問題点についてグループ学習で考察を行い、発表活動を行った。無意識に誤用している言葉については「誤用＝悪」と捉えるのではなく、誤用の理由を考察することで日本語の多様性や変容性

に気づくことに留意し指導を行った。プレゼンテーションでは、三枚の画用紙を用いて三段落構成を意識させながら「書く」「話す」活動を行った。最後に、調べ学習から原稿作成、発表の一連の学習について振り返りと自己評価を行い、日本語について感じたこと、学んだことをまとめさせた。

〔学習活動〕Ⅰ～Ⅳは四人構成のグループ学習 Ⅴ個別活動

- Ⅰ 問題点を考察し、効果や言葉の変容性について考える。
- Ⅱ プレゼンテーション発表する言葉を選び、発表原稿を作成する。
- Ⅲ Ⅱを元に、提示資料として3枚の画用紙に提示内容をまとめる。
- Ⅳ 生徒による発表と発表内容について感想と評価をまとめる。
- Ⅴ 自己評価を行い、日本語の多様性や変容性について考えをまとめる。

③研究成果

(1) 表現に留意することで、より適切に伝えようとする意識が高まった。様々な場面に応じて、どのような形式や言葉を用いれば正確に伝わるのか、効果的なコミュニケーションのあり方について生徒は考えていた。発表の際には、表現だけでなく効果的な提示の順序について十分に検討していた。

(2) 日本語の多様性や変容性に気づくだけでなく、言葉の普遍性にも価値を見出すことができた。新しい言葉や誤用が氾濫する中で、生徒自身が言葉の「不易と流行」を理解するきっかけとなった。今後、言葉を使う中で、「不易」の言葉に価値を置いた表現者になることを期待したい。

(3) 画用紙三枚で発表活動を行うことで、三段落構成を意識することができた。文章読解においても段落構成を把握できるようになった。一二〇〇字程度の評論を段落分けさせたところ、授業を行った生徒の正答率が高く、段落構成を把握しながら読解するスキルが向上したと考えられる。

④今後の課題

本研究では学習の最終段階として、三段落構成を意識した発表をすることを提示した。さらに「三枚の画用紙」という制限を設けることで、思考力や表現力を高めるねらいを明確に共有することができた。今回の形式が三段落構成を理解するには適切であったが、他の構成については検討が必要である。

今後の展望としては、生徒自身が思考したものを具現化させる発表活動の充実が求められる。授業前の生徒への調査から、「問題」に気づくことができる言語感覚の資質を十分に持っていることが分かった。本研究ではその資質を正しく導くための学習活動が求められた。「問題な日本語」のプレゼンテーション発表は、社会の事象や問題を発表する活動と違い、言葉そのものを言葉で説明することになる。それにより言語感覚や言語に対する意識そのものが変化・向上したと考えられる。生徒自身が自分の考えを思い通りに言葉にして伝えることができれば、言語感覚は能力として形になると考えられる。教師側が生徒の実態や場面に応じたプレゼンテーション活動を行うことで、より充実した「問題な日本語」ハンティング活動ができると思われる。

全国高等学校国語教育研究連合会
第51回 研究大会 秋田大会
 第17分科会
 「問題な日本語」ハンティング
 -「問題」をプレゼンテーションする-



秋田県立
 横手清陵学院高等学校
 宮原 公

2018/11/16 1

本校について
 平成22年 **SSH指定**
 探究型学習による
 課題解決学習

普通科 探究
 総合技術科 課題研究

2018/11/16 2

本校生徒について

1年次 **「探究基礎」**
 研究方法の基礎
 2年次 **「探究」**
 グループ研究・発表

2018/11/16 3

本校生徒について

①中高一貫校
 →生徒間の人間関係・相互理解
 →円滑な**グループ活動**

②SSH事業(H22～) 探究(1,2年)
 →中学生が発表に参加
 →意欲的な**発表活動**

2018/11/16 4

中学校 清陵プロジェクトⅠ
 「受け取る・伝える」



2018/11/16 5

高校 清陵プロジェクトⅡ
 「探究基礎(1年)・探究(2年)」



2018/11/16 6

1 主題設定の理由

2018/11/16

7

普段の授業での課題

小論文等、文章を書けない。

→表現？ 段落構成？

↓

なぜ、書けない

↓

授業以外の日常生活の影響

2018/11/16

8

国語に関する世論調査(文化庁)

問 今の国語は乱れている
と思うか？

↓

平成19年 79.5%
平成26年 73.2% ↓6.3

2018/11/16

9

国語に関する世論調査(文化庁)

問 家庭で言葉遣いについて
注意されたか？

↓

平成19年 59.7%
平成26年 56.1% ↓3.6

2018/11/16

10

国語に関する世論調査(文化庁)

平成26年の方が

- ・国語が乱れていない
- ・家庭で言葉遣いを注意されない

【結論】

国語が年々乱れていない??

2018/11/16

11

国語に関する世論調査(文化庁)

- ・注意されないから乱れを感じない。
- ・注意する側も乱れを感じていない。

【疑問】

国語の乱れに対する気づき

2018/11/16

12

生徒の国語の乱れについて
文化庁の調査と同じ問題で調査
→文化庁の結果と同様

例 「すごい」の誤用
「なので」を文頭で使う など

2018/11/16 13

生徒の国語の乱れについて
調査を通して気づいたこと
→「話し言葉」「書き言葉」
形式を変えると違和感に気づく

例 天気が悪い。**なので**、傘を持った

※「話し言葉」だと気づかない。

2018/11/16 14

2 研究の内容

2018/11/16 15

使用テキスト

「問題な日本語」
大修館書店
北原 保雄



2018/11/16 16

使用テキスト



2018/11/16 17

授業のながれ

- ①言葉の問題点の指摘
- ↓
- ②発表原稿の作成
- ↓
- ③発表と評価

2018/11/16 18

②発表原稿の作成

○教師の関わり

- ・選択する言葉の**基準を提示**
(明確に説明できる言葉)

→誤用・**変容**の理由を
説明できる言葉を選択させる

2018/11/16 25

②発表原稿の作成

○発表活動の形式



3枚の提示資料を元に口頭説明
(テレビ番組のフリップをイメージ)

2018/11/16 26

②発表原稿の作成

○教師の関わり

- ・3枚の画用紙による
プレゼンテーション発表を提示

→3段落構成(序論・本論・結論)
を意識させる発表

2018/11/16 27

②発表原稿の作成

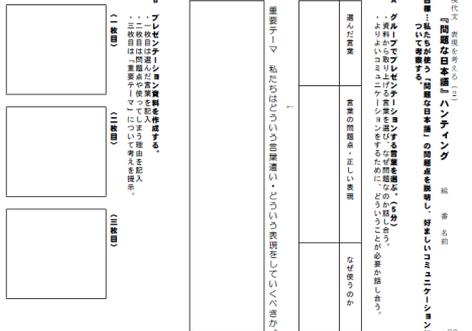
○教師の関わり

書き方の留意点

- ・短い言葉を提示
- ・**3枚目(結論)は印象的な言葉で**

2018/11/16 28

②発表原稿の作成



2018/11/16 29

②発表原稿の作成



それぞれのキーワードを画用紙に記入

2018/11/16 30

③発表と評価

- 教師の関わり
- ・提示資料について
 - 提示した言葉が文章にならない
 - 三段落構成を意識した展開
 - 資料を替えるタイミング

書き方の工夫

2018/11/16

31

③発表と評価

- 教師の関わり
- ・口頭発表の原稿について
 - 提示資料との関連
 - 三段落構成を意識した展開
 - 結論のメッセージカ

話し方の工夫

2018/11/16

32



2018/11/16

33

③発表と評価

○評価と考察

①発表に対する評価の観点

- ・伝えたいことが明確か。
- ・表現、コミュニケーションについて考えをまとめているか。

2018/11/16

34

③発表と評価

○評価と考察

②授業を通しての考察

- ・言葉に対する意識の変化
- ・日本語のあるべき姿について
 - 「残したい日本語」とは

2018/11/16

35

3 成果と課題

2018/11/16

36

○生徒感想より

- ・普段から省略した言葉を使うことがあるので、**場面に応じて**正しく相手に伝わる言葉遣いをしたい。
- ・正しさよりも分かりやすさが優先してしまうからこそ、「言葉」という道具を**正確に**使わなければならない。

2018/11/16

37

成果

- ①自己の表現に対する意識の変化
 - ・よりよい言葉でまとめたい
 - ・正確な言葉を知りたい

→表現者としての意識の向上

2018/11/16

38

○生徒感想より

- ・「**こんにちは**」にも深い意味があり、**残って欲しい**日本語である。
- ・これからも新しい言葉が生まれると思うが、そうしたものに**流されずに**正しい日本語を使いたい。

2018/11/16

39

成果

- ②変わらない言葉に価値を見出す
 - ・変容性は**特質**
 - ・普遍性は**価値**

→言葉の「不易」と「流行」の理解

2018/11/16

40

成果

- ③三段落構成を意識した文章読解
 - ・段落構成を把握するスキルの向上。

→伝えるためのスキル

2018/11/16

41

成果

- 1200字程度の評論を段落分け
- ・授業を実施したクラス
 - 正答率 43.5%**
 - ・授業を実施しないクラス
 - 正答率 34.6%**

2018/11/16

42

課題

①プレゼンテーション発表の形式
が適切であるかどうか

授業者の目標設定によっては、別の発表形式でも実践できると思われる。
3枚の画用紙という制限による効果もあったが、その制限を無くした場合の発表活動の展開も考えてきたい。

2018/11/16

43

課題

②「書く」活動の充実化

プレゼン発表の内容を、**小論文**の形式で書き直すような活動を次の段階として考えている。本実践では、言葉を言葉で説明するために、生徒は説明する順序、内容、表現を熟考し、メタ認知的な思考を繰り返し原稿をまとめた。

2018/11/16

44

課題

③3枚の画用紙プレゼンテーション
の発展

小論文と関連させて、段落構成に留意した書き方や話し方を身につけさせたい。他の教科や授業においても使うことができる**汎用性のあるスキル**になって欲しい。説明するのが苦手な生徒が苦手意識を払拭するきっかけに。

2018/11/16

45

課題

- ①プレゼンテーション発表の形式が適切であるかどうか
- ②「書く」活動の充実化
- ③**3枚の画用紙プレゼンテーションの発展**

2018/11/16

46

追加実践

3枚プレゼンの発展

教科書の教材で実践できないだろうか？

- 1年 国語総合
- 2年 国語表現
- 3年 国語表現

2018/11/16

47

現在検証中！
3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」

見出しを作成

キーワードを見つけ、どういう説明を付け加えるか検討

2018/11/16

48

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」

第一段落を前後半に分けて、
見出しを作成

前半→羅生門の説明が中心
後半→下人の現状が中心

2018/11/16 49

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」
第一段落・前半
どちらが重要なキーワードか
「羅生門」「下人」

↓

羅生門 > 下人 羅生門 < 下人

2018/11/16 50

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」

キーワードを見つけ、何が中心に
書かれているかつかむ。

↓ 羅生門第一段では

前半: 羅生門 後半: 下人

→段落分けの判断材料

2018/11/16 51

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」

キーワードにどういう
修飾語を付けるか？

↓

(?) 羅生門と下人

2018/11/16 52

3枚プレゼンの発展



2018/11/16 53

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」
「気味の悪い」→世界観の喪失
よりよい表現を模索

○荒れ果てた
△さびれた
×誰もいない

+ 羅生門

2018/11/16 54

3枚プレゼンの発展



2018/11/16

55

3枚プレゼンの発展



2018/11/16

56

3枚プレゼンの発展

①高校1年生「羅生門」

位置づけとしては

- ①段落分け
- ②キーワードを見つける
- ③見出しの作成

→段落構成・役割の理解

2018/11/16

57

3枚プレゼンの発展

- ・高校1年生で活用できる題材
- 使用教科書 第一学習社
- (評論)水の東西 ものとことば
- ネットが崩す公私の境
- 自分の身体 デザインの本意
- (小説)羅生門
- 夢十夜・・・三段落構成**

2018/11/16

58

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現

写真から物語を作る



2018/11/16

59

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現

- 課題 猫の感情を表現する。
- 条件
- ・三段落のストーリー
 - ・感情表現の言葉を使わない。(×嬉しい)
 - ・周囲の様子や行動で感情表現。

2018/11/16

60

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現

問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、

問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、

問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、

2018/11/16 61

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現

問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、

問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、
 問題 猫の感情と物語の背景を、

猫の感情と物語の背景

導入→1枚目

展開→2枚目

結末→3枚目

2018/11/16 62

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現



2018/11/16 63

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現



2018/11/16 64

3枚プレゼンの発展

②高校2年生 国語表現



2018/11/16 65

3枚プレゼンの発展

1年 段落構成の理解、
 キーワード、見出し

↓

他者の理解
 短編の評論や小説で、作者の
 意図に沿った文章読解

2018/11/16 66

3枚プレゼンの発展

2年 伝えたいことを**キーワード**に
集約させ、他者に伝える

↓

キーワード提示 + 口頭説明

1枚目 序論 導入	}	物語を作る = 自分の 考え
2枚目 本論 展開		
3枚目 結論 結末		

2018/11/16 67

3枚プレゼンの発展

3年 **他者の考え**を理解し、
自分の考えを発信する。

↓

1枚目 他者の意見 の要約	}	他者の理解 (1年)
2枚目 問題点 賛成・反対		
3枚目 解決策	}	自分の考え (2年)

2018/11/16 68

3枚プレゼンの発展

3年 他者の意見をふまえ、**自分の考え**を発信する。

↓

1枚目 他者の意見の要約	}	自分の 考え
2枚目 問題点、賛成・反対		
3枚目 解決策		

生徒の取り巻く環境 ↓ 興味・関心 進路 ニュース 生活環境 等

**伝えるための表現の工夫
(小論文とのつながり)**

2018/11/16 69

3枚プレゼンの発展

1年 **他者の意見**を理解

↓

2年 **自分の考え**を発信

↓

3年 **他者の意見をふまえ**
自分の考えを発信

2018/11/16 70

謝辞

今回の研究発表におきまして、
ご指導・ご助言いただきました
秋田高校教頭 熊谷禎子先生
ならびに
秋田県教育研究会国語部会
大修館書店
関係各位に感謝申し上げます。

2018/11/16 71

本研究のポイント

目標: 多様なコミュニケーション能力の育成

工夫した点

- ①「問題な日本語」の**テキスト化**
- ②「誤用=悪」ではない という**視点の提示**
- ③**段階的に思考を深めていく過程**を重視
- ④よりよい表現を模索する姿勢
- ⑤**言語文化**に対する関心を深めさせた
- ⑥**3枚**の画用紙によるプレゼンテーション

2018/11/16 72

平成 30 年度秋田県高等学校教育研究会進路指導部会秋季研究発表大会 進学分科会

<研究発表①>

「横手清陵学院の進路指導」 秋田県立横手清陵学院高等学校 教諭 細谷 進

1 横手清陵学院について

平成 16 年に日本で初めての工業高校を母体とする中高一貫校として開学し 15 年目となる。22 年に文科省の SSH の指定を受け、27 年度まで行い、29 年度に探究活動等実践モデル校となり今年度 2 年目になる。16 年度は普通科 2 クラス、総合技術科 3 クラスでスタートし、18 年度に普通科 3、総合技術科 2 となり、今年度学級減により普通科 2 となり、1 学年 4 クラスになった。

中高一貫校で、清陵中出身者が全体の約 40%である。高校に進学時に普通科と総合技術科を選べるので清陵中出身者が普通科・総合技術科の両方に在籍する。普通科は 1 年生が全員共通、2 年次にサイエンスコース（理系）と国際人文コース（文系）に分かれる。総合技術科は 2 年次にシステム工学類型、情報工学類型、環境工学類型のいずれかを選択する。基本的に普通科は進学を、総合技術科は就職を目指す生徒が多い。例年普通科では約 8 割が進学を希望、総合技術科では約 7 割が就職を希望している。

2 本校のキャリア教育

キャリア教育の全体計画概念図を職員室に貼り 6 年間の計画でキャリア教育を行っている。学校設定科目「探究」が 2 年生であり、主体性・探求力・人間力の育成による高い志の実現を目指し週 2 時間の探究活動を行う。探究内容は、自分のキャリアパスを意識したテーマ設定を行うように指導をしている。特に大学進学希望の生徒については、受験に活用できるテーマ設定を意識するように指導している。

普通科 1 年生に「探究基礎」があり、資料の調べ方やアンケート調査について指導する。この発表の内容は、本校の博士号教員瀬々先生がまとめた「探求の軌跡—10 年間の実績から知見と展望—」という資料を抜粋している。平成 26 年に出された資料であるが、ほとんどこのまま行っている。2 年生では「探究」となり、生徒が自由にテーマを設定して探究活動をする、とは言っても本当に自由テーマ設定をおこなうと大変な思いをするのでテーマ設定に縛りを掛けている状況である。京都の堀川高校のやり方を参考にしている。

1 年間の流れは資料のような流れである。今は発表会が終わって、最後の「深化」とあるが論文作成の時期になる。探究の変遷としては平成 20 年度から本格導入し、20~22 年度までは総合的な学習の時間で教科ごとにいろいろなことをやらせようという雰囲気で行っていた。22 年度から SSH が入り、個人研究で一人一人にテーマ設定させて研究することでスタートしたが 23 年度にグループ研究に変更した。グループ研究にしたのは、生徒の希望テーマのままでは探究が困難であると判断されたとき指導によって自分の意にそぐわないテーマになった場合、意欲が減退するということがあり、グループ研究にすることで協同させることにした。そうすると担当の教員の負担も減り生徒方の満足度も上がっていく結果が得られた。初めは週 1 時間であったが、今は週 2 時間である。22 年度の個人研究の時のテーマは「タイムマシンは作れるのか」といった探究しにくいテーマが並ぶ状況であった。生徒たちは真面目なのだが、教師側は週 1 時間の 1 年間でどこまで掘り下げられるのかということもあり、これだと難しいということから 23 年度からグループ研究になる。グループ研究でのテーマは探究し甲斐のある、深められそうな内容になってきた。今年度のテーマは「野菜の抗菌効果の研究」「摘果リンゴの有効活用を探る」などがあるが、「摘果リンゴ・・・」の方は 1 年生の時にやっていたグループが 2 年生でも継続してやりたいということで探究活動をしている。

探究活動の年間指導計画は、オリエンテーションから始まり、中間報告、発表会ガイダンス、探究発表会となる。発表会はポスター発表と口頭発表を 1 日掛けて 11 月の中旬に行う。文系はこれで終わるが、理系はこの後論文を作成し冊子にし、図書館にも収めるという流れになる。他にサイエンスラボがあるが、英語を話す研究者を学校に招き、英語で講義してもらい生徒に質疑応答させるという企画である。探究発表会では 2 年生が 1 日準備と発表を行い、午後の発表には高 1 の普通科と中 3 生も参加させ、質問をさせる。このときに付箋を持たせ、質問や意見を書かせて貼らせ、それを後でまとめるという作業もやらせる。写真のように生徒が車座になって話しを聞き、意見質問があったら付箋に書いて貼り、それを集めて振り返りにまとめさせ、それにより追加の実験をやったり、論文に反映させたりする。

次に総合技術科について紹介する。総合技術科はほとんどが就職なので、キャリア教育については就職に根差したものが多い。2年生で先輩講話があり、卒業生が学校で在校生に話をし、仕事や職場について語るというイベントになっている。2月に「横手のスゴイ企業発見!!」があり、普通科も2年生全員が参加する。就職・進学におけるミスマッチを減らしたいという意図で行われている。

3 本校の進路状況

昨年度12期生となる。進学は57.2%、就職率は39%で進学率は普通科が約8割、総合技術科は約3割で例年このような状況である。普通科の就職率が10%を超えた年となった。国公立大進学者についてであるが、中高一貫校であるので、清陵中出身者がどのくらいいるのか表にしてみた。清陵中生は高校4期から入ることになるが、清陵中出身者の割合は増加傾向にある。

大学別の進学状況は秋田大学、東北大学、国際教養大学と比較すると秋田大学は毎年進学者を出しており、清陵中出身者の割合が高い。東北大学は4期の1名を除いてすべて理系である。東北大学、国際教養大学についてはほとんどが清陵中出身者である。SSHの指定は5期から10期であるが、東北大学進学者が複数出た時と重なる。進学率が高いとき、国公立大進学率も高かった。ベネッセの模試の結果からも見てみると1年生の進研模試の結果とほぼ符合するようにデータが動いていて、平均値では4から3ポイント下がったところで移動しているということがわかる。

4 進路指導の取り組み

まずスクール手帳を紹介する。キャリア教育の一環として持たせていて高校生全員に配付している。集会時に持参させメモを取らせたりする。年間行事予定が印刷されているので保護者からもほしいという要望がある。これによって生徒は中・長期の予定が立て易いという特徴を持たせている。学習時間の記載が可能となっている。インターンシップは原則として夏季休業中に行い、その他各種セミナー、補習等、また「横手のスゴイ企業発見!!」ガイダンスに参加している。これは就職だけでなく、進学後のキャリアプランを考える上での就職先等を知ることになるので、2年生全員に参加させ、就職に関する意識を高めさせる。その他オープンキャンパスへの参加がある。

5 課題について

入学してくる生徒が変化してきているという実感がある。進路に関しても普通科で就職を希望する生徒が増えてきたこともあり、今までにない進路を希望する生徒が増えてくることが予想されている。こういったことにどのように対応していくかが今後の課題であると考えている。

学校組織マネジメント研修講座

総合技術科 教諭 鎌田 正樹

1. はじめに

本研修は、学校組織マネジメントに関する内容や学校運営上の課題解決に向けての方策等について、主体的・対話的に研修を深め、教育実践の中核を担う教員として資質向上を図るものである。

2. 学校組織マネジメント研修について

I 期	○本県の教育課題とミドルリーダーへの期待（講話） ○学校組織マネジメントとミドルリーダーの果たす役割（講義・演習） ○学校におけるリスクマネジメント（講義・協議）
II 期	○チームで進めるインクルーシブ教育（講義・協議・演習）
	○内外環境の把握による学校の特色づくりと課題解決策（講義・演習）
	○学校の課題解決に向けた組織的な取組①（協議・演習）
	○学校の課題解決に向けた組織的な取組②（協議・演習）
	○学校の課題解決に向けた組織的な取組③（発表・協議）

【対象】小学校、中学校、高等学校、特別支援学校教諭（教職10年経験者研修、中堅教諭等資質向上研修受講者で教務主任未経験者）32名

3. 学校組織マネジメント研修について

【I期】

○本県の教育課題とミドルリーダーへの期待（秋田総合教育センター 主幹 嵯峨 康宏）

本県の教育課題として、「我が国の状況と子供たちの未来」、「児童生徒数の状況」、「教員の年齢構成」、「学力の状況と進学・就職状況」の4つの観点から現状や課題等を含め説明があった。グローバル化が進み、変わりゆく職業事情の中で身につけさせたい力をどのようにして伸ばしていくのかを考えなければならない。少子化、教員の年齢構成の問題、若手教員の受験倍率に伴う質の低下等も課題である。このような状況の中、他者と関わり主体的に問題を解決していく生徒を育てるためには、県や国の動向を把握し、学習指導要領改訂の視点を考えてカリキュラムマネジメントを確立して行かなければならないと感じた。

○学校組織マネジメントとミドルリーダーの果たす役割（秋田総合教育センター 八木澤 徹）

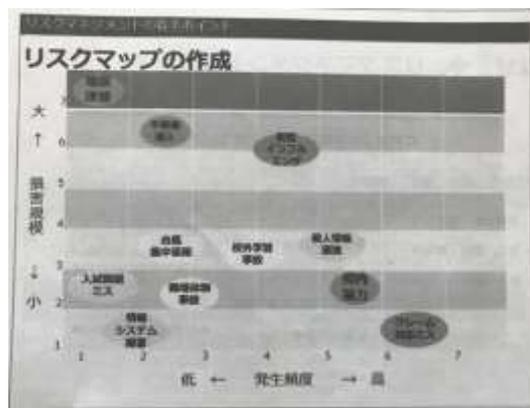
学校組織マネジメントの必要性と背景、着手ポイント、学校組織とミドルリーダーの役割の3つ観点を学び、演習を行った。

本校でも個業型組織形態が多いのが現状である。共通目的のもと、組織を協働していくことの重要性を学んだ。演習では、自校と他校の教育目標を対象、方法、内容の分野で比較、検討を行った。特色ある学校づくりの方向性を考える機会となった。

○学校におけるリスクマネジメント（秋田総合教育センター 八木澤 徹）

リスクマネジメントとは何か、学校に求められるリスクマネジメント、リスクマネジメントの着手ポイントについて講義、演習を行った。

学校におけるリスクの洗い出しを行った。危機管理についての研修は本校でも行っているが、各学校事情で様々なリスクがあることを認識した。業務的リスクマネジメント、クライシスマネジメント、組織的リスクマネジメントについても学ぶなかで、リスクの変容、複雑・多様化にともない、これまでの事故防止活動だけでは不十分であると思った。事故・トラブルや危機の未然防止活動のリスクマップを作成し、演習を行った。



リスクマップ

また、班ごとに異なる演習問題に取り組み、リスクマネジメントについて考え発表した。

<演習問題・高等学校> ケース3

ある夜、高等学校の野球部の部長を務めている J 教諭に、野球部の保護者から「うちの子供を含む数名の野球部員が、監督から全裸に近い状態でのランニングを強要されて悩んでいる。うちの子どもは自分たちが悪いので体罰ではないと言っているが、裸になるのは嫌なようだ。どうすればよいか。」という電話があった。監督は普段はおとなしい性格であるのにわかに信じられなかったが、野球に関しては熱血的で、時々大きな声で部員を叱責していたことも思い出された。

【手順1】 J 教諭はこの後どのような対応をするべきか。

【手順2】 学校としてこの後どのような対応をするべきか。

【手順3】 このような事件を未然に防ぐために学校としてどのような対策を立てるべきか。

以上の課題について話し合い、検討した。

【Ⅱ期】

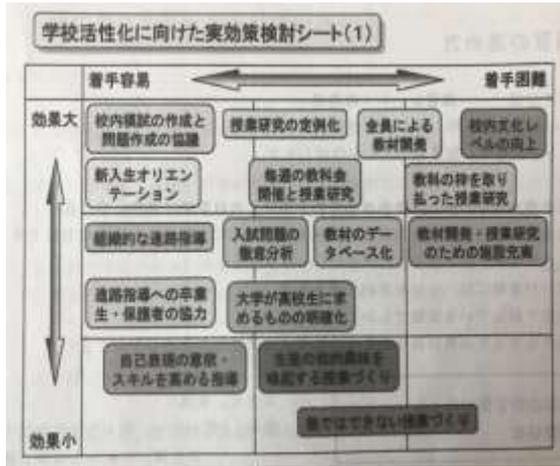
○チームで進めるインクルーシブ教育（秋田総合教育センター 村松 勝信）

インクルーシブ教育の動向、インクルーシブ教育の実際、チームによる対応の充実の3つの観点から現状や課題等を含め説明があった。

発達障害の可能性のある通常の学級の生徒の割合が6.5%というなかで、特別支援への理解、活動が大切となっている。本校も中高一貫教育校ということで、支援が必要な生徒が中学校から入学している。生徒への対応で重要なのが、入学前からの組織的な対応である。これが遅れると、学校生生活に不安を感じ、不登校につながるケースもある。学校内だけでなく、外部の関係組織とも連携し対応していきたい。

○内外環境の把握による学校の特色づくりと課題解決策（秋田総合教育センター 八木澤 徹）

ここでは、学校を取り巻く環境を内部環境（強みと弱み）と外部環境（機会と脅威）に分類して SWOT 分析を行い把握、分析を行った。SWOT 分析を行い、内容の書き出しを行うことで、新たな課題も出てきた。クロス分析をすることでより具体化され、実効策の計画化をすることができた。機会があったら職員全体で行ってみたいと感じた。



※SWOTにおけるクロス分析

- ①【外部+】×【内部+】
特色づくり
- ②【外部+】×【内部-】
外部の支援的要因で、内部の弱みを克服する
- ③【内部+】×【外部-】
内部の強みを生かし、積極的に外部の阻害的
要因の克服を試みる
- ④【内部-】×【外部-】
外部の阻害的要因と内部の弱みが結びつかない
ようにする
外部の阻害的要因や内部の弱みを読み替えて
②や③をする

○学校の課題解決に向けた組織的な取組①（秋田総合教育センター 八木澤 徹）

□協議にあたって

- ・班ごとに所定の位置に移動する。

□協議 1

- ・班内で自己紹介を行い、自校における教育課題や、それに応じた解決策の具体について説明する。説明に対し、質疑応答、情報交換をする。

□協議 2

- ・協議題を設定し、架空の学校（班ごとに指定される）の内外環境の客観的特徴や事実を洗い出し、それぞれ「プラスとしてはたらく場合」と「マイナスにはたらく場合」に分ける。「改善策の重点化シート」、「解決策についての分担・スケジュール化・評価シート」をまとめる。

協議・演習を通して、学校組織の一員としてどのように学校運営に参画するか、ミドルリーダーとして上司と話し、同僚の先生方と協働して計画・実行していく手段を考える良い機会となった。班に分かれ、自校の課題について話し合うことができ、地域や現場において課題も変わってくることを認識した。架空の学校について協議をまとめ、課題解決を考えた。

○学校の課題解決に向けた組織的な取組②

□協議 3

- ・解決策策定のための活動計画に沿って、班で協議を進め、個人で考えをまとめる。

□協議 4

- ・協議のまとめを行い、発表資料を完成させる。

架空の学校について SWOT 分析を行い現状の実態と良い点の確認を行った。色々な意見を参考に教員目標を設定することができた。ビジョンを共有すること、システムの構築、プロセス行動を意識しながら、1年目から3年目について計画を立てた。PDCAのサイクルをまわし、学校全体で同じベクトルで動くことの重要性を学びミドルリーダーの役割を確認することができた。

○学校の課題解決に向けた組織的な取組③

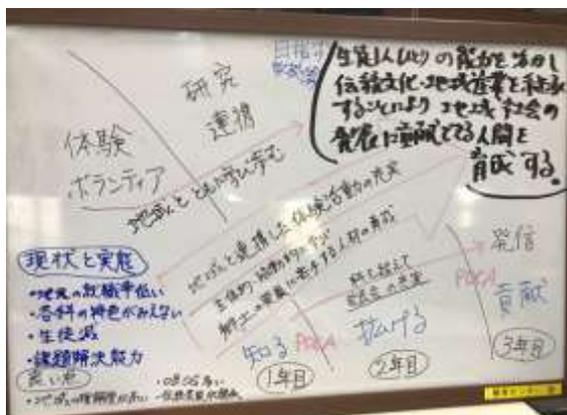
□発表・質疑応答

- ・一班につき発表は10分間。

□指導助言

- ・指導助言者が協議に適宜参加し指導助言を行う。また、総括的な指導助言を行う。

各グループ共に、取り上げる学校は違っているが、生徒をどのように育てていくかという点で共通理解を深めることができた。小中高では課題がそれぞれ違い、新しい視点から考えることができた。同班の課題は、普通科、生活科、工業科と異なる科が集まり学校を運営していくというものだった。科は違うが学校を地域と協力し合い同じレベルで進んでいくための手段を学ぶ機会になった。



3年間を見据えた戦略マップの作成

学年	時期	取組	成果
初等	9月	生徒会 旗注 秋の文化祭 合唱	旗注の発表会 進捗 地域文化を学ぶ -ボランティアの協力
初等	10月 11月	2年組 合唱 授業	2年組発表会 [2年組文化祭の同時] (3日)
初等	7月 1月	進捗 2年組 合唱 合唱	心算シブアホの 発表会 発表 合唱 発表
初等	7月 8月	2年組 合唱 合唱	合唱発表会 発表 発表
初等	2月	合唱 合唱	合唱発表会 発表

教育目標の設定と目標達成に向けた具体的な取組

4. おわりに

本研修で、これからの学校教育を考える良い機会となった。学校組織マネジメントの重要性や学校と地域の連携・協働の在り方、チームとしての学校の在り方を考えながら、ミドルリーダーとしての役割を認識し学校経営に積極的に参画していきたい。

平成30年度教員派遣スキルアップ研修実施報告書

学校番号	41	学校名	横手清陵学院高等学校
記載者職氏名	教諭 小松直鎮		

研修講座名・訪問校名・研修先住所等	研修日時
電気自動車・燃料電池車 ・ソーラーカー製作講習会 東海大学高輪キャンパス2号館大講義室 (〒108-8619 東京都港区高輪2-3-23)	平成31年2月23日 8:50～17:40 計1日間、8時間
講師・担当者名	研修者氏名(教科名・校務分掌)
池上敦哉 (Zero to Darwin Project) 靱井基之・鮎澤正太郎 (Zero to Darwin Project) 濱根洋人 (工学院大学) 柳原健也 (小野塚精機株式会社) 田村俊介 (株式会社ジーエイチクラフト) 佐川耕平・木村英樹 (東海大学)	小松 直鎮 (総合技術科・メカトロ部)
計8名	計1名
研修のねらい	<ol style="list-style-type: none"> 1 エコカー製作の最新技術を学び、課題研究や課外活動の始動に役立てる。 2 全国初の工業系中高一貫校というメリットを生かすために、中学校から将来の技術者を育てるためのテーマにできないか検討する。 3 本校も参加しているWEMの車体や電子回路に新技術を取り入れる。
研修内容・状況等	<p>講習プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「講習会開催にあたって」池田祐一 ・「ソーラーカー・エコノムーヴ基礎講座」池上敦哉 ・「2018WEM GP参戦の振り返り」靱井基之・鮎澤正太郎 ・「工学院大学ソーラーチームによるエネマネ基礎講座」濱根洋人 ・「EVミニカート (ワールドエコノムーブライト) のすゝめ」柳原健也 ・「コンポジット設計の勘所」田村俊介 ・「ソーラーカーの電気システムの考え方」佐川耕平・木村英樹
成果と課題	<p>この講習会は、大学生を中心にかなりの人数が集まっていた。一般の方も多く、毎年行っている仲間同士の情報交換の場にもなっているように感じた。電気自動車レースの日本トップレベルの方々の講演で、どの方もかなり具体的な事例を提示してくれたため日本の競技レベルが上がったと思った。中には、NHKの「超絶 凄技！」で放送されていた方々も何人もいて、番組を改めて思い出した。また、講習会参加者に発刊されるテキストにも各チームの技術が詰まっております。もう一度読み返し、自分の知識にしていきたい。</p> <p>電気自動車は、本校も力を入れている競技である。今回得た知識を本校のマシンに還元し、更に良い車体を作りたいと思う。</p>

4 外務省高校講座の記録

佐々木信吾

外務省高校講座について

平成30年11月8日（木）、外務省国際協力局政策課主査、大日方牧人（おおひかたまきと）氏をお招きして、外務省高校講座を実施しました。「高校講座」という名称ですが、中高一貫教育校の特徴を活かし、中学生を含めた全生徒、全職員参加の下で行われました。また、講座後には、国際協力に興味があり、将来国際系の大学への進学を考えている高校生11名が参加しての座談会も行われました。

①外務省の説明

②日本が行っている国際協力

③講師の経験から（英語学習、コミュニケーションについて）

という内容での講座でしたが、生徒からは

・教育や医療を受けられなかったり、食べ物や安全な水を飲むことができなかったりなどという人が、この世界にたくさんいることを知り、ボランティア活動など、自分にできることがあるのではないかと思います。10人に1人の割合で良い生活ができない人がいるから、それを改善するためにも私たちの「力」が必要なのだということが分かりました。

・なぜ日本が国際協力をするのかという話で、戦後や東日本大震災のとき世界が支援してくれていたことを知り、私は国際協力についてもっと知りたいと思ったし、どんなことができるか学び、実行したいと思いました。

・英語について、「英語の勉強は下っていくエスカレーターを上っていくようなもの。毎日の積み重ねが大事。やらないとどんどん下がっていく。」と話していました。やはり英語という物は難しく毎日の勉強が大事なんだなと思いました。

・私も講師のように、小学校の時から、何か人や世界に貢献できるような人になりたいと考えていました。今の英語力では世界に行くことが難しいので、前を見て、後悔のないよう勉強を積み重ねていきたいと思いました。

・私は、この先海外へ行くことがあれば、その国と日本の関係について調べたり、今回の講座の内容を思い出したりして、実のある体験をしたいと思いました。

・今回の講演の中で、国際協力に対する意識が変わった気がする。今までは、ニュースや新聞などで国際的な問題を目にしても興味を持たなかったけど、貧困で苦しんでいる人たちの状況を見て、自分も何か協力することができないのだろうかという気持ちが芽生えました。

・世界をさらに知るには、文化や政治、経済、風土など、日本とはまったく異なったことを学び、理解することがとても重要なので、毎日のニュースや新聞を見る習慣をこれからも続けていきたい。

・普段、外務省が行っていることについて知ることができました。外国には多くの問題があり、日々それを解決するために尽力している方が多くいると知ることができて、私もそのような所に目を向け、グローバルな視野を持ちたいと思います。

・外務省の仕組みは詳しく知らなかったのですが、どのような仕組みで政策が海外の大使館などに伝えられたり、実行されたりしているのかを知ることができて良かったです。

などの好意的な感想が多く、大いに意義のある講座となりました。

高校講座

平成30年11月

 **外務省**
国際協力局 政策課
おおひかた まきと
大日方 牧人

自己紹介

おおひかた
氏名：大日方 牧人
所属：外務省国際協力局政策課
出身：茨城県
経歴：大学卒業（建築学科）
 →民間企業に就職（インテリアデザイナー）
 →アメリカの大学院に留学（都市環境政策学）
 →インドのユニセフでインターン・コンサルタント
 →外務省に入省（国際協力局）
 開発協力企画室⇒緊急・人道支援課⇒政策課



今日の講義の内容

1. 外務省の紹介
2. ODA（政府開発援助）の概要説明
3. 日本が行ってきた支援の紹介（開発協力・人道支援）

講義の間、考えていてほしいこと

- ①自分の生活と世界との繋がり
- ②なぜ日本は国際協力をしているのか
- ③自分にできることはあるだろうか

1. 外務省の紹介

外務省とは

外務省は日本国内にある「本省」と、外国にある「在外公館」から構成されています。

外務省本省@日本

本省所在地：東京都・霞が関（約2,550人）

日本と世界の平和と安全と繁栄のための外交政策を企画・立案、在外公館に具体的な外交活動の指示を行っています。



在外公館@海外

在外公館は、外交政策を実施する海外拠点（約3,450名）

在外公館（269名）は大使館（195）・領事館（64）・政府代表部（10）から構成されています。
領事館の専ら員数


大使館


政府代表部


総領事館

日本外交 5つの取組

日本と国際社会の平和と安定の確保

開発協力
 -世界の様々な課題の解決への取組-

日本経済の成長と繁栄の追求

日本についての理解の促進

「国民と共にある外交」の推進

2. 政府開発援助 (ODA)

概要



国際協力って何？

From the People of Japan

「開発途上国」と呼ばれるのは世界に146か国・地域あり、多く問題を抱えています。そんな世界の問題を解決する取組が「国際協力」です。

HELP

「教育」を受けることができない人
 十分な「食料」や安全な「水」を得られない人
 病気になっても「医療」サービスを受けられない人
 「紛争」に巻き込まれて家族を失う人
 他にもたくさんの問題を抱える人でいっぱいです。

教育 食料・水 紛争 医療

様々な開発途上国の問題

From the People of Japan

Q1	一日1.90ドル(約200円) [※] 以下で生活する人の数は？ ① 7億人 ② 3億人 ③ 1億人
Q2	学校に通えない子供は何人いる？ ① 130万人 ② 1,700万人 ③ 5,800万人
Q3	安全な水が得られない人の数は？ ① 1,500万人 ② 2億5,000万人 ③ 7億5,000万人

※世界銀行の「国際貧困ライン」(2015年10月以降)

オーディーエー 政府開発援助 (ODA) とは？

From the People of Japan

Official (政府)
 ~政府ないし政府の実施機関によって供与される援助

Development (開発)
 ~ 開発途上国の経済開発や福祉の向上に役立つことを主目的

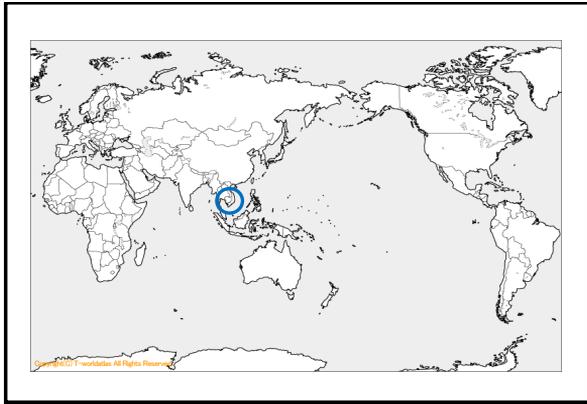
Assistance (援助)
 ~資金協力の場合、金利や返済期限といった供与条件が緩やか

日本が行っている支援の種類と特徴

From the People of Japan

1	お金を貸す 【円借款】 発電所の建設や、下水道の整備などといったお金のかかる事業について、開発途上国が必要だと思うことがあれば、とても低い利率でお金を貸します。貸したお金は長い時間をかけて少しずつ返してもらいます。返さなければいけないお金なので、開発途上国はムダなく使うようになり、自立していくことにも役立ちます。
2	資金を提供する 【無償資金協力】 特に貧しい開発途上国に対しては、学校や病院を建てたりする時に、そのためのお金を出して助けてあげます。
3	技術を教える 【技術協力】 開発途上国では、人々の知識や技術が十分でないために、産業、農業、教育等が発達しません。そこで日本の技術を教えてその国の自立と発展を助けます。
特徴	・その場しのぎではなく、長い目で支援(持続的な経済成長) ・開発途上国の自助努力の後押し ・人間の安全保障(弱い立場の人々、一人ひとりの保護と能力強化)

3. 日本が行ってきた支援 (開発協力・人道支援)



メコンを渡る橋、地域の経済をつなぐ

～メコン流域での成長のボトルネック～

- フェリーでしか渡れなかったメコン川
- 雨期でも30分待ち、繁忙期には7時間待ちだった
- 1日あたり約5,000台のみの交通量

インフラ開発

- 主橋梁664m
- 取付橋1,575m
- 取付道路3,245m
- の建設を支援

橋の完成以前はフェリー以外に川を渡る手段がなかった

ASEAN経済発展/インド太平洋戦略

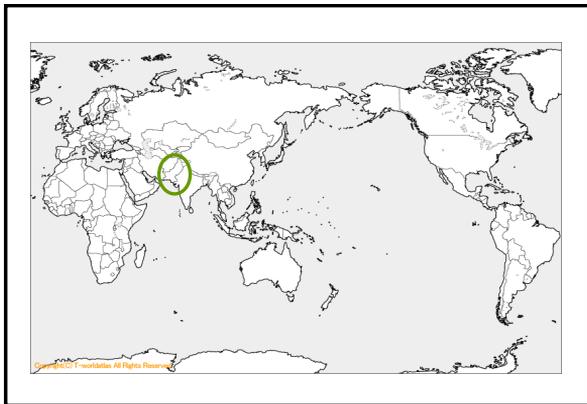
橋の建設で、いつでも川を渡れるように

- 地域経済の発展に！ASEAN諸国も注目
- 川を渡る時間が15分に短縮
- 交通量は1日あたり約12,000台に倍増
- 「きずな橋」はASEAN近隣諸国と連絡するものになっている
- 2021年、ASEAN議長国に選出

カンボジアにおける日本の存在感

2011年に日本の支援で建設した「きずな橋」と共に、**現地の紙幣に！**

2015年、フン・セン首相が、紙幣を手に、「1つは感謝」を告げる。同時に、紙幣発行を決定。



誰でも勉強できる世界を目指して

～パキスタンにおける女子教育支援～

- パキスタンの農村部では女子が進める学校が少なく、社会習慣を併せて**女子生徒の就学が困難**
- パキスタン全土での識字率：男性70% 女性49%
- シンド州の前期中等教育就学率：男女あわせて34% 女子17%（農村部の女子は6%）

無償資金協力

- シンド州の農村部に住む女子たちが通える学校の建設・建設
- 南部：計28校の前期中等学校新設、初等学校建替
- 北部：計25校の女子初等学校拡張・建て替え

ベランダを利用した授業

複式学級による授業

老朽化した教室

無償資金協力によって増築された校舎

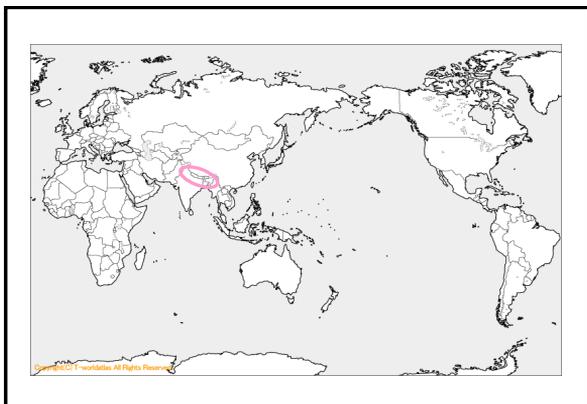
新校舎で学ぶ中学1年生たち

- 校舎建設・建て替えによって女子生徒が学べる場所を提供
- 全4校舎が完成すれば、南部と北部で毎年約6,000人が新たに前期中等教育を受けられる機会を得る

完成後の小中学校にてJICAの調査印を渡す（JICAパキスタン事務所提供）

伊勢志摩サミット

G7伊勢志摩サミットの首脳宣言で、質の高い教育や訓練を通じて女性の能力開発を支援する旨を表明。



ネパールにおける大地震

- 発生状況**
 - 本震 日時：2015年4月25日11時56分（現地時間、日本時間15時11分）
 - 震源地：首都カトマンズより北西約60キロ（マグニチュード：7.8）
 - 余震 日時：2015年5月12日12時50分（現地時間、日本時間16時05分）
 - 震源地：首都カトマンズより東北東約76キロ（マグニチュード：7.3）
- 被害状況**
 - 死者：8,969名（2017年4月20日時点、ネパール政府情報）
 - 負傷者：22,302名（同上）
 - 全壊家屋：775,793棟（同上）
 - 一部損壊家屋：302,806棟（同上）

被災状況

首都カトマンズを含む31の郡で死者が出るなど甚大な被害。周辺国でも死者が発生。被災各所では**建造物が倒壊し、道路も寸断**。市民生活は大きな影響を受けた。さらに、雨期の影響により地滑りや道路封鎖、橋の流出等が発生し、山間部を始め地震被害の大きい地域では、**食糧やシェルターなど緊急人道支援物資が不足**した。復興プロセスは様々な事情から遅れ、2016年夏頃から漸く進展が見られてはいるものの、現在でも多くの人が仮設住居等での生活を余儀なくされている。
- 邦人被害状況**
 - 死亡1名（50代男性）、負傷1名（50代女性）。その他重大な被害はなし。

ネパールにおける大地震

★ 緊急人道支援（資金的貢献/物的支援）

- 1,400万米ドル（約16.8億円）の緊急無償資金協力
国際機関（WFP（食料、人員・物資輸送）、UNICEF（水・衛生）、IFRC（シェルター、医療）、IOM（避難民キャンプ運営）、UNFPA（保健）、UNDP（がれき処理等）、UN HABITAT（自主避難民の避難所支援）、OCHA（人道支援に係る総合調整）を通じた支援。
- 100万米ドル（約1億2,000万円）の緊急無償資金協力
WFPを通じた遠隔地に居住する被災者への物資輸送支援。
- 緊急援助物資（テント、毛布）の供与
日本のNGOを通じた支援





緊急援助物資の引渡式（5月4日）ネパール・カトマンズ
UNDP（国連開発計画）を通じたがれき処理（写真提供：UNDP）
WFP（国連世界食糧計画）を通じた食料支援（写真提供：WFP）

ネパールにおける大地震

★ 緊急人道支援（人的支援：国際緊急援助隊派遣）

- 救助チーム（計70名）
外務省、警察庁、海上保安庁、JICA業務調整員で構成。
救助チームによる捜索救助活動の様子（写真提供：JICA（国際協力機構））
- 医療チーム（計80名）
第一次隊46名及び第二次隊34名を派遣。 診療者数：延べ約980人
外務省、医師、看護師、薬剤師、医療調整員、JICA業務調整員で構成。
医療チームによる診療・手術の様子
- 自衛隊部隊（医療援助隊：計114名）
医療援助隊が使用する資機材・物資輸送に關与した空輸隊は、待機を含めて約160名。
診療者数：延べ約2,900人
自衛隊部隊による医療援助活動の様子（写真提供：防衛省）

ネパールにおける大地震

★ 緊急人道支援から復旧・復興支援へ
「より良い復興（Build Back Better: BBB）」のコンセプトを反映した、住宅、学校、公共インフラの再建を中心とした復旧・復興に向けた支援を表明し、復興プロジェクトを実施中（総額約2.6億米ドル（約320億円超））。

★ 文化財復興支援
「JICAネパール国文化遺産復興調査団派遣」、「文化遺産保護国際貢献事業」（6,200万円）、「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金を通じた支援」（約1,670万円）、「早の根文化無償資金協力」（約960万円）、「JICA文化遺産アドバイザー派遣」等を通じた文化財の保護・修復・再建のための支援を実施中。




被災した住宅（ネパール・カトマンズ、コンカポ地域）
日本が復興に向けた支援を実施しているカトマンズのグローバルビルディングのアーセン学校
災害に強い住宅再建に向けたトレーニングをしている様子



ソマリアにおける干ばつ被害（2016年）
©UNICEF Somalia/2016/Sebastian Rich



爆撃の危険に晒されながら、洞窟の中に作られた教室で学ぶ国内避難民の子どもたち（シリア、2016年3月）
©UNICEF/UN037962/Ashawi

世界における人道危機の拡大

▶ 難民・国内避難民の数が第二次世界大戦後最大
▶ 避難を余儀なくされている人は約6,850万人（2017年末時点）。（難民（約2,540万人）、申請者（約310万人）、国内避難民（約4,000万人））
▶ 人道危機の長期化と深刻化
▶ 中東・アフリカ地域における、テロ組織など非国家主体に起因する紛争の多発が大きな要因。

▶ 避難を余儀なくされている人の推移（2017年12月時点）

年	国内避難民	難民	申請者	合計
2008	42.0	43.2	41.7	126.9
2009	43.2	41.7	45.1	130.0
2010	45.1	51.2	59.5	155.8
2011	51.2	65.3	65.6	182.1
2012	59.5	65.3	68.5	193.3
2013	65.3	68.5	68.5	202.3
2014	68.5	68.5	68.5	205.5
2015	68.5	68.5	68.5	205.5
2016	68.5	68.5	68.5	205.5
2017	68.5	68.5	68.5	205.5

主な難民発生国の難民数（2017年12月時点）

- シリア 約593万人
- アフガニスタン 約260万人
- イラク 約65万人
- スーダン 約49万人
- エリトリア 約48万人
- ミャンマー 約12万人
- ソマリア 約98万人
- 中央アフリカ 約45万人
- コンゴ（剛） 約62万人
- パレスチナ 約543万人

難民とは？



難民とは
紛争に巻き込まれたり、宗教や人種、政治的意見といった様々な理由で迫害を受けるなど、生命の安全を脅かされ、**他国に逃れなければならなかった人々**のことを「難民」といいます。

国内避難民とは
「国内避難民」とは**国境を越えていない**ことから、国際条約で難民として保護されない人々のことです。

庇護申請者とは
「庇護申請者」は、自身の故郷から逃れて、**他の国の避難所にたどり着き**、その国で庇護申請をおこなう人々のことをいいます。

難民とは？



レバノンでは人口の**6人に1人**が難民



難民のうち18歳未満の**子どもの割合は52%**

難民支援の例

【難民の生体認証登録】



【食料配付】



【水・衛生】



【職業訓練】



【教育】



【緊急シェルター】



写真: UNHCR/WFP

人道支援の現場で活用される日本の技術など

【照明機器】
国際移住機関 (IOM) はパナソニック製ソーラーランタンをソマリアなどの国内避難民居住地で配布。性的暴力防止・所得創出に貢献。





【メガネ】
富士メガネはイラク・アゼルバイジャン等で難民・国内避難民の視力を測定し、メガネを供与。視力回復により学習が可能となり、生活の質の向上に貢献。

写真: IOM / UNHCR/Andrew McCarroll

人道支援の現場で活用される日本の技術など



【地雷除去・不発弾処理】
ラオス・コンゴビア等で小松製作所や日立建機の重機で地雷除去・不発弾処理を実施。
↑世界初のクラスター子弾処理機 (小松製作所)。
日本地雷処理を支援する会 (JMAS) 事業で活用されている。

①自分の生活と世界との繋がり

②なぜ日本は国際協力をしているのか

③自分にできることはあるだろうか

- ①自分の生活と世界との繋がり
- ②なぜ日本は国際協力をしているのか
- ③自分にできることはあるだろうか

支援を「受ける側」から「する側」へ

From the People of Japan

「東洋の奇蹟」と呼ばれた戦後の経済発展は、世界中の援助があって成し遂げられました。

終戦後日本は貧困により衣食住に不自由する等、大混乱期を迎えます。

世界銀行から計画的返済相当のお金を借りて、日本の経済発展に必要なインフラ（経済基盤）を築く。

⇒日本がこのお金を返した終わったのは、1990年の7月のことでした。

世界の国々から食料や衣料、医薬品、日用品など、あらゆる援助物資が届けられました。

↓

「ガリオア・エロア資金」「ラバ物資」「ケア物資」産

「途上国としての日本」「先進国としての日本」

日本は両方の立場を経験したからこそ、過去の日本と同じ状況で苦しむ国を支援し、その国が発展する援助をおこなっています。

日本の援助によって発展した国は、また別の途上国を支援し、援助の連鎖によって世界中の問題が少しずつ解決されています（南南協力、三角協力）。




日本のための「国際協力」

From the People of Japan

日本が援助を行う理由は「豊かな国が貧しい国に手を差し伸べる」。ただそれだけではありません。

グローバル化が進み、世界との相互依存関係が深まっています。日本には資源・エネルギーが少ないため、生活に必要な食料、衣料品などの多くを途上国からの輸入によってまかっています。

途上国を悩ませているさまざまな問題に目を向けることは地球の未来と世界の平和を守るためであり、**日本自身の将来を支えるため**でもあります。

ODA60年の成果と評価

From the People of Japan

日本への感謝

世界に愛され信頼される国、日本

東日本大震災後、世界の174か国・地域からお見舞い、支援が届け、「日本のこれまでの支援に対する感謝」。

TICAD VIには、アフリカ53か国が参加。「アフリカが世界から忘れられた時、日本が世界の関心を喚起してくれた」。

「貢献する大輪」アフリカ

- 日本企業の進出が進むアフリカ（平和構築、開発が進んだことにより、市場、投資先としての関心が高まる）
- 日本人の活動を支えるアフリカ（シ－レーン）の要を構成、増える在留邦人）

平和で安全な国際社会

途上国の成長・貧困削減、国際社会の平和、安定、繁栄に大きな貢献

「ASEAN東アジア諸国連合」諸国の日本への信頼（ASEAN10か国での世論調査、2017）

「日本との関係は友好的」と89%が回答。●日本を「とても信頼できる」と「どちらかといえば信頼できる」と11%が回答。●ASEANにおける日本の貢献について、日本のODAが自国の開発の「とても役に立っている」「どちらかといえば役に立っている」と87%が回答。

アジアの安定的成長

- 巨大市場としてのASEAN（総GDPが2兆ドルを超える巨大市場に成長）
- 国際社会全体の繁栄を支える重要な交通路（日本が輸入する原油の8割以上がマラッカ海峡がボレーン海峡を通過）

日本の経済活動の基盤

- ①自分の生活と世界との繋がり
- ②なぜ日本は国際協力をしているのか
- ③自分にできることはあるだろうか

自分にできること？



知る、伝える、考える



異文化体験・感動体験



ボランティアに挑戦
(国内でも海外でも)



英語力強化

外務省員として



政治家や著名人との面会

最後に・・・

「外交」や「国際協力」は
政府だけの仕事ではありません。
誰でも参加できる、とても身近な取組です。

※まずは色々調べてみよう！

外務省

検索

ありがとう
ございました



5 年次研修の記録

(1) 高等学校初任者研修

土門 操

草薙祐子

(2) 高等学校実践的指導力向上研修

渡部 真

(3) 高等学校中堅教諭資質向上研修

佐藤梨奈

瀬々将吏

萩原勢津子

平成 30 年度 新規採用栄養教諭研修を終えて

栄養教諭 土門 操

1. はじめに

今年度、横手清陵学院中学校に赴任し、栄養教諭としてのスタートラインに立った。毎日の「食に関する指導」と「学校給食管理」のそれぞれの業務に追われ、あっという間に1年目を終えようとしている。あらためてこれまでの多くの研修で得た学びを振り返りたいと思う。

2. 校内研修

2.1 指導者による校内研修

指導教員の新山澄子先生には多くのご助言をいただいた。栄養教諭の職務には「食に関する指導」と「学校給食管理」があるが、食に関する指導は、学校給食管理という基礎ができてこそ成り立つものであるといわれている。学校給食管理については栄養管理、衛生管理など突き詰めれば底なしであるが、安心安全でバランスのとれたおいしい給食を提供するための基礎基本を学ぶことができた。また、食に関する指導と生きた教材としての学校給食との連携についてもご指導いただき、行事食や食材、教科等に関連させた献立作成のポイントをおさえ、給食に活かしてきた。取り組み事例などからも非常に多くの学びを得たことから、今後も「食に関する指導」と「学校給食管理」においてさらなる研鑽を積み、自校に還元していきたい。校内の業務だけでは触れることのできない他の給食施設の現場学ぶことができ、多くのことを勉強させていただいた。今自分も持っている指導力をより一層向上させられるよう今後も努力していきたいと思う。

2.2 所属校教職員による校内研修

信田正之校長先生、佐々木真教頭先生をはじめ多くの先生方に教諭としての心構えや分掌の運営について教えていただいた。また、家庭科の栗津奈々先生の授業に T2 として参加させていただいたり、学習指導案や教材作成について小田島宏先生や渡部悦美先生からご指導いただいたりと、授業計画について多くの学びを得ることができた。その後の家庭科研究授業では、生徒たちの生活を授業に取り込み、課題解決していくための学び合いをどのように作っていくかが課題であると実感した。生徒自身が自分の生活や家庭を根拠にして授業に参加していけるよう、指導案に活動やそのための手立てを明示する必要がある。いくつかの授業に参加したが、次年度の食に関する指導の全体計画にも反映させ、継続的に行えるようにしていきたいと思う。

3.校外研修

校外研修は、主に秋田県総合教育センターで行われた。中学校教諭とともに教科指導や、生徒指導など学校組織の一員としての多岐にわたる内容の研修を受講した。演習などでは学級担任をしている先生方からの生徒の見え方、授業の考え方など別の視点を知ることができて視野が広がったように思う。授業での技法や、普段の生徒との関わり方などについても意見交換することで日々の指導のヒントを得ることができた。

専門に関する研修では、保健体育課加賀由美子先生をはじめとする先生方から学校給食の意義やその運営に関する研修や、秋田県栄養教諭・学校栄養職員研修会での献立検討など、多くの研修があった。その中で特に印象に残っているものが中堅栄養教諭等資質向上研修授業研究会で教科における食に関する指導案の検討・模擬授業である。各教科等におけるねらいの部分を確認し、保健体育の生活習慣病の導入では、自校の先生を取り上げより身近に考えさせるなどしていた。個人の実態を全体では取り上げず、グループでの課題解決にむけた活動に活用することでプライバシーを配慮し、取り組みやすく工夫されていた。食に関する指導はどうしても本人の食生活を落とすところとするため、授業への取り入れ方を熟考しなければならない。個人の課題の活用のしかたや全体への伝え方などの課題も見つかり、よい経験になった。

4.最後に

調理場の特徴や日常の業務、事務処理など覚えることが多く、頭がパンクしそうになりながらも、生徒の明るさに元気をもらい、「おいしい！」という言葉の励みに業務に取り組んできた。赴任当初は学校に一人しかいない栄養教諭という責任ある立場に重圧を感じていた。力不足を痛感し、悩むことも数多くあり、勉強の毎日であった。しかし、指導教員の新山澄子先生や調理員のみなさん、学校の先生方、他校の栄養士の先生方、多くの研修で出会った先生方からご支援いただき、その不安や様々な壁を乗り越えることができた。研修で知り合った先生方からは、給食現場にあった柔軟な対応に活かすための事例やその経験も学ぶことができ、大変勉強になった。学校の栄養教諭は一人しかいないが、周りにはたくさんの方々がいてくれるという安心があり、なんとか1年目を終えようとしている。これからも初心を忘れず、秋田県子どもたちが健康な食生活を送られるような食育ができるよう、研鑽を積んでいきたい。

最後になりましたが、初任者研修指導者 新山澄子先生をはじめ、一年間多くのことをご教示して下さった先生方へこの場をお借りして御礼申し上げます。

平成 30 年度新規採用養護教諭研修を終えて

草薙 裕子

1 はじめに

昨年 3 月に養護教諭の免許を取得することができたものの、経験も浅く、不安な気持ちで赴任した日が昨日のここのように思い出される。養護教諭を目指したのは、小学校で養護教諭の複数配置での仕事をしたのがきっかけであった。元気が保健室に来て、手当てや言葉がけで元気を取り戻して笑顔で教室へ帰っていく子どもたちを見て、養護教諭は、やりがいがあって自分も元気になる素晴らしい職業だと思い目指そうと決めた。それから 2 年。4 月に新規採用養護教諭となることができ、多くの先生方からご指導を受け、まだまだ未熟ながら少しずつ経験を積んできた。この 1 年間の研修がどのようなものであったか、学んできたことを振り返っていきいたいと思う。

2 校内研修

(1) 指導者による校内研修

指導教官である清陵学院中学校の黒澤美穂子先生に、養護教諭としての心構えや仕事に対する姿勢、基本的な知識や応用力を学ばせていただいた。普通であれば、養護教諭は一人職であり、学校に一人しかいない。だが、清陵学院では中高一貫校であるため、中学校にも養護教諭がいて、カウンセラー室を挟んで保健室を行き来することもできる。この恵まれた環境の中で、他の学校であれば年 12 日間の研修を、私は毎日することができたことに本当に感謝している。

健康診断から始まり、諸帳簿やデータの整理と管理の仕方、配慮を要する生徒の把握と対応、救急体制の整備や学校環境衛生など、その他細かいところまで一つ一つ丁寧に指導してくださり、自信をもって仕事に取り組むことができた。生徒対応についても、学級担任や学年部との連携・協働が大切であることを身をもって教えていただいた。黒澤先生と一緒に職務を遂行していく中で、根拠をもって養護教諭としての気付きを発信していかなければいけないこと、また、自分一人で抱え込まずに必ず組織対応で物事に当たることを学んだ 1 年であった。まだ「連携・協働」について十分に役割を果たせていないと感じているので、今後の課題として日々努力していきたいと思う。

(2) 所属校職員による校内研修

信田正之校長先生、佐藤孝子教頭先生をはじめ多くの先生方に、お忙しい中、資料等の準備や仕事の合間を縫って、養護教諭としての心構えや分掌の運営について教えていただいた。私は、全日制高校での勤務が初めてなので、それぞれの分掌の運営について初めて知ることばかりで大変勉強になった。学校の運営組織体制がどのようなになっているのかを

知り、改めてそれぞれの分掌の意義や重要性について理解することができたと思う。この1年間、生徒指導部員として務める中で、生徒のために、学校をよくしていくために、色々な意見を考え、議論し合っている会議に何度となく参加させていただいた。先生方の熱い思いをひしひしと感じ、私も学校組織の一員としてどのように貢献していくのか、養護教諭の役割を考え果たしていきたい。

3 校外研修

校外研修は、主に新規採用の養護教諭15人で行った。11人が小学校、2人が高等学校、2人が特別支援学校に勤務している。それぞれの学校での自分の取組や、執務をする上での疑問や困っている点などを持ち寄り、情報交換と学びの機会として、回を重ねるごとに会える喜びが大きくなっていくような実りのある研修であった。

また、吉尾美奈子指導主事の下、養護教諭の職務に関わる多くの先生方からご指導いただいた。中でも、養護教諭の専門性を培うための医師や看護師、救急救命士の方々の講義は職務を遂行する上で大変参考になり、自信にもつながった。

秋田大学医学部附属病院のシミュレーション教育センターでは、2グループに分かれて看護師5名の方々から緊急時における学校の対応について1日日程でご指導いただいた。養護教諭、生徒、学級担任、他の先生、保護者などの役割を決めてシミュレーションを取り入れながら、実際に動いて行う研修は、机上で行うものよりも現実味と緊張感があり、いざという時の訓練になったと思う。学校において医療的な専門知識をもっている養護教諭として、生徒の命を預かる重責を担うために、生徒の救急搬送の有無や重症レベルの判断、学校職員に適切な指示を出すことができるかなど、どれも中身の濃い研修であった。今後も、こうした救急救命の講習会などの機会を捉えて積極的に訓練を積んでいきたい。

更に、総合教育センターでの宿泊研修も思い出深く、今後の教員生活の糧となる研修であったと思う。校外研修のよさは、同期採用者が集ってお互いに励まし合いながら課題に取り組むことであり、保健室経営の実践発表を通して、皆同じ思いで仕事に邁進している様子をうかがうことができ大変勇気づけられた。研修後も職務についての話が尽きず、同期の絆が強まったと感じた。養護教諭は一人職であることから、このネットワークを今後も保ち続け、様々な問題について分かち合い、高め合っていきたい。

4 おわりに

はじめは、1年間の研修を乗り切ることができるか大変不安であったが、一つ一つの研修を大切に真剣に取り組み、全ての研修を終えることができた。学校教育及び学校保健に関する専門的な知識と技術を学び、これからは実践的指導力として生かしていかなければいけない。初心を忘れることなく、使命感をもって職責を全うしていきたい。

最後になりましたが、ご指導いただいた多くの先生方に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

実践的指導力向上研修を終えて

総合技術科 教諭 渡邊 真

1. はじめに

今年度、実践的指導力向上研修を行った。この研修は採用から8年目の教員を対象に実施されたものである。この研修を通して、教師としての資質や能力をどう向上させなければならないのか改めて確認することができた。

2. 研修項目および感想について

I 期（7月9日（月） 秋田県総合教育センター）

- 事例を通じた生徒理解と対応
- 学校組織の一員として ー自己理解に基づく目標設定ー
- カリキュラム・マネジメント

学校で発生する問題には原因があり、様々な「人間関係」が絡んでいる。問題の解決には、人間関係の「関係性」に注目することが重要であるとのことであった。また、「円環的思考」が解決への道を開くきっかけになるという話が印象的であった。演習では仮想事例を基にして、グループ協議を行った。協議のなかで参考になる意見も多く聞くことができ、今後の指導に活かしていきたいと感じた。また、「あきたキャリアアップシート」についての講義では、シートを活用して自己のキャリアステージに応じた資質や能力を把握し、教師力を向上させなければならないとのことであった。自分の資質や能力を把握するための演習も行ったが、自分の強みや弱みに気づくことができ良い機会となった。弱みの部分については今後改善し、資質能力の向上に努めていきたい。

II 期（8月23日（木） 秋田県総合教育センター）

- 授業評価による継続的な授業改善 ーグループ別協議ー

生徒の評価に当たっては、生徒を多面的に捉える必要があるとの話が印象的であった。特にそのなかで印象的だったのは、評価についての考え方として、①自分の評価が本当に正しいのか、②見えている部分の評価に留まっていないか、③他の先生方からの情報が考慮されているのかなど、様々なことを踏まえ総合的に判断しなければならないという話である。国立政策研究所によると、高校の学習評価はペーパーテストを中心として平常点を加味した、成績付けのための評価にとどまっているとの指摘がされている。定期考査での評価に偏りがちだが、大切なことは事後評価より事前評価であり、定期考査のみならず日々の学習活動を踏まえ評価しなければならないと感じた。また、教科別に分かれて持ち寄った指導案を基にして評価ポイントの検討を行った。学習活動と評価が一致していないなどの指摘や意見をいただいた。指摘いただいたことを評価計画の際に参考にし、授業改善に努めていきたい。

3. おわりに

今回の研修を終え、採用から8年目となり、学校経営に積極的に参画するなどの実践的な指導力が求められているということを感じた。今後も教師としての資質や能力を向上させるために研鑽を積んでいき、2年後に控えている中堅教諭等資質向上研修（10年研）に向け研修に励んでいきたい。

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

英語科 教諭 佐藤 梨奈

1. はじめに

今年度、中堅教諭等資質向上研修対象者として1年間の研修を行ってきた。内容は校内研修、校外研修（秋田県総合教育センター主催）、授業研修（秋田中央高等学校）、企業等でインターンシップ体験をする選択研修である。1年間の研修を通し、これまでの教員生活を振り返り、ミドルリーダーとしてどのように生徒や学校教育に携わって行くべきか、自身の課題を確認することができた。

2. 総合教育センター研修、および高校教育課担当研修について

【センター研修】

I 期	○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略 ○学校の危機管理 ○学校組織の一員として①－リーダーシップ－
II 期	○多様な単元（題材）構想に基づく柔軟性のある授業展開 ○授業づくりと授業研究の実際
III 期	○いじめの理解と対応 ○教育相談の考え方・進め方 ○気になる生徒の事例を通した具体的対応の理解
IV 期	○教育活動全体を通したキャリア教育 ○学校全体で取り組む情報教育 ○豊かな自己形成に資する道德教育の在り方
V 期	○教育公務員の服務 ○学校組織の一員として②－キャリアデザイナー－ ○これからの学校教育

【高校教育課担当研修】

基礎研修	授業研修（授業実践・授業参観・協議）	選択研修（企業等体験研修）
------	--------------------	---------------

(1) 総合教育センター研修について

5期に渡ってのセンター研修では、講義・演習を中心に研修を深めた。研修を通して、ミドルリーダーとしての自分の使命やこれからの課題を見つけることができた。育児休業後に職場復帰したが、昨今の教育的課題から遠ざかっていた。本研修を通して、再度自らの課題を見つけ、教員としての使命を見いだすことを目標に1年間の研修に臨んだ。

III期の講座「教育相談の考え方・進め方」では各研修者が各校の事例を持ち寄り、実態-分析-対応を発表し合った。各グループにはSCWの先生方を迎え、事例に関する助言を頂くことができた。特別的配慮や支援が必要な生徒の割合は、各学校で徐々に多くなってきている。学校だけで取り組むのではなく、生徒のケースに応じて各関係機関との連携が不可欠であることを再確認できた。

IV期の講座「豊かな自己形成に資する道德教育の在り方」においては各校の道德教育全体教育

を基に次年度に向けた具体的な改善点を話し合った。道徳教育推進教師を中心に、学校の実情や目標に応じた道徳教育を学校全体で実施していきたい。

V期の講座「学校組織の一員として②」においては、これまでの教員生活を振り返り、教員キャリアの振り返りを行った。それぞれのステージにおける出来事・満足度・その原因を客観的に見ることで、これからの教師としての在り方・使命を考えるきっかけにできた。

本研修を受講する以前は、「ミドルリーダー」という言葉に具体的なビジョンを持たずにいた。しかし、今後の学校運営に積極的に意見を反映し、若年教員の指導を行うことが我々の役割である。各分野において、明確なビジョンを持って今後の教員生活を送りたい。

(2) 教科指導等研修（9月3日、秋田中央高等学校）

秋田中央高等学校の生徒を対象に、高校1年コミュニケーション英語Iの授業を担当した。会場校（秋田中央高校）の生徒達は英語の基本を十分に理解しており、まじめにグループ・ペアワークに参加した。指導案の大まかな流れは、会場校のCAN-DOに合わせ、本時の目標を初見の文章の概要把握にした。授業では、視覚的教材を使用して本文の概要を捉えた後、フラッシュカードでの単語・表現練習、音読を通して本文の概要把握へつなげた。授業の後半は、授業を交代し、本文中の代名詞の読み取りを行った。他研修教員の授業では、教科書本文から、より authentic な教材を自作するなど、各先生方の得意分野を拝見でき、大変勉強になった。

本研修を通して、総合教育センター指導主事佐藤先生を始め、各校の先生方から助言を頂き、大変参考になった。初見の生徒達の前で授業をすることで、普段の自校の生徒達にどのくらい助けられているか、授業は教師だけではなく生徒達の助けもあって進行していけると再確認できたよい研修になった。

3. 特定課題研究

研究テーマ	生徒の発信力をひきだすための工夫と取組について
研究方法	「主体的で深い学びにつなげることができる授業の展開」をするためには、生徒の発信力を引き出して活発なコミュニケーション活動に結びつける必要がある。他校の授業参観を通して様々な事例を研究し、自校の課題を発見し、手立てを見つけたい。

(詳細は「特定課題研究レポート」)

4. 選択研修（企業等体験）

期 間	平成30年8月4日（土）～8月6日（月）（3日間）
研修先	秋田県立近代美術館

(詳細は「選択研修報告書」)

5. おわりに

1年間の研修を通して、中堅教諭としての自身の役割と使命を再確認することができた。様々な研修の折に、多くの先生方から「ミドルリーダーとしてどのように学校運営に関わって行くべきか」について助言を頂いた。今後の社会情勢に対応できる学校を作り、社会変化に対応できる生徒を作るため、今後も学び続ける教師でありたい。

最後に、校長先生をはじめ多くの先生方からご指導をいただき、厚く御礼申し上げます。今後の教育活動に生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 佐藤 梨奈
研 修 先	秋田県立近代美術館		
研修期間	平成30年 8月4日(土)～平成30年 8月6日(月)		

1 研修の概要

8月4日(土)

10:00~10:30 美術館概要説明 (秋田県立近代美術館 副館長 檜尾康子様)
 10:30~12:00 特別展「チームラボ展」誘導業務
 13:00~14:00 セカンドスクール補助
 14:00~15:00 美術館受付業務・監視業務補助
 15:00~16:00 美術館勤務について、研修のまとめ (秋田県立近代美術館 学芸班 小林紀子様)

8月5日(日)

10:00~12:00 びしゃびしゃアート①回目準備・補助 (秋田県立近代美術館 学芸班 鈴木秀一様)
 13:00~16:00 びしゃびしゃアート②回目準備・補助

8月6日(金)

10:00~11:00 セカンドスクール業務準備
 11:00~12:00 セカンドスクール補助
 13:00~15:00 特別展「チームラボ展」監視業務
 15:00~15:30 「ふれんどりーギャラリー」展示業務
 15:30~16:00 美術館勤務について、研修のまとめ (秋田県立近代美術館 学芸班 小林紀子様)

2 研修の成果

秋田県立近代美術館にて3日間の企業体験研修を行った。美術館職員の仕事は想像以上に多岐にわたっており、作品の展示、美術品収集、保存管理、調査研究、広報出版・宣伝、教育普及の仕事を、学芸班職員7名で運営していることに大変衝撃をうけた。学芸班の職員は教員出身者が多く、教育普及活動では、セカンドスクールの開催の他、未就学児から一般を対象に、様々な体験講座を実施している。日程2日目、「びしゃびしゃアート」においては、未就学児の制作体験の補助をした。悪天候のため、屋内での活動に変更したが、ペンキで体が汚れることも気にせず、一心に創作する姿がとても印象的であった。セカンドスクール事業においては、高校の利用例もあり、本校も芸術鑑賞教室等での利用が可能であると考えた。生徒達にも秋田県の貴重な文化財をもっと身近に感じてもらいたいと改めて思った。また、今回は特別展「チームラボ展」の運営に携わることができた。大変人気のある特別展であり、研修3日目には来場者3万人を突破したというセレモニーにも参加できた。セレモニーの様子は参加企業のABS社によりテレビ放映され、更なる広報・宣伝につながっていた。「チームラボ展」の企画はほぼ2年前から始まっており、研修時は2年先の企画展について作案中であった。その企画・交渉・宣伝等も学芸班職員7名で全て担っているというので、大変頭の下がる思いがした。

今回の研修ではまた、秋田県立近代美術館のコレクションにも触れることができた。「考える人」で有名な芸術家ロダンの彫刻が展示されていることを、秋田県民はどれだけ知っているだろう、と思った。

研修最終日には、「ふれんどりーギャラリー」展示業務補助を行った。美術品収蔵庫の中に眠っている彫刻を展示した。大きな彫刻は運送会社が運び出すが、職員で行うこともあるようだ。収蔵庫の中には田沢湖の「たつこ像」の等身大石膏像があった。美術品の保存管理も美術館職員の大事な仕事である。

研修以前、美術館には華やかなイメージを抱いていたが、その裏側では、職員が様々な仕事を一手に担っていた。教師という職業も、業務内容は多岐に渡っている。今回の研修を受け、仕事をチームで行う大切さに改めて気づき、また、生徒にもっと秋田県の文化財に触れることの大切さを伝えたいと思った。研修先である秋田県立近代美術館の職員の皆様には、貴重な機会を与えて下さったことに大変感謝している。

特定課題研究レポート

所属校	秋田県立横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 佐藤 梨奈
研究分野	A：本県の教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 D：教科等指導に関する研究 E：道徳教育等に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他		
研究テーマ	生徒の発信力をひきだすための工夫と取組について		
<p>1 研究の概要</p> <p>(1) テーマ設定の理由</p> <p>「主体的で深い学びにつなげることができる授業の展開」をするにあたり、いかに生徒の発信力を引き出してコミュニケーションを深められるかが課題になる。本校でも授業の内外で生徒の発信力育成に努めているが、他にどのような工夫が考えられるだろうか。今回は他校の生徒や学校の実態に応じた工夫を知ること、本校の取組への成果と課題を見つけたいと思い、テーマ設定をした。</p> <p>(2) 方法</p> <p>① 他校の公開授業・研究授業参観から、生徒の発信力を引き出すための授業の工夫・取組を知る。</p> <p>② 本校英語科の現在の取組について改善点を見つける。</p> <p>(3) 授業参観から</p> <p>①A校（中等部・高等部）</p> <p>中学入学時から訓練を続け、中1生でディベートに挑戦する。中3生は新出教材の内容を即興でリテリングし、クラスで共有する。発表に対しての意見を英語で自由に言い合う。</p> <p>高1生は教科書の内容を掘り下げ、ある話題について論理的に考え、発表する。探究活動の一助になるよう、授業内で[課題－原因－解決策]を考える場面設定をする。</p> <p>②B校</p> <p>ふるさと紹介を作り、ALTへ紹介する。ふるさと紹介は中学校段階で経験している生徒が多い。もっと活発な活動にするためには、発表内容に関するディベート等を行うことができる。</p> <p>③C校</p> <p>教科書の内容（環境問題）を掘り下げ、登場人物になりきって人々に環境問題を呼びかけるポスター作成・発表をする。発表後にクラスで良い点、改善点を英語で発表しあう。クラスメイトから良い点を指摘されることで、お互いに英語学習への良い動機付けになっているようだ。</p> <p>④D校</p> <p>教科書の内容（社会問題）を掘り下げ、自分が住む市町村についての[課題－原因－解決策]を各自で考え、クラスで共有する。発表のための基礎文法・語彙の指導が徹底されており、高1生でも比較的自由に表現できている。</p>			

(4) 本校の取組

①授業での工夫

各レッスン毎にALTによるプレゼンを導入する。All Englishでのプレゼンを聞き、英語で質問をする訓練をする。英語でメモを取り、日本語を介さないで概要を把握する力をつける。

②英語科としての取り組み

・学校特設科目「英会話」（中学校）

中学2・3年で学校設定科目として「英会話」を設定。英検スピーキングテストを参考にし、対話形式で迅速に答える訓練をする。対話練習後は教師と1対1でスピーキングテストを行う。

・スピーキングテスト（高校普通科）

年5回スピーキングテストを実施する。あるテーマに従い、既習事項を使用して意見表明をする。

・プレゼンテーション（高校総合技術科）

年度末に各自でプレゼンテーションをする。各自で設定したテーマに従い、スライドやポスター等を作成、説得力のある発表をする。教師と生徒の双方からの評価をし、メモを取って発表を聞く姿勢、質問する力の育成になっている。

2 成果と課題

(1) 成果

各校の授業参観からは、「見せかけの対話活動・意見表明活動」にならない工夫を見ることができた。いずれの学校も生徒や学校の実情に沿った活動が工夫されており、大変参考になった。特に教科書の内容を掘り下げ、自分たちの身近な話題として[課題－原因－解決策]を考えることで、英語をツールとして使用する良いきっかけとしている。生徒の発信力を伸ばすために、authenticな題材を与え、具体的な場面設定をしている。

本校中学英会話の授業では、中学生の英語検定合格者が増えている。英会話の授業を英検に特化したのは今年度からであるが、今後も継続していきたい。基礎を身につけた中学生を高校でどのように指導できるか、楽しみである。

(2) 課題

発信力強化の為に基本的語彙・文法等の知識をしっかりと定着させることが必須である。本校では中高一貫校の良さを活かし、高1生から積極的に英語で表現・発信できるよう、中3と高1間のギャップをなくすよう、基礎文法・語彙の定着を図る必要がある。

高校普通科のスピーキングテストでは、表現した内容の暗記活動にとどまらず、即興での発表・説明ができる力をつけたい。生徒の全員が探究発表時に英語で発表し、さらに質問できることを目標にしたい。

高校総合技術科では英語を得意とする生徒を中心に、授業内の発表から、課題研究発表を英語のできる生徒を目標にしたい。また、今年度は本校から海外留学している生徒が2名いる。本校生が在籍する学校とSNS等でのコミュニケーションの場を設定し、よりauthenticな活動につなげたい。

[参考] 平成30年度秋田県高等学校教育研究会英語部会全県大会

秋田南SGHカンファレンス2018

平成30年度横手高校公開授業

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

理科 教諭 瀬々 将吏

1. はじめに

学校教員として10年を経験し、11年目となった今年度、「中堅教諭等資質向上研修」を行った。学校運営の円滑かつ効果的な実施において中核的な役割を果たす「中堅教諭」としての資質を向上させることを目的としている。研修は「校外研修」と「校内研修」に大別される。

2. 総合教育センター研修、および高校教育課担当研修について

【センター研修】

I 期	○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略 ○学校の危機管理 ○学校組織の一員として①
II 期	○多様な単元（題材）構想に基づく柔軟性のある授業展開 ○授業づくりと授業研究の実際
III 期	○いじめの理解と対応 ○教育相談の考え方・進め方 ○気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
IV 期	○教育活動全体を通じたキャリア教育 ○学校全体で取り組む情報教育 ○豊かな自己形成に資する道德教育の在り方
V 期	○教育公務員の服務 ○学校組織の一員として② ○これからの学校教育

【高校教育課担当研修】

基礎研修	授業研修(教科指導等研修)	選択研修(企業等体験研修)
------	---------------	---------------

(1) 総合教育センター研修について

校内での業務においては、自分の専門分野や現在の分掌などの仕事を中心であり、学校の多種多様な仕事全体について見渡すような機会はなかなかない。その意味で、学校教育における多種多様な業務の側面をバランス良く学ぶことができる本研修は貴重な機会となった。本研修で特に役に印象に残ったものをいくつか取り上げたい。

10年経験者研修から中堅教諭資質等向上研修へ

まず、本研修で最初に知ったことは、学校教員の研修制度が、教育公務員特例法等の改正により「10年経験者研修」から「中堅教諭資質等向上研修」に改められたということである。この改正は本研修に限らず、教員養成からベテランまで、教員のキャリアステージ全般に適用されており、「主体的・対話的で深い学び」のニーズや、わが国の人口動態等、教育をとりまく社会環境の変化に対応しようとする大規模なものであることを知った。特に本研究においては、ミドルリーダーの育成に焦点が定められていることを学んだ。

教育公務員の服務

教育公務員の服務については、勤務中にも、振替日の設定や、勤務における業務の内容について、現場で判断が求められるケースがあるが、そのような場合に自分で法令を確認するといったような作業はこれまで行ってこなかった。実際に「教育関係職員必携」をひきながらケーススタディを行う演習はこれまでに行ったことがなく、新鮮であった。教育公務員の服務を規定する様々な法令があることを学ぶことができた。

学校組織の一員として②

本研修を締めくくる活動のひとつとして、10年間の教育活動を総括した「キャリア降り帰りシート」を作成し、グループ内で紹介した。自分が秋田に来てから10年間、何を達成したのかを把握し、これから何をするのかを考える上での重要なきっかけとなった。作成途中には仕事に限らず、私生活におけるライフイベントも思いだし、感慨無量であった。

(2) 教科指導等研修（9月3日、秋田高等学校）

高校3年生「物理」において、「電流が磁界からうける力」「ローレンツ力」を題材とした研究授業を行った。授業法として、「相互作用型演習実験授業」を参考とし、実験結果から物理法則を学んでいくスタイルで授業を進めた。ほぼ計画通りに授業を進めることができ、授業終了後の報告会においても高評価であった。

3. 特定課題研究

研究テーマ	教科横断型プログラミング実習授業の実践
研究方法	物理現象や社会現象を非常に簡単なルールに基づいて再現する「セル・オートマトン」という手法を用いた授業案を作成・実践し、その効果や運用上の課題について検証する。

(詳細は「特定課題研究レポート」)

4. 選択研修（企業等体験）

期 間	平成30年8月2日（木） 平成30年8月7日（火） ～ 平成30年8月8日（水）（3日間）
研修先	パステル動物病院、秋田県分析化学センター

(詳細は「選択研修報告書」)

5. おわりに

本研修の目的どおり、中堅教諭としての自覚・意識が芽生えたことが最大の成果といえる。これまで、先輩教員の姿をみながら、なんとか学校の職務をこなせるように、自分の資質・能力を向上させることが主として働いてきた。これからは、勤務校の若年教員のみならず、秋田県の教員全体の資質向上を意識して教育・研究活動に励みたい。それを通して、素晴らしい子どもたちが社会へと巣立っていくことこそが教員の勤めだと考えている。

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 瀬々 将吏
研 修 先	パステル動物病院		
研 修 期 間	平成30年8月2日（木）		
<p>1 研修の概要</p> <p>研修は予定通り、以下のスケジュールで行われた。</p> <p>9:00～10:00 獣医の仕事に関するオリエンテーション</p> <p>10:00～12:00 動物医療に関する業務</p> <p>12:00～13:00 休憩</p> <p>13:00～17:00 動物医療に関する業務</p> <p>オリエンテーションでは、病院全体の説明があった。医師は2名（院長、副院長）、その他に動物看護師と補助スタッフが勤務している。また、獣医や動物看護師を目指す生徒に向けての情報提供をしてくださった。獣医については、近年獣医学科の偏差値が上昇しており、入学するのは昔と比べるとたいへん困難だということであった。また、動物看護師についても、「全国統一認定機構」の審査に合格することが不可欠となっている。動物医療のニーズ増加に伴い、質の高い医療が求められているということであろう。</p> <p>診療が開始してからは、実際の仕事の様子に立ち合わせていただき、その実際に触れた。貴重な体験であった。病院は横手市のやや外れ、国道沿いではあるが、交通量はそれほど多くない。にもかかわらず患者は途切れず、多忙な様子であった。</p> <p>医療・補助業務のどちらにも資格が必須のため、研修者は実際の作業を行うことはできない。研修は主に実際の診察の現場を見学させて頂き、ひとつひとつの診察についての解説を聞くことで知識を深めていった。</p> <p>患者の症状は幅広い。糖尿病などの重篤な症状の犬がいれば、単にトリミングに訪れる犬や猫もいる。病院には血液検査などのひとつおりの分析機器が揃っており、これを用いて診断を下す。できる限りの延命を目指す人間の治療と異なり、動物に関しては、飼い主が「どこまで治療するか」の判断が求められる。その再、飼い主としての自覚を持ち、責任・愛情をもって接してほしいという医師の言葉が印象的であった。</p> <p>2 研修の成果</p> <p>本研修の最大の成果は、横手市の動物病院という、普段関わることのない職場での経験を通して、地域の動物医療に関する現状を認識できたことである。人口減の著しい横手市ではあるが、高齢者の医療の需要が高いのと同様、ペットも住民のかけがえのない仲間として需要が高いことがわかった。また獣医や動物看護師採用の現状を知ったことにより、そのような進路を目指す生徒の指導に役立てることができる。これも研修の成果である。非常に有意義な研修であった。</p>			

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 瀬々 将吏
研 修 先	秋田県分析化学センター		
研 修 期 間	平成30年8月7日（火） ～ 平成30年8月8日（水）		
<p>1 研修の概要</p> <p>8月7日（火） オリエンテーション・社内見学 環境分野に関する調査・測定・分析（センター内）</p> <p>8月8日（水） 環境分野に関する調査・測定・分析（野外）</p> <p>2日間にわたり、環境の調査・分析の業務を体験した。初日はセンターの概要についての説明を受けた後、センター内の多様な分析機器を見学した後、実際の分析作業（水中の微生物検査）を行った。昔は普通の実験室でフラスコやビーカーを用いて、手作業で分析を行っていたそうである。しかしながら、近年は分析機器が進歩しており、試料を機器にセットするだけで結果が出力される。機器は一台数百万から二千万くらいまでと高額である。検査の種類ごとに必要な機器が異なるので、多種類の分析機器が必要である。故障は自分で修理することはほぼ不可能で、業者との契約で年一千万程度はかかるそうである。</p> <p>二日目は、秋田県環境保全センターにて水の採取を行った。朝にセンターを出発し、丸一日、水の採取作業を行った。保全センターは下水の処理をしており、いたるところに水質検査用の井戸がある。一日に12カ所の井戸をまわり、ポンプで水をくみ上げ、大量のボトルに採水した。ボトルは一本5Lほどあり、とても重い。また、水の濁りがなくなり澄むまで待たなくてはならず、井戸によってはなかなか濁りがなくなる箇所もあった。この作業を炎天下、陰のない場所で行い、まさに重労働であった。水分補給に気を配って作業を行ったが、一歩間違えば倒れてしまうほどの暑さであった。</p> <p>夕方に採水が終了し、センターに戻ってその日の仕事を終えた。</p> <p>2 研修の成果</p> <p>日頃絶対に知ること、そして想像することも難しい、分析センターの業務内容について知り得たことが成果である。分析の様子は想像通りであったが、屋外での肉体労働は想定外であった。</p> <p>また、センターに分析を依頼すると決して安くはなく、数万～十数万の価格となる。大金を払った結果はA4の分析結果1枚であり、顧客からすると、「大金をはらって、この紙1枚だけ」と満足度の大変低い商売である。しかし、センターの内実を知ったうえで、高価な分析機器と肉体労働の対価だと思えると納得がいく。昨今は環境に厳しい目が向けられており、この種の検査は社会を支える上で不可欠である。本センターは秋田県を支える重要な企業だと実感した。まさに自然科学が世の中を支えていることが実感でき、感慨深かった。</p>			

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 瀬々将吏
研 究 分 野	A：本県の教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 D：教科等指導に関する研究 E：道徳教育等に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他		
研 究 テ ー マ	教科横断型プログラミング実習授業の実践		
<p>1 研究の概要</p> <p>次期学習指導要領においては、Society5.0に代表される社会の急激な変化への対応のため、情報教育が大幅に強化される。具体策としては教科「情報」が中心だが、「高等学校の他教科等との横の連携も極めて重要である」とされている。この流れを意識し、過去数年間、理科・数学・情報の教科横断型の課題研究題材や授業案の作成に取り組んでいる。今年度は、物理現象や社会現象を非常に簡単なルールに基づいて再現する「セル・オートマトン」という手法を用いた授業案の作成に取り組んだ。</p> <p>授業の対象は、11月12日に総合教育センターで開催された「理数科合同研修会」に参加した県内の理数科2年生である。「It from Qubit～世界はビットからできている～」と題して、理論物理学の分野で進捗しつつある情報分野との驚くべき融合について講義を行った後、セルオートマトンのプログラミング実習を行った。</p> <p>生徒2人に1台ずつ、無料OS (linux) とプログラミング言語 (processing) をインストールしたパソコンを準備した。セルオートマトンの仕組みについて、いきなりコンピューターから始めるのではなく、方眼紙を塗りつぶすことにより理解させ、その後プログラミングに取り組んだ。初学者が白紙の状態からプログラムを書くことは難しいため、あらかじめ用意したコードの一部を自分なりに変更して、実行させる方略をとった。出力される結果を全体で共有、議論して終わりとした。</p> <p>2 成果と課題</p> <p>【成果】(1) 授業案は、最新科学の動向、社会へのインパクト、教科横断性等が盛り込まれており、自分の専門性を最大限に活かすことができた。特に、社会に関連の薄そうな理論物理と、ゲーム、SNS、スマホなど生徒にとって身近な題材とを関連づけられたことが大きな成果である。</p> <p>(2) 難易度の設定が適切で、授業として成立した。その結果、生徒はパターン出力まで自力でたどり着くことができ、その画面がでたときには「オー」と歓声があがり、プログラミングを楽しんでいたことがわかった。コードを書くことへの抵抗感もすこし薄れたのではないと思われる。(3) 高額な機材をひとつも用いずに、古いPCなどをリサイクルして実施可能なことを実証できた。</p> <p>【課題】(1) 前半の講義部分に関しては双方向性にやや欠けており、生徒がなにを学んだかを把握することができなかった。(2) 大量の機材のため、会場までの運搬や設営に関して合同研修会スタッフの協力が不可欠であった。理想的には予算や支援を得て、軽量で扱いやすい機材の準備、またはPC室の使用が望ましい。特に、PCを一人一台与えられなかったことは問題であった。(3) 取り扱った題材はかなり特殊であり、開発は簡単ではない。個々の作業は活動は難しくないが、数学、情報、理科の広範囲につながりを見いだし融合させることが難しい。科学技術の動向にアンテナを張り、積極的に手を出していく姿勢とそれらを活用できる能力が求められる。民間・アカデミア・教育の連携が不可欠と感じた。</p>			

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

英語科 教諭 萩原 勢津子

1. はじめに

今年度、中堅教諭等資質向上研修を行った。主に、総合教育センターでの講義による研修、秋田中央高校と本校での授業研修、企業で3日間行う選択研修である。これらの研修を通して、これまでの教員生活を振り返り、これからの課題を確認することができた。

2. 総合教育センター研修、および高校教育課担当研修について

【センター研修】

I 期	○質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略 ○学校の危機管理 ○学校組織の一員として①
II 期	○多様な単元（題材）構想に基づく柔軟性のある授業展開 ○授業づくりと授業研究の実際
III 期	○いじめの理解と対応 ○教育相談の考え方・進め方 ○気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解
IV 期	○教育活動全体を通じたキャリア教育 ○学校全体で取り組む情報教育 ○豊かな自己形成に資する道德教育の在り方
V 期	○教育公務員の服務 ○学校組織の一員として② ○これからの学校教育

【高校教育課担当研修】

基礎研修	授業研修(教科指導等研修)	選択研修(企業等体験研修)
------	---------------	---------------

(1) 総合教育センター研修について

この研修を通して、学校運営全体を見たときに自分の経験が非常に偏っていたことに気付くことができた。これからは、中堅教諭として得意分野を確立するとともに広く学校運営に参画していくことが求められていると強く感じた。1年間の研修講座を振り返り、特に印象深く考えさせられた講座は次の通りである。

「多様な単元（題材）構想に基づく柔軟性のある授業展開」

学習指導要領の改訂を受け、学校教育に期待されること、今後の指導計画において意識しなければならないことについて説明を受けた。今回の改訂がこれまでと大きく異なる点は、社会から求められる知識・技能の習得を目標とするのではなく、身につけた知識・技能を活用して自ら考えて行動する力を育むことを目標としていることである。自ら考える思考の基盤は、やはり、幅広い視野と知識である。新学習指導要領で目指す資質・能力を獲得するためには、学習者はこれまで以上に生きて働く知識を蓄えていなければならないことが分かった。授業を計画・実践する指導者としては、教科に関する知識だけではなく、他教科における実践や社会動

向に関する知識も深めていく必要があると感じた。

「いじめの理解と対応」

法整備により「いじめの定義」が明文化され、学校現場では「いじめ」の捉え方が大きく変化してきている。しかし、保護者や地域の大人の中には、これまでの社会通念上の「いじめ」のみを「いじめ」と認知する人もいる。そのため、「いじめ」と疑われる事案に対応する際には、法律上の「いじめ」と社会通念上の「いじめ」にはギャップがあることを十分に認識した上で、場合によっては、「いじめ」という言葉を使わずに解消を図らなければならないということ学んだ。

これらの研修から学んだことを生かし、校務における経験不足を補う一方で自分の得意分野を確立できるよう、研鑽に努めていきたい。

(2) 教科指導等研修（9月3日、秋田中央高等学校）

本校の佐藤梨奈先生と2人で1時間の授業を前半と後半に分担して行った。授業では、生徒の反応は良かったが、時間配分が上手くいかずに、目標の達成度を確認するための場面に十分な時間を取ることができなかった。授業後の研究協議では、4名の研修参加者に共通して挙げられた課題は、「生徒を十分に活動させることができなかった」ということだった。自校での授業においては、生徒と教師の関係に慣れがあるために、生徒が意図を汲んでくれることに頼りながら指示を出しがちである。外に出て授業を行ったことにより、指示の与え方に関する気配りが欠けてきていることに気づくことができた。

3. 特定課題研究

研究テーマ	学習意欲の向上に繋がる学習支援と評価の工夫
研究方法	授業活動と各種テストの内容をリンクさせ、評価項目・配点・出題形式を明示する。授業担当者間の情報共有を密にし、単元配当時間や授業内タスクの決定に反映させる。

(詳細は「特定課題研究レポート」)

4. 選択研修（企業等体験）

期間	平成30年8月4日（土）～8月6日（月）（3日間）
研修先	有限会社 尾張屋旅館

(詳細は「選択研修報告書」)

5. おわりに

中堅教諭等資質向上研修Ⅴでは、「キャリア振り返りシート」を作成し、自分の10年間を振り返った。また、シートを他校の先生方と共有することで10年間の経験を比較することができた。仕事の満足度が低かった時期やその時期を抜け出したきっかけについて情報共有して得たものを生かし、自分の仕事の満足度を高め、主体的に教育活動を行っていきたい。

最後に、校長先生はじめ多くの先生方からご指導をいただいたことに感謝している。今後の教育活動に十分に生かしていきたい。

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 萩原 勢津子
研 修 先	有限会社 尾張屋旅館		
研 修 期 間	平成30年 8月 4日(土) ~ 平成30年 8月 6日(月)		
<p>1 研修の概要</p> <p>1日目 8月4日(土) 8:00~17:00 ・客室・館内清掃、客室準備 ・宿泊客対応 ・夕食準備・配膳</p> <p>2日目 8月5日(日) 8:00~17:00 ・客室・館内清掃、客室準備 ・宿泊客対応 ・夕食準備・配膳</p> <p>3日目 8月6日(月) 8:00~17:00 ・客室・館内清掃、客室準備 ・買い出し ・調理場整理</p> <p>2 研修の成果</p> <p>今回の研修では、宿泊客の多くが中高生の運動部員である旅館で接客や清掃業務にあたることにより県内外の中高生の行動と引率者の指導を観察し、これからの生徒指導の在り方を学ぶことがねらいであった。この研修期間中に予約されていた高校生団体客の予約がキャンセルとなったため、中高生の行動と引率教員の指導を観察する機会は無くなってしまったが、従業員の方々からこれまで宿泊した様々な学校の運動部員の様子について話を聞くことができた。感心した例としては、チェックインからチェックアウトまで引率教員が注意や指導をほとんどすることはなく、館内の利用については生徒自身が従業員に確認しながらマナー良く利用していたことが挙げられた。困惑した例としては、チェックイン時の館内利用説明をほぼ守らず、チェックアウト後に清掃に入ったところ、備品の電気ポットの中にカップ麺のつゆが捨てられていたことが挙げられた。遠征や宿泊経験の多少から生じる差は仕方ないが、後の例については、宿泊経験の少なさからくる問題だけではないと言える。教員は、生徒の実態を把握し、必要であれば細かすぎるくらいに声を掛け見守る必要があると感じた。</p> <p>「客室・館内清掃、客室準備」は3日間通して行った仕事である。従業員の方に作業の流れを教えてください、お客様がチェックアウトした部屋から順に洗い物を下げ、布団を上げ、清掃と備品補充を行い、布団をセットした。館内清掃では、浴室とトイレを担当した。これらの作業は、力仕事でありながら、お客様が気持ちよく過ごせるように細かな部分まで気を配らなければならない繊細な仕事でもあった。自分の仕事が旅館に迷惑を掛けることのないように、早く丁寧な仕事を心がけた。「夕食準備・配膳」では、下ごしらえ前の食材準備をしたり、食器の準備や盛り付けを行った。食器の向きや盛り付けに決まりがあり、自分の常識のなさを恥ずかしく思った。</p> <p>この研修を通して、これまで聞いたことのないような高校生の行動を知ることができ、生徒指導をする上で、生徒の実態把握が如何に大切であるかを実感した。また、宿泊施設側の気配りを学んだことにより、感謝の気持ちを持って施設を利用することも指導していきたいと感じた。</p> <p style="text-align: right;">(A 4判 1~2枚程度)</p>			

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	横手清陵学院高等学校	職・氏名	教諭 萩原 勢津子
研 究 分 野	A : 本県の教育課題に関する研究 B : マネジメントに関する研究 C : 生徒指導に関する研究 D : 教科等指導に関する研究 E : 道徳教育等に関する研究 F : 特別活動に関する研究 G : 総合的な学習の時間に関する研究 H : 特別支援教育に関する研究 I : その他		
研 究 テ ー マ	学習意欲の向上に繋がる学習支援と評価の工夫		
<p>1 研究の概要</p> <p>〈テーマ設定の理由〉</p> <p>中学生の時から英語に対して強い苦手意識を持っている生徒は、大学・短大への進学を希望していない場合、英語を学ぶことを諦めている傾向にある。クラス展開を習熟度別にし、教科書の進度を揃えたまま指導内容の差別化を図る工夫をしてきたが、苦手意識からくる学ぶことへの諦めは改善されなかった。そこで、自分の取り組みが成果をあげたと実感できるような仕掛けを作り、学習意欲の向上に繋がりたいと考え、このテーマを設定した。</p> <p>〈方法〉</p> <p>①授業活動とスピーキングテスト・定期考査の内容をリンクさせ、その情報を生徒に明示することにより考査対策へと誘導する。</p> <p>②評価項目・配点、テストの範囲・出題形式について各テストの2週間前までに提示する。</p> <p>③授業担当者間の情報共有を密にし、単元配当時間や授業内タスクの決定に反映させる。</p> <p>〈対象科目〉</p> <p>コミュニケーション英語Ⅱ（普通科）、英語表現Ⅱ</p> <p>2 成果と課題</p> <p>〈成果〉</p> <p>方法①では、授業で作成したスピーチ原稿を元にスピーキングテストを受験し、類題が考査で出題されるという流れを作った。2学期以降、スピーキングテストと考査において取り組みの成果を実感した生徒が周囲の生徒に影響を与える形で、英語が得意な生徒から苦手意識のある生徒へと学習姿勢に変化が現れた。方法②では、上位層を中心に自ら出題を想定して問題演習を行い、答えの確認や質問をしに来る生徒が増えた。また、評価項目に挙げられている小テストへの取り組みが改善された。方法③により、2学期以降、授業担当者がクラスの実態に応じて必要なタスクを実施するための時間を各単元に配当した。その結果、授業内で考査に向けた復習の仕方を提示・体験させることが可能となり、下位層でもスピーキングテストに意欲的に取り組み、前向きに考査対策をする生徒が増えた。今回の工夫により、全体的に見通しをもって学習に取り組む生徒が増えたと考えられる。</p> <p>〈課題〉</p> <p>大学受験を想定したレベルの教科書を使用しているため、中学校での既習事項の定着が2～3割程度の生徒は言語材料のほとんどが分からず、タスクをやり遂げられないことが多かった。このような生徒が高校での英語学習で達成感を得るには、中学校英語の学び直しが不可欠である。習熟度別クラスの授業において、教科書・進度・考査を共通にしたままでどこまで指導内容やタスクの差別化を図ることができるか、教科内で検討し工夫を重ねていきたい。</p>			

編 集 後 記

「平成30年度研究紀要第14号」の発刊にあたり、校務御多忙の中、貴重な原稿をお寄せ下さった先生方に、深く感謝申し上げます。

この研究紀要が今後の先生方の研修等に、少しでもお役に立てれば幸いです。

研修・国際部

平成30年度 研究紀要 第14号

発行 秋田県立横手清陵学院 中学校・高等学校
秋田県横手市大沢字前田147番地の1
電 話 0182-35-4033
FAX 0182-35-4034